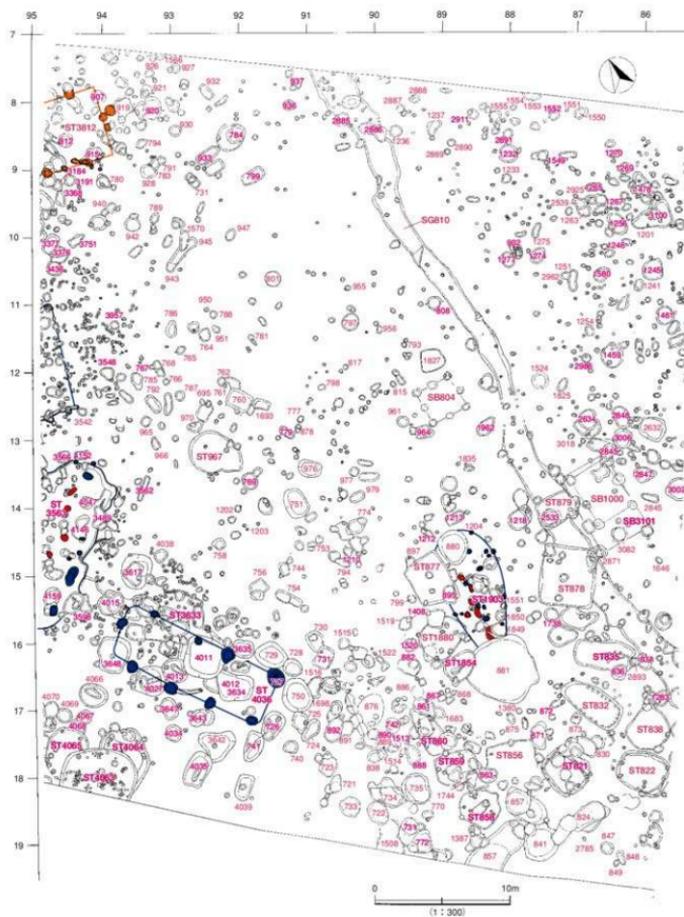
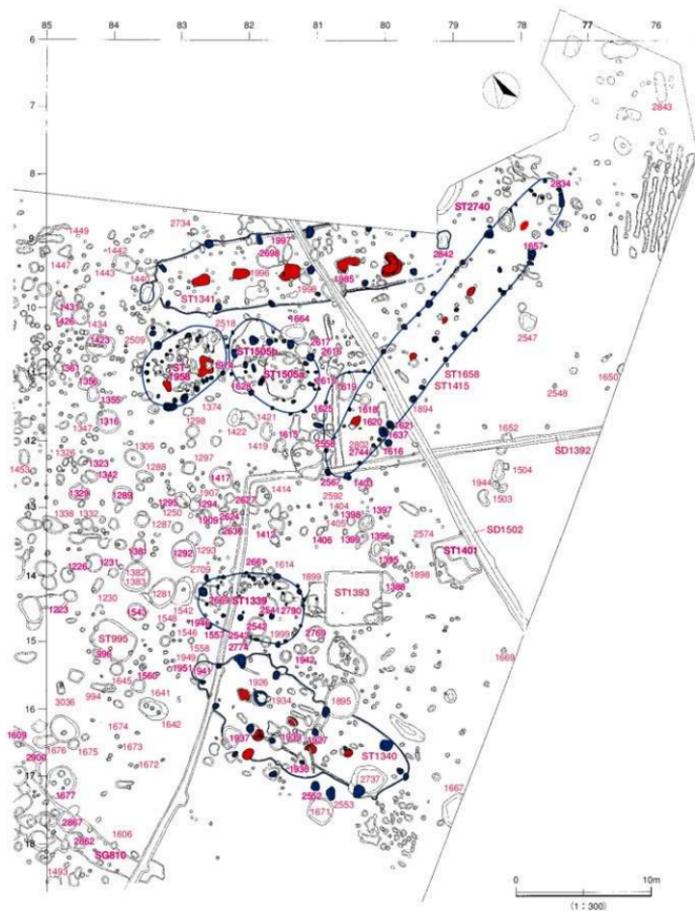


I 調査の概要



第11図 連携配置図 (7)

1 調査の概要



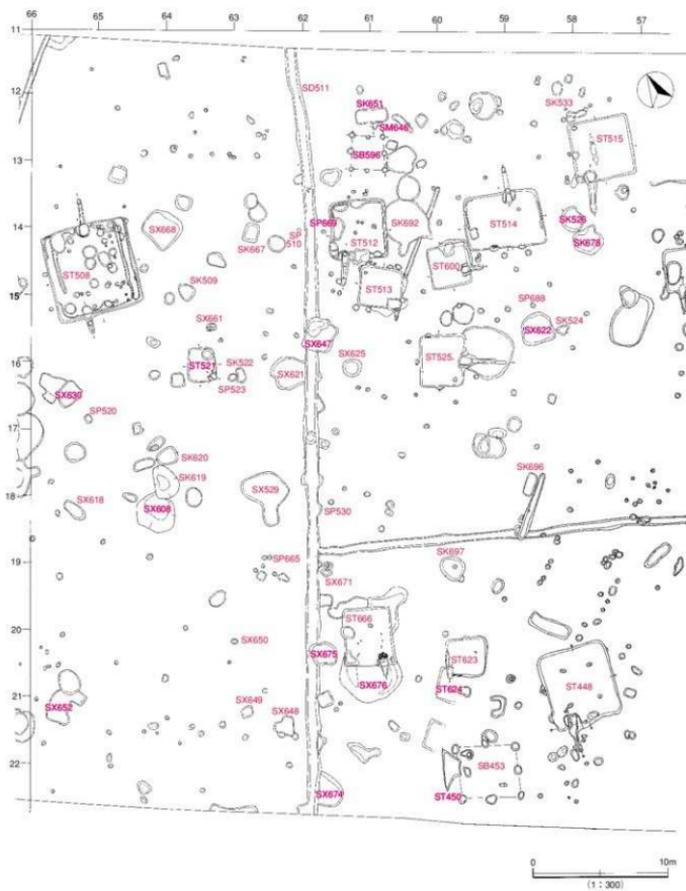
第13図 連携配置図(9)

I 調査の概要



第14図 遺構配置図 (10)

1 調査の概要



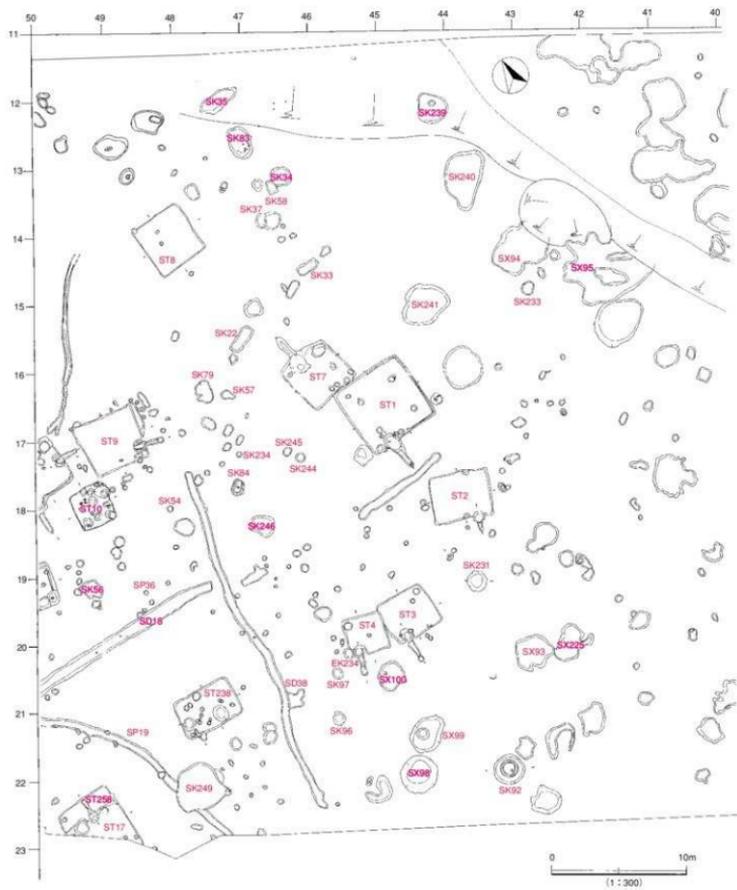
第15図 遺構配置図 (11)

I 調査の概要



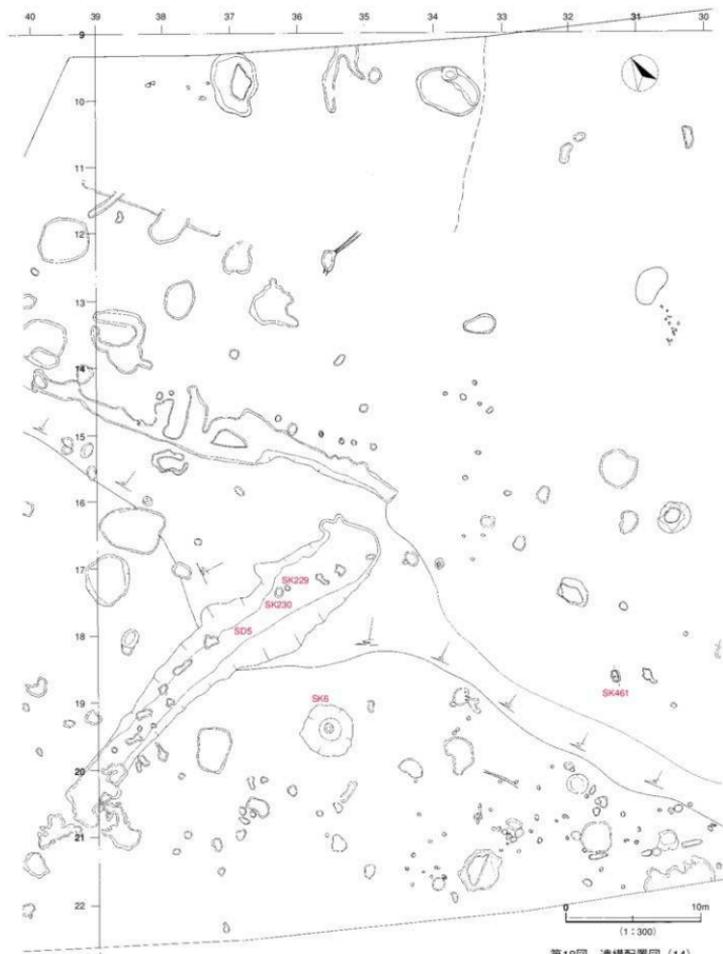
第16図 遺構配置図 (12)

1 調査の概要



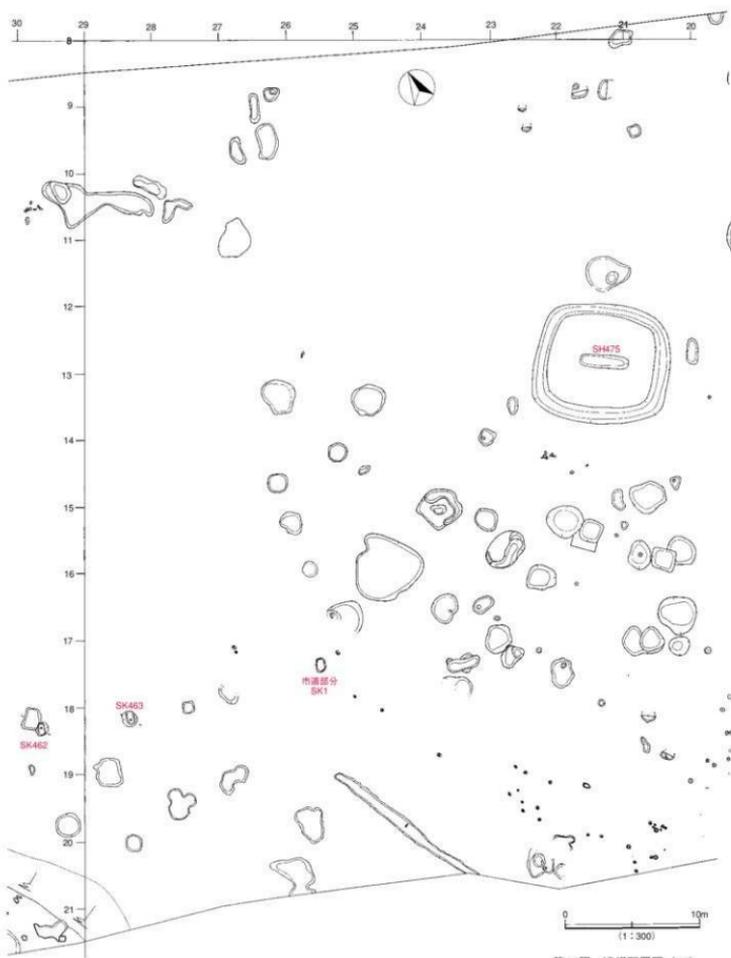
第17図 遺構配置図 (13)

I 調査の概要



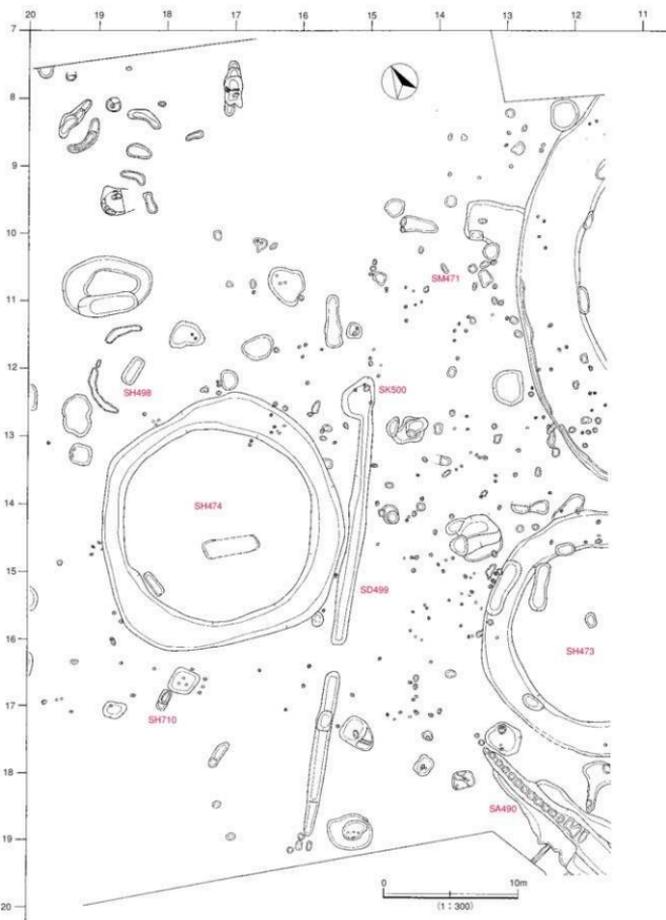
第18図 遺構配置図 (14)

1 調査の概要



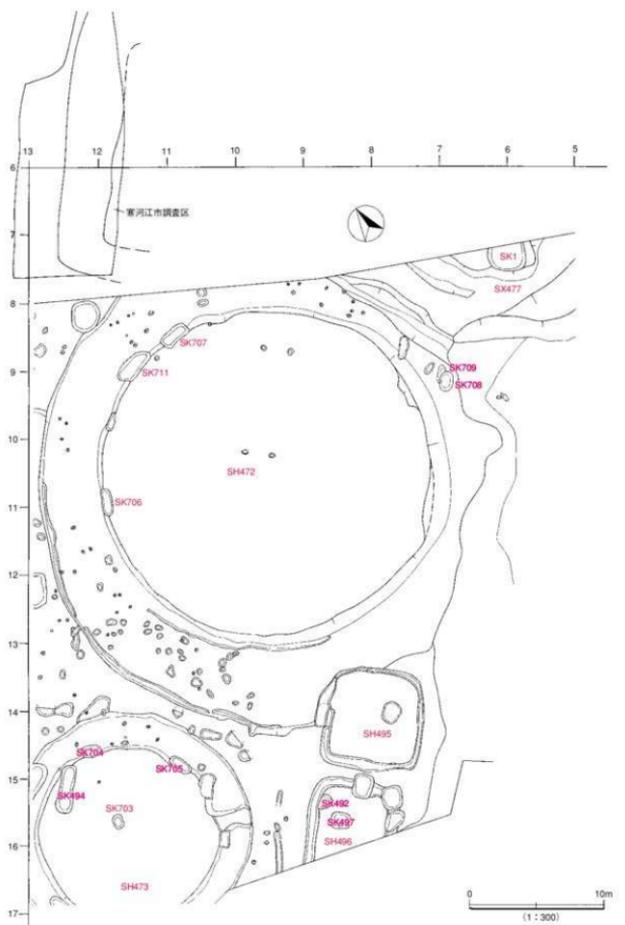
第19図 遺構配置図 (15)

I 調査の概要



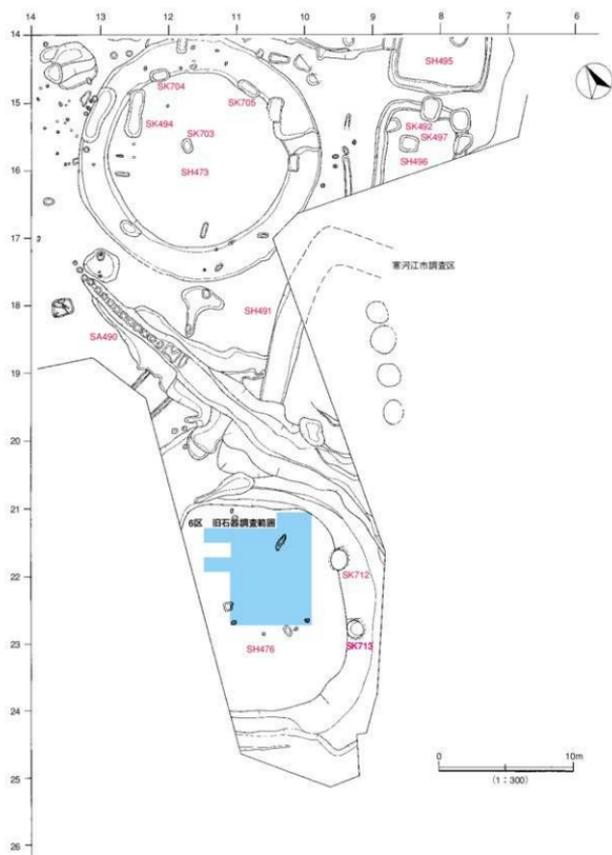
第20図 遺構配置図 (16)

1 調査の概要



第21図 遺構配置図 (17)

I 調査の概要



第22図 遺構配置図 (18)

1 調査の概要

- 遺構、墓塚、陥し穴、その他の土坑、溝状遺構・土器捨て場（遺物包含層）などが検出された。これらの遺構のほとんどは縄文時代前期後葉～末葉で、中位段丘の7・8区とした段丘西側部分に直径120mの環状集落を形成している。中位段丘面は、この縄文時代環状集落の東に4区→1区→6区と続いているが、縄文時代の陥し穴や土坑は僅かに検出されたものの、同時代の住居跡等の遺構は検出されていない。
- 縄文時代中期の竪穴住居跡が、中位段丘面の前期環状集落の西端と東端で2棟が検出されている。また、低位段丘の5区には同時代4棟の竪穴住居や埋設土器遺構が検出されている。5区の縄文中期集落の南側の低地には縄文時代から奈良・平安時代、中世までの土器捨て場とみられる遺物包含層が検出されている。
- 古墳時代では中位段丘の東側の6区で円墳、方形周溝墓、石組石棺など遺構9基が検出された。6区の古墳は現存の高瀬山古墳から東へ280m地点である。また、6区から北側へ約30mの地区は、昭和56年に寒河江市教委と県教委の調査で一辺20mの方形周溝墓が調査されている。さらに、市教委による平成12年の調査でも6区の隣接地域や自動車学校に隣接する地区、段丘北東部縁辺部などが調査され、方形周溝墓が数基検出されている。
- 古墳時代の集落については西側の低位段丘に所在する高瀬山遺跡2期地区やSA地区に隣接して位置する高瀬山遺跡H地区において、平成8～10年度の山形県埋蔵文化財センター調査及び市教委調査で古墳時代前期の住居跡が検出されている。
- 奈良時代の遺構は竪穴住居跡や掘立柱建物跡・土坑・井戸・溝・大型竪穴状遺構がある。奈良時代の竪穴住居跡は45棟を数える。その分布の中心は中位段丘上にある。この中位段丘の中でもその中心部に集落を形成している。段丘の西側7・8区にも数棟の竪穴住居が構築されている。台地東側の6区付近にも同様の平坦な段丘面が広がるが、古墳や方形周溝墓、合口墓棺などの墓域が広がり縄文時代以後、集落が形成されることはない。低位段丘の2・5区にもそれぞれ6～7棟の竪穴住居が構築される。
- 平安時代の竪穴住居跡は25棟である。その分布状況は奈良時代には中位段丘上にあった集落は低位段丘の2・5区に中心を移す。2期地区・SA地区・H地区の平安集落へと連なる。この時期の土坑や井戸も2・5区に多く所在する。6区にはこの時期の土坑や合口墓棺などがわずかに所在している。
- 高瀬山遺跡1期で検出された竪穴住居跡群の中で、その出土遺物から構築時期が明確に判断できない住居跡19棟については時期不詳の竪穴住居跡として時代の特定は行わなかった。しかし、時期不詳としたほとんどの住居跡は奈良時代～平安時代とみられる。
- 掘立柱建物跡は全体で63棟が検出されている。規模は2間×2間、2間×3間が多い。掘り方規模は長軸60cm～1mと大きいものが目立つ。低位段丘の2・5区では掘立柱建物跡が多く、特に5区では多数検出され重複する建物が多く、建て替えが繰り返されたとみられる。
- また奈良・平安時代の多数の土坑が検出されているが、特徴的な土坑は、1区・5区・8区で検出された所謂、大型竪穴状遺構（SK6・2341・3494・3590）である。
- 井戸跡は10基の井戸跡が検出されている。これらは全て低位段丘の2区・5区で検出されている。出土遺物から、ほとんどの井戸跡は奈良時代から平安時代に構築されたとみられる。
- 中世では2区のSE143井戸跡、5区のSE2344井戸跡、6区のSA490横列跡がある。



第23図 グリッド配置図

II 旧石器時代

1 1区の旧石器

A. 1区 旧石器出土地点の層序

1区の調査区がの高瀬山の段丘面は、地形区分4面に相当する(阿古島 功 1997)。

高瀬山周辺で旧石器時代の遺物が段丘堆積層に含まれるのは、高瀬山の標高112m、最上川との比高20mの区域にあたり、高瀬山の西に位置する金谷原遺跡(3+面)は、より低位の段丘面に相当し比高が18mである。1区付近はさくらんぼやりんご・桑等の果樹地域になっていたため、倒木や抜根の跡がいたる所で認められた。奈良・平安時代から縄文時代の遺構は倒木などで攪乱される場合があり、一部根の広がり、旧石器時代の包含層にも達している。

旧石器時代の石器群の層位的な包含位置を把握するため旧石器時代のブロックが検出されたグリッドの壁面を掘り下げ、地層の状況を観察した。調査が進むにしたがい、より下層にも包含層が存在することが確認され、最終的には段丘礫層を掘りきり、岩盤面まで掘り下げた。この掘り下げ箇所の上壁断面における観察結果をもとにした基本層序は以下のとおりである。発掘境界線は、地表下2m70cmである。

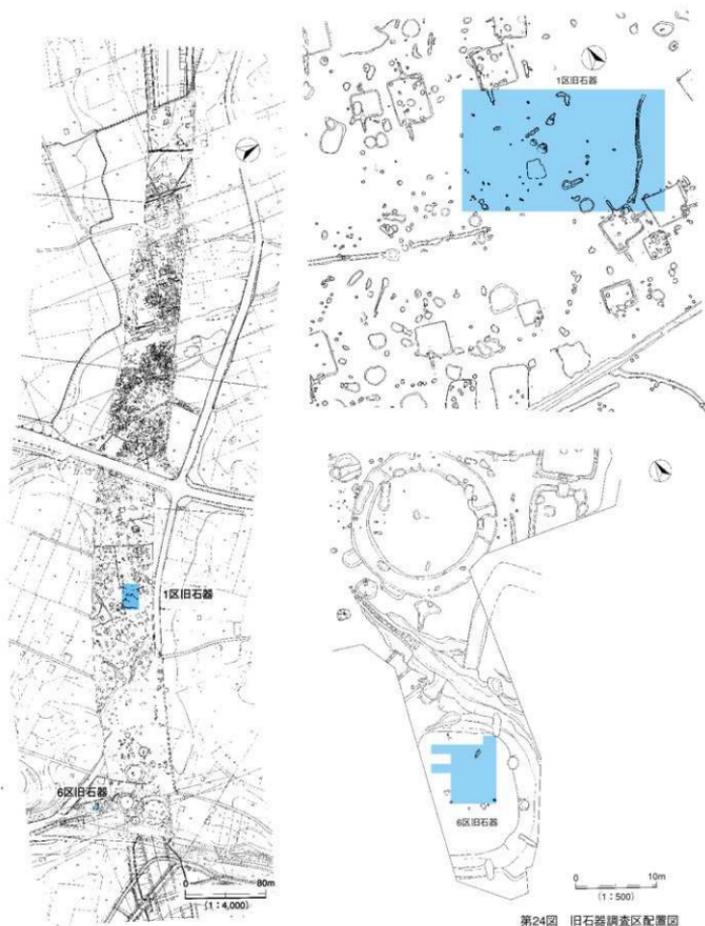
I層 耕作土	Ⅵ層 明褐色シルト層
II層 黒色土	Ⅶ層 褐色砂層
III層 漸移層	Ⅷ層 赤茶褐色砂層
IV層 明褐色風化火山灰層	Ⅸ層 赤茶褐色礫層
V層 明褐色粘土質シルト層	X層 黄褐色砂層
Ⅵ層 黄褐色粘土質シルト層	

以上の堆積層のうち、I～III層が縄文時代までの遺物包含層である。I～III層からは平安時代の土器から縄文時代の土器・石器が出土し、旧石器時代の遺物は、これらI～IIIの層準からも出土するが、耕作や根の攪乱などによる浮き上がりであり、本来の包含層はIV層中にある。石器群はIII層下部からまとまった出土を見せ始め、IV層中に集中して出土する。IV層に当時の生活面があると判断できる。IV層に集中する石器群を第I文化層とした。V層以下VI層までは無遺物層である。シルト層や砂層の堆積したⅥ層に相当するレベルから若干の石器が集中して出土する部分を確認した。これを第2文化層とする。

礫層からも散漫ながら摩滅している石器を検出し、検出レベルが上下しているものの礫層内出土のものを一括して第3文化層として区分した。第3文化層の礫層内から検出した炭化物のC¹⁴年代測定では、46,000 B Pの年代が示された(理化学的分析報告参照)。

石器群の年代を判断する1つの指標になるものと思われる。

II 旧石器时代



第24图 旧石器调查区配置图

B. 1区 旧石器時代遺物の分布

旧石器時代遺物は1区の中央部に分布し、高瀬山の丘陵部分でも全体の中心付近にあたる。旧石器が出土した部分を中心の約100mにわたって慎重に掘り下げを行いつつ、石器の出土状況の記録を行っていった。先に述べたように、層位的に3つの文化層を確認されたことから、それぞれの文化層の石器群の分布状況を説明する(第25図)。

第1文化層(第28～30図)

第1文化層として確認した石器群ブロックは大半がⅣ層からⅤ層にかけて出土しており、平面的な分布は、南北に15m、東西に10mの不整楕円形の範囲を示す。ここから1,565点の旧石器時代の石器群が検出され、浅い落ち込みも確認したが、風倒木痕などによる自然的な落ち込みとも考えられる。全体としては大きく1つにまとまっているものの細部においては、北側や南側において、小規模な集中域を構成しているようで、幾つかの小さなブロックから大きなブロックが形成されているともいえる。さらに周囲10mの範囲にまばらに石器が分布している。

Ⅳ層上～中位

層位的な分布の傾向として、遺物の垂直分布からブロックの中心部をピークにレンズ状に分布していることが窺え、集中した状況を見せている。剥片類が集中して遺存するレベルを生活面認定の一つの目安になるとみている。第1文化層の石器群ブロックは剥片類の集中したレベルをもとにすればⅣ層上～中位にかけて生活面があると捉えておく。

第2文化層(第39図)

第2文化層として確認した石器群ブロックはほとんどがⅥ層からⅦ層にかけて約20cmの高低差を持って出土しており、平面的な分布は深掘区の全域からまばらに出土した。ここから22点の旧石器時代の石器群が検出された。全体として1つにまとまっているものかどうか、分布は周囲に広がることも予想され、部分的な分布状況を検出しているようでもある。

Ⅵ層～Ⅶ層

石器群ブロックとしては一方所の確認となったが、散漫な分布と資料数の少なさは注目される。砂礫を含む旧河道の堆積層部分になるためか、石器資料のすべてが摩滅を受けたものである。流水の動きによって本来の位置から移動し、かつ物理的な衝撃から後やエッジがつぶれた状況を見せている。出土した石器は、石刃として分類できるものである。

第3文化層(第41図)

砂層とシルト層の堆積層の下、段丘礫層内の出土石器群を第3文化層とした。深掘りした範囲5×5mのほぼ全域から60cm程の高低差をもって検出された。石器群はすべて摩滅しており、流されるなどの現象から砂礫とぶつかり摩滅したものと見られる。当初、自然的な偶発的な生成による偽石器と考えたものの、形態的に石刃や人工的な加工を受けた石器と判断できる属性を持っていたため、人工的な遺物と捉えた。ただ、礫層からは頁岩の自然礫も出土することは考慮すべき点である。

段丘礫層

C. 検出した遺構

1区の第1文化層の石器群を精査していく過程で、4カ所の性格不明の落ち込みを確認し、落ち込みによって、掘り下げを行った。形状や石器の出土、堆積層などについて説明する。

性格不明の落ち込み

II 旧石器時代

S K 486 (第31図)

上面で長径122cm、短径80cmを測り、底部は一部深く落ち込み部分をもつ。石器群の集中部北側に位置し、覆土内にも多数の剥片が入り込んでいた。この落ち込みについては、石器類が散在して分布する点、落ち込み外にも石器が包含する点、堆積土の状況などから倒木痕等の攪乱に石器が入り込んだものではないかとみている。

S K 487 (第31図)

S K 486に近接して検出した。長径約1mの楕円形の形状に深さ20cmほどの浅い掘り込みを確認した。覆土や底部付近から石器が出土した。

S K 488 (第32図)

石器を取り上げる過程で確認し検出した。長径約1m50cmの長楕円形で深さ5cm程度の浅い落ち込みである。ただ、旧地形面の凹凸状況を示していることもあり、遺構としての判断は難しい。底部付近から石器がまとまって出土し、幾つか接合している。

S K 489 (第32図)

全体的に浅い落ち込み部分に石器が入り込んだ状況となっている。人為的なものかどうか判断がつかなかった。

D. 1区出土の旧石器時代石器群の概要

1区の旧石器時代ブロックの石器の組成の内容としては尖頭器をはじめ、掻器、石刃、剥片、砕片などで、利器としての石器は量的に少なかった。一方、石器製作に関わる石器類が大半を占めている。これらの石器の石材については、すべて頁岩であり、同一母岩と思われる石器類が多い。以下、出土した石器の概要を述べる。

第1文化層 (第33～38図)

尖頭器 (第33図1)

器体中央部で破損し、表面には素材の稜面が残る。比較的大型の尖頭器を製作中に破損した資料と思われる。

片面加工尖頭器 (第33図2)

剥片の背面に周辺からの器面調整剥離を行い、尖頭器状に整形した石器である。

ナイフ形石器 (第33図3)

背面右側面に切り出し部を残し、他周辺は加工され、尖頭状に整形される。腹面の剥離痕の観察からは、整形した素材は石刃とは異なるようである。

船底形石器 (第33図5)

甲板面はネガティブな面であり、剥離方向に縦長に整形される。甲板面及び底部からの調整剥離によって船底状に作り上げられ、甲板面からの細かい剥離により仕上げられている。細石刃核の母形というよりも完成した石器と考えたい。

掻器 (第33図4)

薄く幅広い剥片を利用し、背面周辺に加工がなされ、打面部は除去されている。

石核 (第34～37図)

石核は4点出土している。剥片と接合したものもある。第34図20は石刃状剥片を生産した石

核とみられる。正面を中心に剥離作業が行われ、3枚の石刃状剥片の剥離痕が残る。背面・底面には表皮が残り、最終的に石核正面の剥片剥取が困難となり廃棄されたとみられる。

石刃状剥片

やや縦長の剥片で、石刃としては短いものが多い。これは、出土している石核の作業面の長さからも推測されるところで、残されている資料には、稜面があるものが多い。打面は幅があり、複数の切り合いが認められることや、平坦なものも様々である。石材として頁岩素材のものが多数を占めるが少量ながら黒曜石製の石刃が出土している。

剥片・破片

剥片・破片は多数出土している。その中の一部資料を図示している。剥片類の中には、破損や切断、加工の痕跡を残すものなど様々見受けられ、同一母岩と思われる石器資料も多数存在し、その幾つかは接合している。

接合した資料について

出土した石器群を母岩別に分類し接合作業を行った。接合作業は十分ではなかったが7個体の資料について接合関係を確認した。今後さらに増加すると思われるが、現時点での成果の一部を報告する。

母岩別接合

接合資料1 (第34図)

大型の石刃が途中で切損したものが接合した。長さ10cmを超える大型の石刃で打点部分も切損している。背面右側面に直線状に二次加工が施され、刃部を形成している。作業面が15cmほどを持つ石刃核が準備され、剥離されたものと考えられる。

石刃生産

接合資料2 (第35図)

当資料は合計5点の石器が接合した。復元された接合資料は石核が準備され、目的とする剥片がある程度剥離され作業が進行した状況のみせるもので、底部付近に稜面を残している。作業面は側面をめぐり、多数の剥離痕跡を残している。石核は剥片の剥離と打面の調整等を繰り返し、幅広く円錐状の形態になっていったと思われる。石核の作業面調整剥片や打面調整剥片が接合したことから煩雑に打面を移動しつつ目的とする剥片を得ようとする意識が看取できる。

接合資料3 (第36図)

当資料は合計7点の石器が接合した。総重量は410gを量る。復元された接合資料は石核から目的とする石刃状の剥片を剥離し、薄く扁平な石核が残される状況のみせるもので、上下左右に作業面の痕跡が認められ、打面が転移している様子が看取できる。作業面となった部分はいずれも数枚の剥離痕が確認でき、接合した資料は作業面部分に接合している。作業面が打面になり、そこから剥離作業が展開するというプロセスが窺える。この石核と同一母岩の資料はいくつかあるものの接合を確かめられたのは7点のみである。

接合資料4 (第37図)

石核に2点の剥片が接合した。箱型の母岩の側面に横方向から数回剥離を施し、稜面除去と打面を形成し、その後、作業面に対して、数回の剥片剥離作業を施している。作業面中央に剥離に失敗したとみられる小さな剥離痕が集中していることから剥片生産を途中であきらめ、放棄したものと考えられる。ももとの母岩選択を理解することのできる資料である。

II 旧石器時代

接合資料 5 (第38図)

縦長剥片が2点接合した。2点ともに内側に内向気味に反っていることから、石核は円錐形となっていたものと考えられる。

接合資料 6 (第38図)

石刃状の剥片が2点接合している。

接合資料 7 (第38図)

長さ10cm程の石刃状剥片に小さい剥片が接合した。打面部が比較的大きい。背面の剥離痕から連続して石刃状剥片が剥取されたことが伺える。

剥片の生産技術について

石器生産の工程 一般に石器の生産工程は石核の準備→作業面・打面の設定→作業面調整→目的剥片の剥取→作業面・打面調整・再生転移→目的剥片の剥取……残核のような段階を経て行われる。接合資料や剥片類から石器生産の工程を以下のように整理した。

①石材・石核の準備

接合資料2・4はやや扁平な角礫を、接合資料3はどんぐり形の頁岩を母岩としたと推測する。

②作業面の設定

準備された頁岩の形態や作業面との位置関係から表皮部分の礫面除去により、打面部が決定する。作業面をどこに設定するかを意識が先行している感がある。

③石核の調整加工

礫面部の除去や打面の調整剥離など、意図的な剥離準備が行われている。打面は周辺からの調整加工から形成し、打面から作業面への調整剥離も施される。

④目的剥片生産

作業面と打面の相対的な位置関係は一定しつつも、効率や能率性から打面が転移する。そのため、目的剥片の剥離の連続性にも限りが認められる。(接合資料3)

石刃の生産を目的としているものの強い規制や技能は把握できず、縦長剥片との区別が明確でない資料も多い。

⑤作業面・打面の調整

剥離ミスや打角の補正にともない、再調整が行われる。

⑥転移・再生

接合資料からは打面の転移が煩雑に確認される。

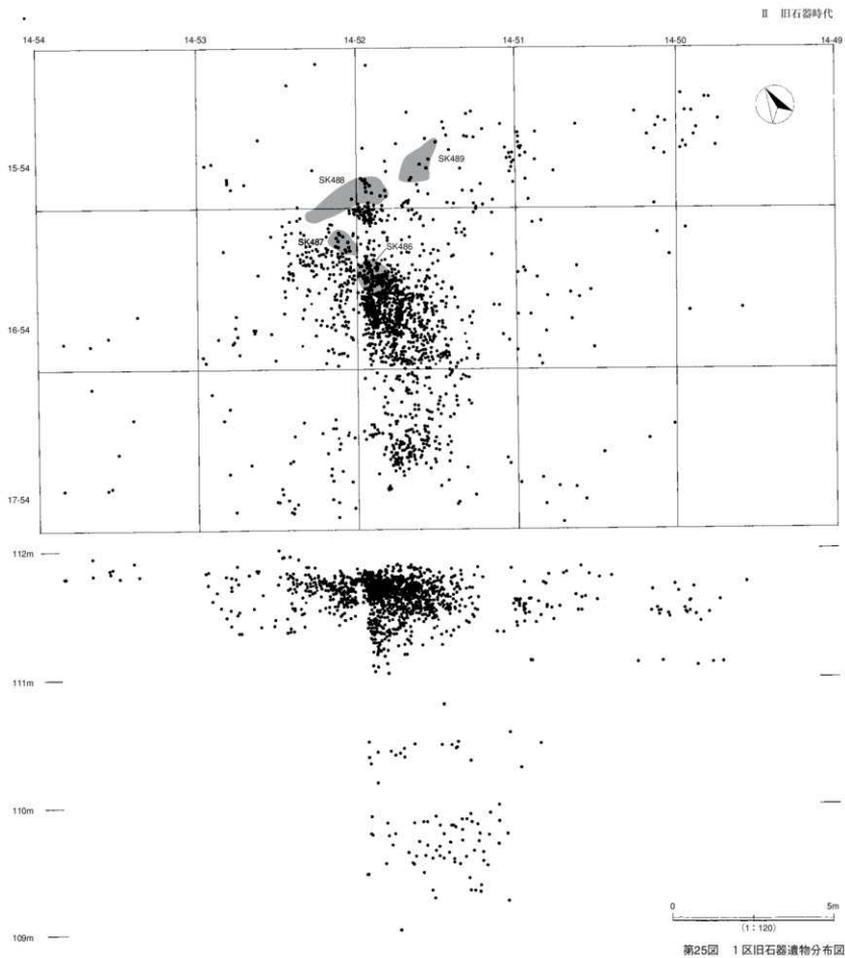
⑦廃棄

残核が廃棄されていることは、搬入から廃棄までの行為が一貫しており、かつ比較的短い期間で生産活動がなされたと思われる。

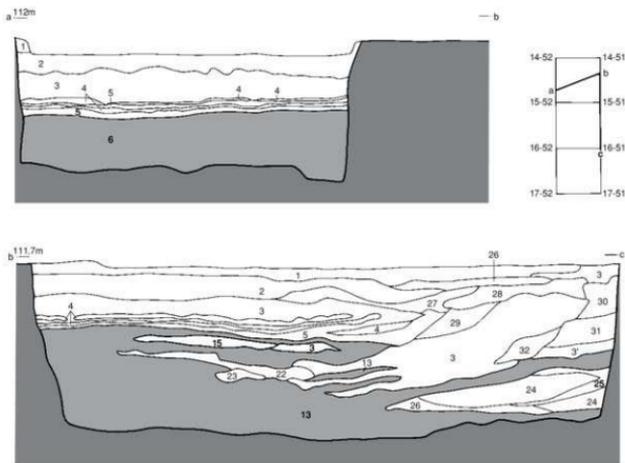
製作された石器

尖頭器やナイフ形石器

第1文化層出土の「石器」としては、第33図に示した尖頭器やナイフ形石器、挿器などがある。石器素材の生産として石刃を製作する技術が整っており、ナイフ形石器や挿器の素材となっている。また、尖頭器の大きさや形態をみると片面加工の小型の尖頭器は、新潟県真人原遺跡などからまとまった検出例が報告されており(小野 昭他 2003)、素材の生産となる



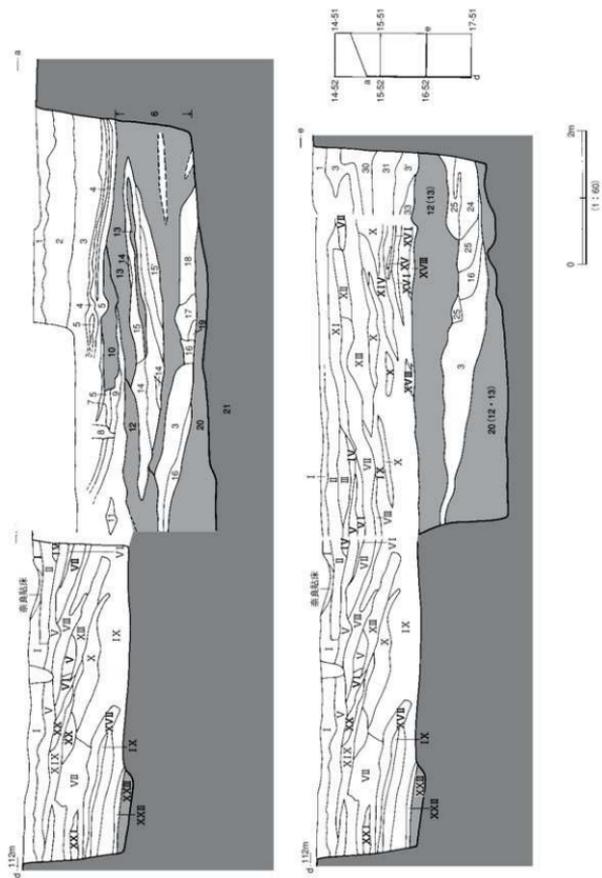
第25図 1区旧石器遺物分布図



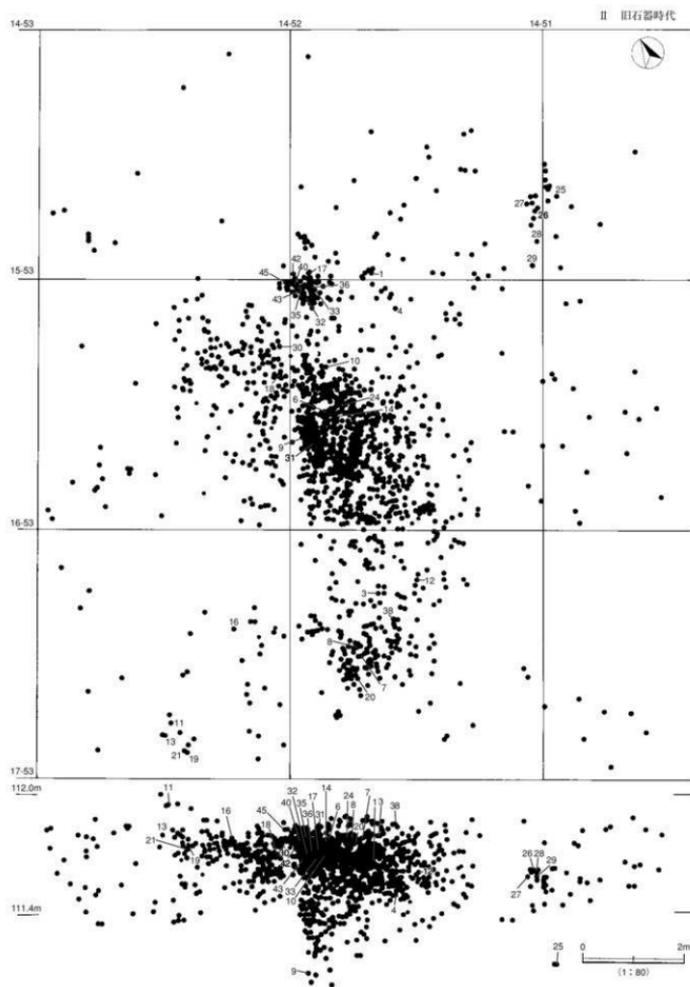
- | | |
|--|---|
| <p>1 黄褐色粘質土 灰白色土粒少量混入
2 黄褐色粘質土 灰白色粘土を粗粒状に混入
3 灰白色粘質土 褐色土粒（マンガン）少量混入
4 灰白色粘質土 褐色土粒（マンガン）多量に混入。酸化している
5 赤褐色色砂質土 3を多量に混入。マンガンを多量に混入
6 灰白色粘質土 粘土混入が、より砂質
7 赤褐色粘質土 礫、及びその灰白色土を多量に混入
8 灰白色粘質土 3とほぼ同じだが、よりマンガン少量混入
9 黄褐色粘質土 灰白色粘質土を混入。グライ化多い
10 赤褐色粘質土 礫少量混入。小礫は1cm混入
11 灰白色粘質土 礫少量混入。14とほぼ同じ
12 黄褐色粘質土 礫少量混入が、色調が黄褐色で灰白色粘土（10）を混入。一部粘土粘土混入
13 灰白色粘土 小礫（2-3cm）と灰白色粘質土を多量に混入。11とほぼ同じ
14 黄褐色粘質土 10と同様だが、礫はほとんど混入しない（グライ化少ない）
15 黄褐色粘質土 10と同様だが、礫はほとんど混入しない（グライ化少ない）
16 灰白色粘土 灰白色粘質土少量混入
17 灰褐色粘土 礫、わずかに混入（小礫、小礫）
18 灰褐色粘土 礫（1-3cm）多量に混入
19 黄褐色粘土 17と同様だが、礫はほとんど混入しない
20 赤色-赤褐色粘土 グライ化多い
21 褐色土 礫、砂質
22 灰白色粘質土 3と同様だが、やや中礫や礫混入する
23 灰白色粘質土 22と同様だが、灰白色粘土多量に混入。礫とほぼ同じである
24 赤褐色粘土 13と同様にしているが、やや灰白色多量
25 灰白色粘土 2と同様だが、灰白色粘土をわずかに混入しない
26 黄褐色粘質土 2と同様だが、より灰白色粘土や中礫を少量混入
27 黄褐色粘質土 27より灰白色粘土や中礫を少量混入
28 黄褐色粘質土 27と同様だが、礫はほとんど混入しない
29 黄褐色粘質土 灰白色土粒、同アロックス多量混入
30 褐色粘質土 色調は10のグライ化のためか
31 灰白色粘質土 3と同様だが、礫と中礫を少量混入
32 灰白色粘質土 3と同様だがよりやや砂質である
33 灰白色粘質土 一部グライ化黄褐色土を混入
3を少量混入している</p> | <p>I 黄褐色土 礫及び白土（灰土）をわずかに混入
II 黄褐色土 白土土粒を多量に混入
III 黄褐色土 礫と中礫を多量に混入
IV 灰白色土 礫のやや有り、（灰土混入）黄褐色粘質土少量混入
V 灰白色土 礫と中礫を多量に混入
VI 灰白色土 礫と中礫を多量に混入
VII 黄褐色土 礫と中礫を多量に混入
VIII 黄褐色土 礫と中礫を多量に混入
IX 黄褐色土 礫と中礫を多量に混入
X 黄褐色土 礫と中礫を多量に混入
XI 黄褐色土 礫と中礫を多量に混入
XII 灰褐色土 礫と中礫を多量に混入
XIII 灰褐色土 礫と中礫を多量に混入
XIV 灰褐色土 礫と中礫を多量に混入
XV 黄褐色土 礫と中礫を多量に混入
XVI 黄褐色土 礫と中礫を多量に混入
XVII 黄褐色土 礫と中礫を多量に混入
XVIII 黄褐色土 礫と中礫を多量に混入
XIX 黄褐色土 礫と中礫を多量に混入
XX 黄褐色土 礫と中礫を多量に混入
XXI 黄褐色土 礫と中礫を多量に混入
XXII 黄褐色土 礫と中礫を多量に混入
XXIII 黄褐色土 礫と中礫を多量に混入
XXIV 黄褐色土 礫と中礫を多量に混入</p> |
|--|---|

第26図 1区旧石器土層断面図(1)

II 旧石器时代

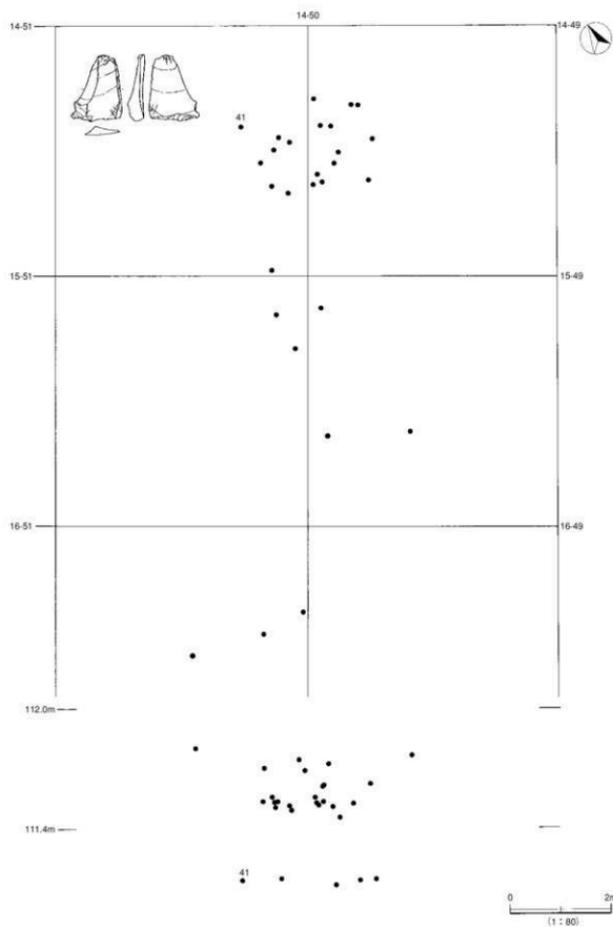


第27图 1区旧石器土层断面图(2)



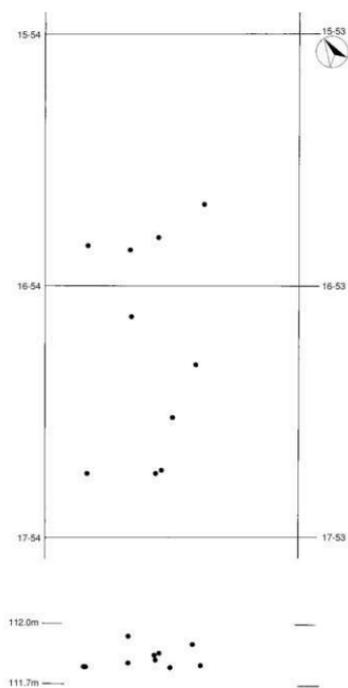
第28図 第1文化層遺物分布図(1)

II 旧石器時代



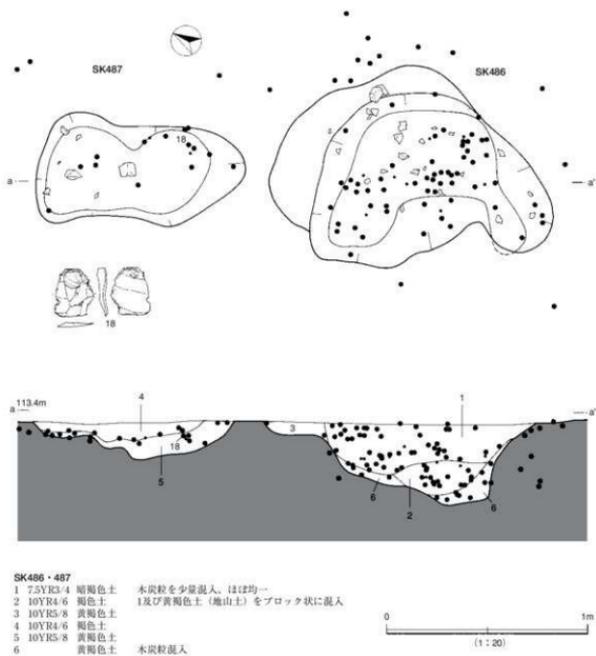
第29図 第1文化層遺物分布図(2)

II 旧石器時代



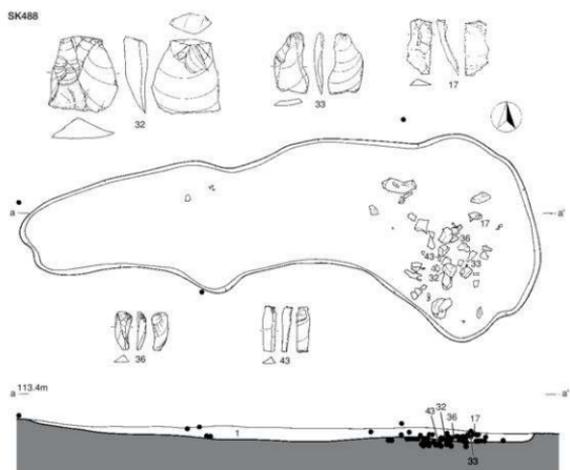
第30図 第1文化層遺物分布図(3)

II 旧石器時代



第31図 SK486・487 遺物分布図

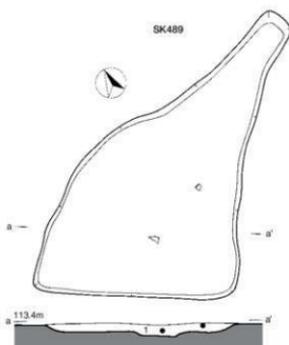
II 旧石器時代



SK488

1 10YR5/6 黄褐色土

赤褐色粒（スコリア？）を多く混入。周辺の地山よりやや暗褐色を呈する（わずかである）
黒色土（黄褐色土粒混入）ブロックを少量混入、本根あり



SK489

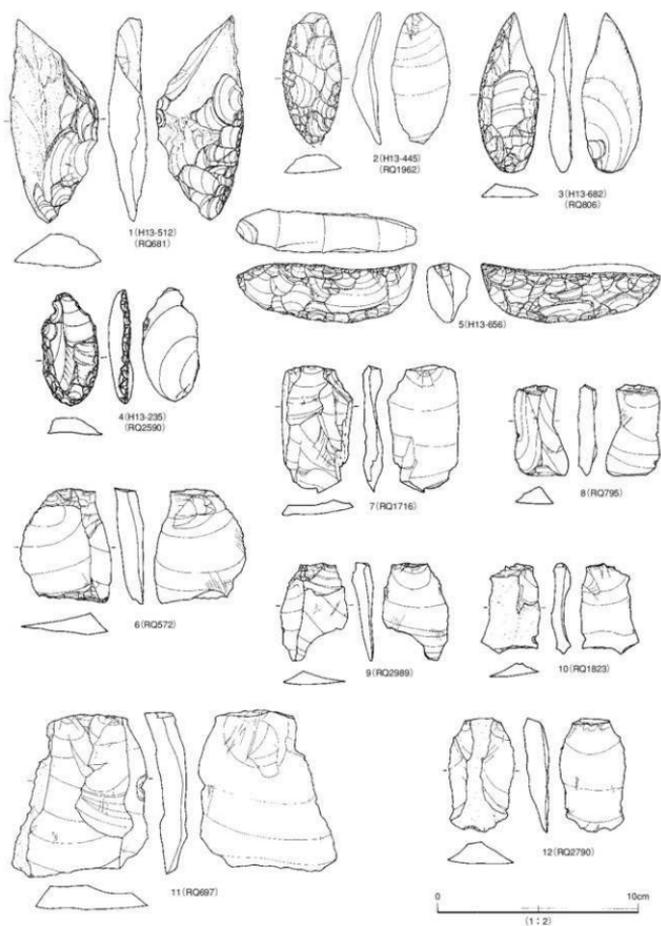
SK489

1 暗褐色土 本根粒わずかに混入

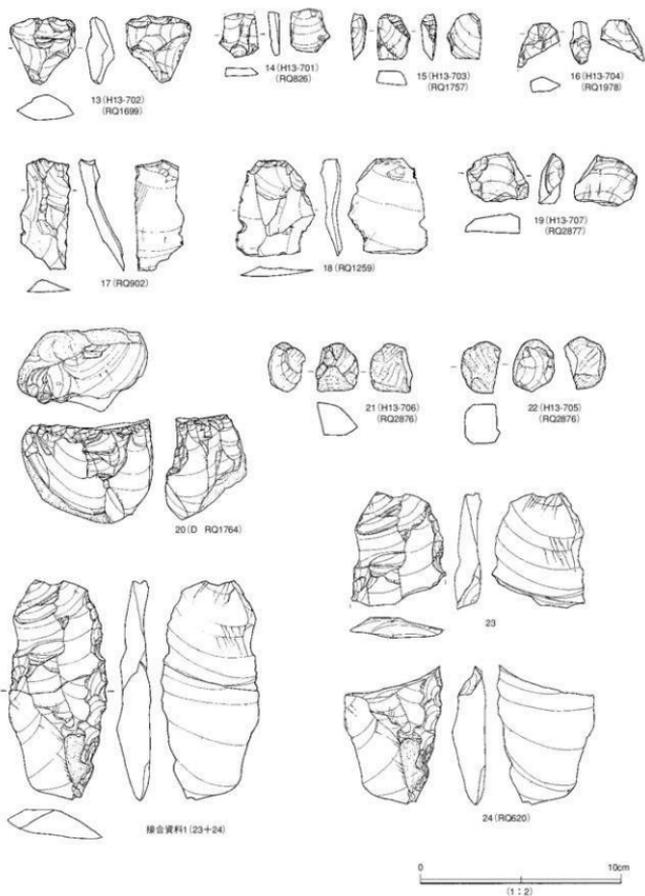
0 1m
(1:20)

第32図 SK488・489 遺物分布図

II 旧石器時代

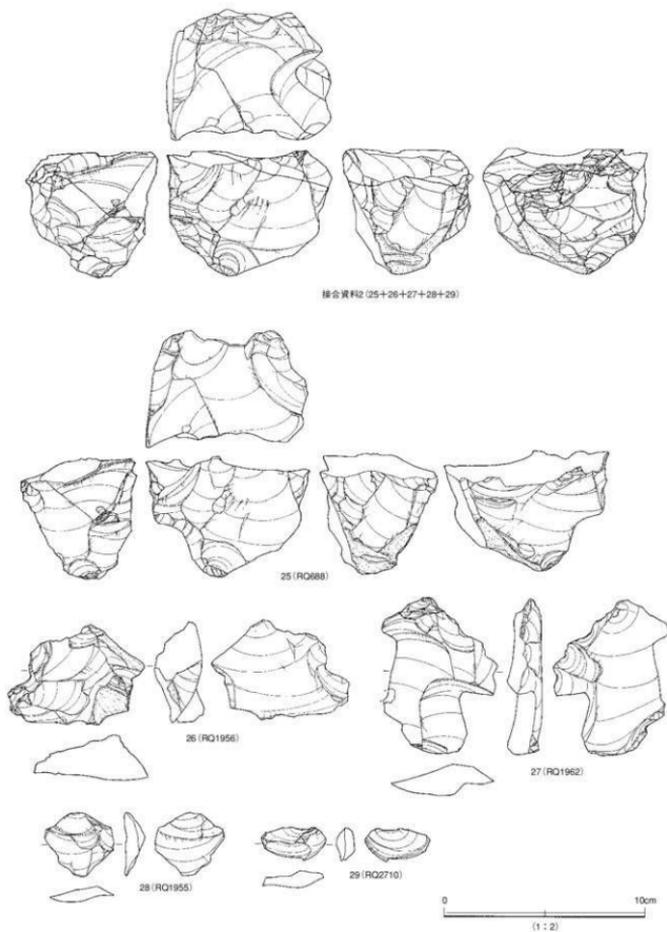


第33図 第1文化層出土遺物 (1)



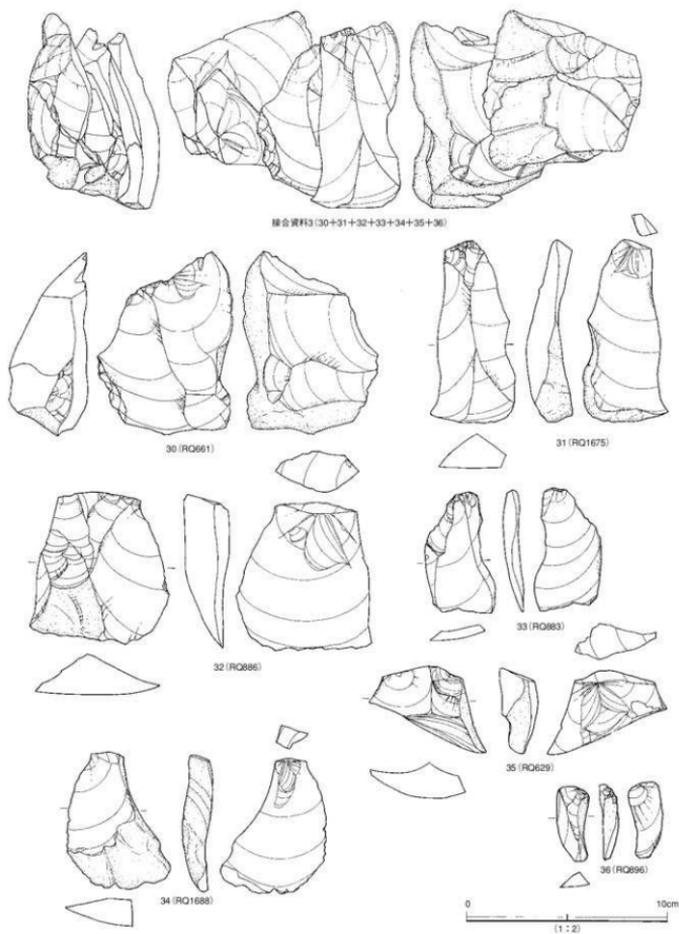
第34図 第1文化層出土遺物(2)

II 旧石器时代



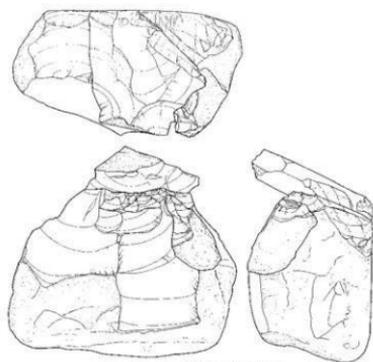
第35図 第1文化層出土遺物(3)

II 旧石器时代

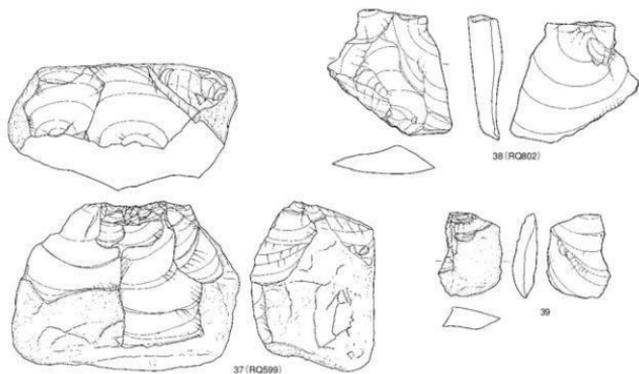


第36図 第1文化層出土遺物(4)

II 旧石器時代



綜合資料(37+38+39)



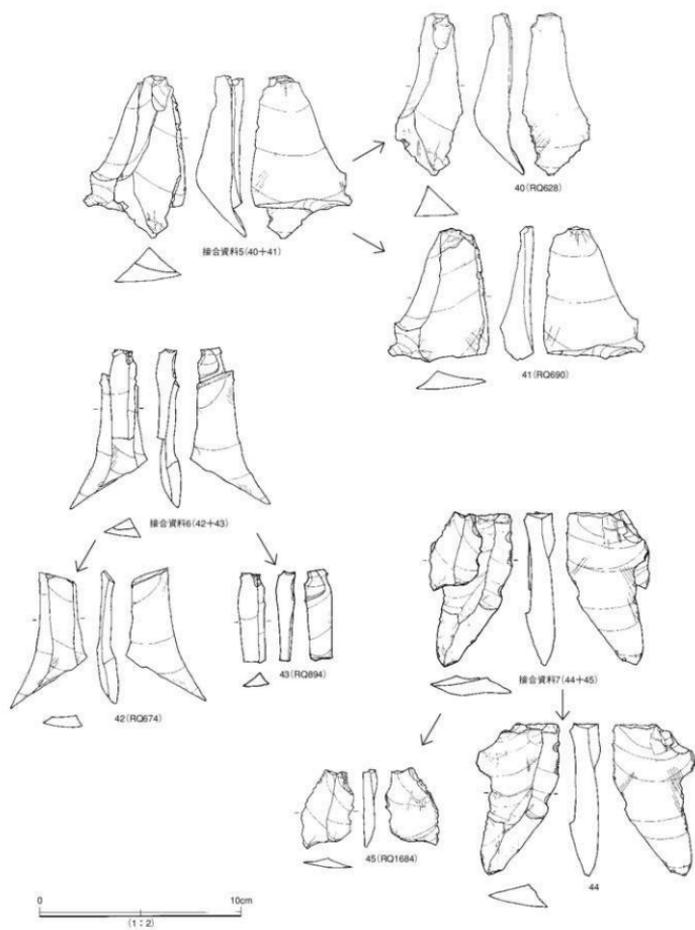
37 (RQ599)

38 (RQ802)

39

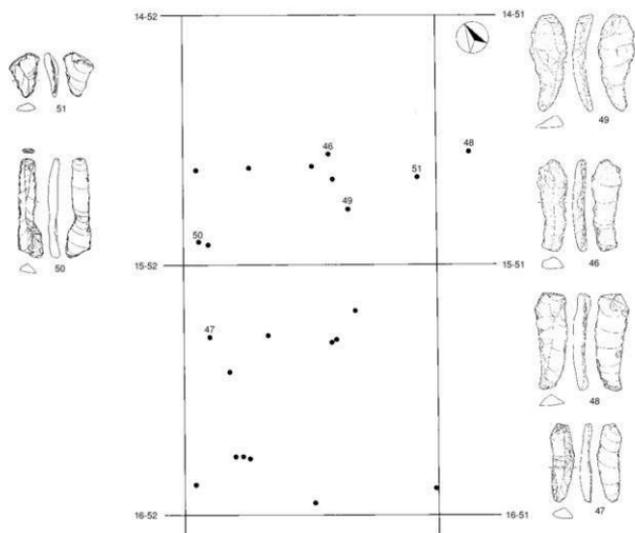


第37図 第1文化層出土遺物(5)



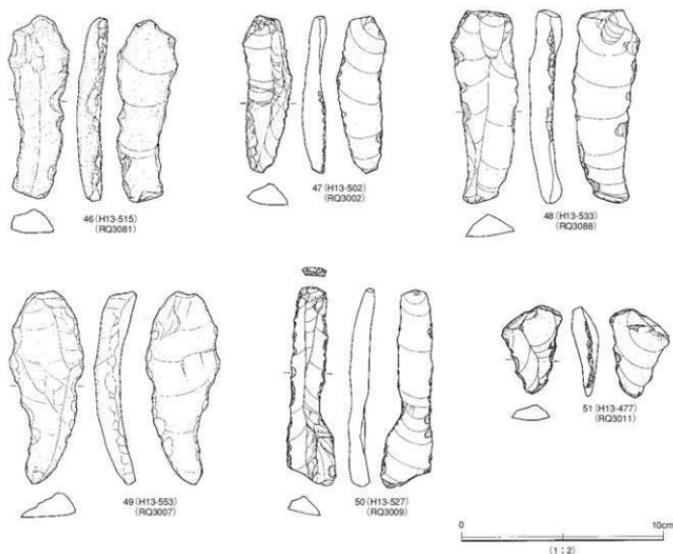
第38図 第1文化層出土遺物(6)

II 旧石器时代



第39図 第2文化層遺物分布図

II 旧石器時代



第40図 第2文化層出土遺物

剥片生産技術にも類似する部分があるようである。また、ナイフ形石器は、尖頭器とナイフ形石器の系譜上に位置するとみられ、石器群の構成から西川町上野A遺跡や小国町平林遺跡などの関連が指摘される。

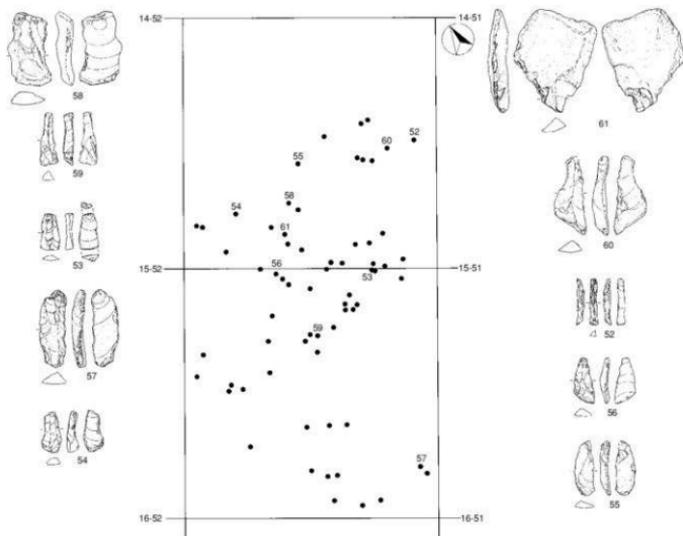
第2文化層 (第39・40図)

頁岩製の石器が22点出土した。中でも石刃がまともっており、第40図に示したように、すべて表面の摩滅したものである。第40図48などは縦長で湾曲しており、単設打面と思われる連続した剥離面を残している。長幅比が一定しており、時期的技術的に共通性が感じられる。また、どの石刃も刃部のガジリが激しく、砂礫中での二次的な影響によるものだろう。

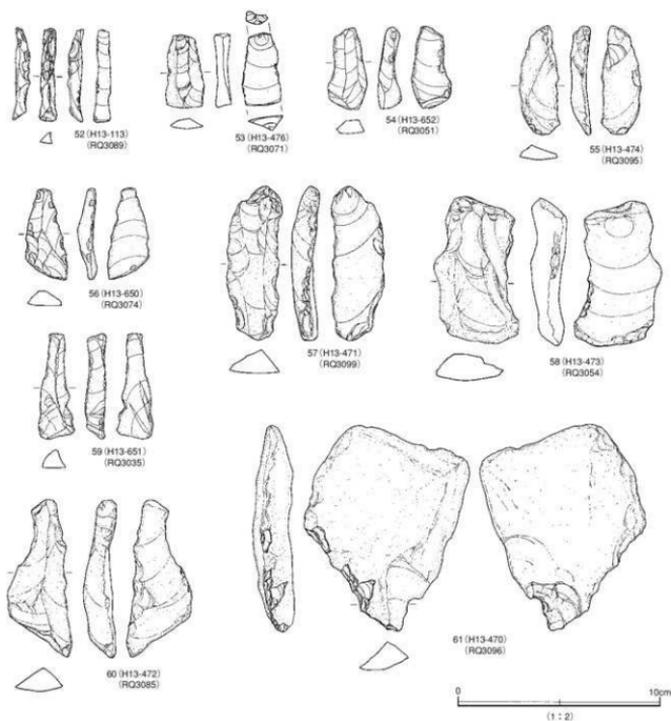
第3文化層 (第41・42図)

石器や石片を66点検出した。いずれも表面が摩滅しており、疑わしいものも含まれているため、人工のものと思われるものを図示した。第42図52～54は石刃と見られ、52は横付き石刃とみられる。61は原石に打ち欠いたような剥離痕が認められるが自然の営力による剥落痕の可能性がある。

II 旧石器时代



第41図 第3文化層遺物分布図



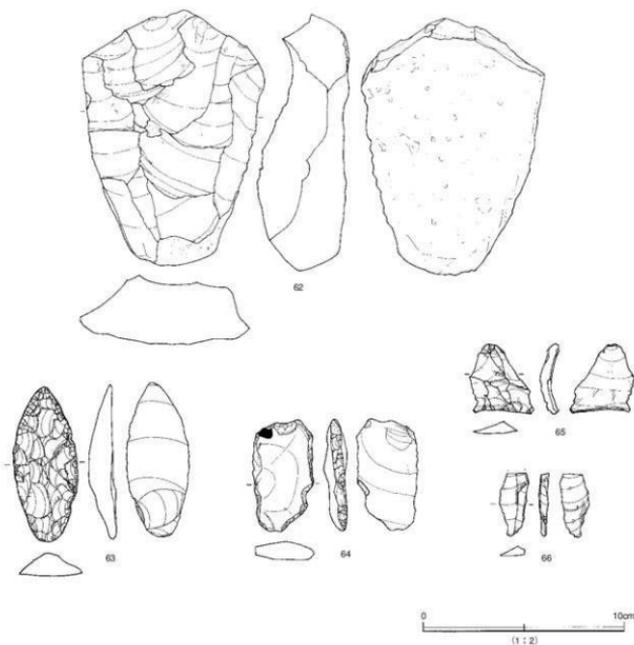
第42図 第3文化層出土遺物

第2文化層の石刃石器群のグループと両者の型式学的な検討からは判別がむずかしく、層位的な上下関係によって区別しておいた。

E. 1区検出の旧石器ブロックについて

第1文化層の遺物については分布や組成から石器の製作の場であると思われる。大型の剥片や礫面を持つ資料が多いことから、原石の搬入後の一次処理の段階から行われているものと見られる。完成された石器が少ないことから、製作された石器の大半は調査区外に持ち運ばれた

II 旧石器時代



第43図 1区旧石器グリッド出土遺物

と考えられる。また単一のブロックを成しているもの、微視的には幾つかの小さい集中域を持つことは時間的に長期にわたる作業場と考えられる。ここから西側30mほどの地点から、寒河江市教育委員会の調査で、旧石器時代の石器製作のブロックが2カ所発見されている（寒河江市教育委員会 1987）。ここでは掻器といくつかの接合資料が得られており、剥片生産の状況など類似する部分が見とめられ、やや地点が離れているものの1つの石器文化を構成する可能性を指摘しておく。

第2文化層の石器群については石刃石器群のグループとしてまとまっており、移動しているものの技術的に類似したグループの所産と考えた。打面の転移を示す資料は少なく、連続的に剥離取得した状況を示唆する。第3文化層の石器群は、摩滅しながらも形態的には石刃石器群のグループとして理解されよう。ただ、組成や技術的な部分での特徴ははっきりせず、第2文化層の石器群との区分も明確にできなかった。

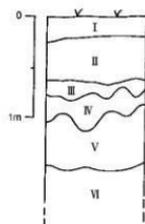
2. 6区の旧石器

A. 6区 旧石器出土地点の層序

6区の調査区がのる高瀬山東側の段丘面は、地形区分4面に相当する(阿古高 功1997)。高瀬山周辺で旧石器時代の遺物が段丘堆積層に含まれるのは、高瀬山の標高112m、最上川との比高20mの区域にあり、高瀬山の西に位置する金谷原遺跡(3+面)は、より低位の段丘面に相当し比高が18mの地点である。6区付近はさくらんぼやりんごの果樹地になっていたが、以前は桑畑や雑木林だったことがあり、倒木や抜根の跡がいたる所で認められた。一部の奈良・平安時代から縄文時代の遺構は倒木などで覆乱される場合があり、さらに根の広がり、旧石器時代の包含層にも達している。

旧石器時代の石器群の層位的な包含位置を把握するため旧石器時代のブロックが検出されたグリッドの西側の壁面を掘り下げ、地層の状況を観察した。この掘り下げ所の南西壁断面における観察結果をもとにした基本層序は以下のとおりである。発掘境界線は、地表下1m30cmである。段丘礫層までは、さらに約2mの堆積がある。

- I層 耕作土
- II層 黒色土
- III層 漸移層
- IV層 明褐色風化火山灰層
- V層 明褐色粘土質シルト層
- VI層 黄褐色粘土質シルト層



第44図 6区旧石器土層柱状図

以上の堆積層のうち、I～IV層が遺物包含層である。I～III層からは平安時代の土器から縄文時代の土器・石器が出土する。旧石器時代の遺物は、これらI～III層の層序からも出土するが、耕作や根の覆乱などによる浮き上がりであり、本来の包含層はIV層中にある。石器群はIII層下部からまとまった出土を見せ始め、IV層中に集中して出土する。IV層に当時の生活面があると判断できる。V層以下は無遺物層である。シルト層や砂層の下は砂礫層に到達する。I～IV層は風成層、V層以下は水成層と考えられ、水成層から風成層へ移行するV層の上部は水平堆積ではなく、凹凸が多い。

B. 旧石器時代遺物の分布 (第45図)

石器群の分布は6区の南東コーナーに位置し、全体として楕円形の状況を示す。石器群の分布
石器群ブロックとしては1カ所の確認となった。このブロックは長径6m、短径4mを測る。東側は古墳の周溝に削平されており、ブロック全体はもう少し東側にも広がっていたものと思

II 旧石器時代

えられる。Ⅲ層以下、層位と分布の広がりをおよそ慎重に掘り下げを行った。掘り下げ調査時の所見は以下のとおりである。

Ⅲ層→Ⅰ層の表土や耕作土の掘り下げによって、旧石器時代の遺物の存在が目ざされ、Ⅲ層から出土位置を記録しつつ取り上げに入った。径5mの範囲に出土地点が集中することが判明、中心部に大きめの剥片の出土が認められた。

Ⅳ層→Ⅳ層上部に径6mほどの分布の広がりを見せたのを境に徐々に、集中域が縮小していった。Ⅳ層上～中位に石刃核が直立した状況で出土し、あわせて石刃や剥片類が集中した。

集中域は大きく一つのブロックとして認識したものの、南西部分に小さな集中部分も確認でき、何回かの活動の痕跡と捉えられよう。

Ⅳ層上位 層位的な分布の傾向として、遺物の垂直分布からブロックの中心部を基準にレンズ状に分布していることが窺えた。全体的に砕片などは上下に拡散した状況をみせ、30g以上の剥片は相対的な差異は少なく、集中した状況を見せている。(中沢祐一 2000)によれば、3～10gの資料が相対的に拡散しやすく、安定するのは33g以上の資料だという。「生活面」の認定については遺物重量のみを基準とすることはできないが、少なくとも軽量な遺物の垂直方向への拡散と比較的安定している重量のある資料群があるならば大型の剥片類が集中して遺存するレベルを生活面認定の一つの目安になるとみている。高瀬山遺跡1期6区の旧石器時代石器群ブロックでは比較的大型剥片類の集中したレベルからⅣ層中位レベルを生活面と捉えておく。

C. 石器群の概要

6区の旧石器時代のブロックの石器の組成については表2に示した。その内容としては石核をはじめ、石刃、剥片、砕片などで、明確に利器としての石器は確認できなかった。これらの石器の石材については、すべて頁岩であり、同一母岩と思われる資料が多い。以下、各石器の概要を述べる。

①石核

石核は1点出土している。剥片と接合したものもある。第48図の20は石刃を生産した石核とみられる。正面を中心に剥離作業が行われ、5枚の石刃の剥離痕が残る。側面・背面には表皮の除去の痕跡が看守される。最終的に石核の打面再生剥離後に廃棄されたとみられる。

②石刃状剥片

比較的縦長の形状で先端部分は、尖頭状のものが多く、自然面や平縁のものもある。大きさは10cm前後の資料が大抵で、もともと石刃核の作業面長の範囲内で広がりと捉えられる。ブロック全体での割合は少なく、多くは持ち去られたと推測される。

③剥片・砕片

剥片・砕片は約725点出土している。石刃生産において派生した様々な石片類とみている。ブロックの中心付近には、細かい砕片がとくに密集しており、二次加工によるチップ類も含まれていると思われる。

D. 接合した資料について

出土した石器類の接合関係の観察から、2個体別資料の接合関係を確認している。

①接合資料 1

当資料は合計8点の石器が接合した。総重量は90g、長さ12cmをはかる。復元された接合資料は石核が準備され、目的とする石刃がある程度剥離され進化した状況のみせるもので、左右の側面に稜面を残している。作業面となった部分は幅が狭く、もともとの石核は幅狭く縦に長いものだったと思われる。残核は検出されておらず、最終的な石核の状態は確認できない。ブロック内に同一母岩と思われる剥片断片がいくつか認められ、接合作業を試みたが接合するまでにはいたらなかった。石核の作業面調整剥片や打面調整剥片とみている。接合した石刃は最長で7cm、短いもので2cmを測る。稜面を残し、かつ折れなどの現象から利器として選択されなかったものと考えられる。打点の動きから素材の稜部分を考慮しながら打面を左右に移動していることが看取できる。

石刃の生産

②接合資料 2

当資料は合計3点の石器が接合した。総重量は680g、長さ11cmをはかる。復元された接合資料は石核から目的とする石刃がある程度剥離され打面再生が行われた状況のみせるもので、左右の側面や底面に稜面を残している。作業面となった部分（正面左右）は幅6cmを測り、3枚の剥離痕が確認できる。接合した資料（第49図-21）は作業面の調整とみられ、第49図の22は石核底部の調整剥片と見られる。この石核と同一母岩の資料はいくつかあるものの接合を確かめられたのは2点のみである。

E. 石刃生産技術について

一般に石器の生産工程は石核の準備→作業面・打面の設定→作業面調整→目的剥片の剥取→作業面・打面調整・再生転移→目的剥片の剥取……残核のような段階を経て行われる。接合資料や剥片類から石器生産の工程とその技術を整理するならば、以下のようにまとめられる。

①石材石核の準備

石材となった頁岩は高瀬山周辺では、最上川河床や周辺の路頭から容易に採集できる。

石器生産の工程

接合資料1はやや扁平な円礫を、接合資料2はどんぐり形の頁岩と推測する。

②打面作業面の設定

準備された頁岩の形態から帽子状の突端部分の剥取により、打面部・底部・作業面が決定する。

③石核の調整加工

作業面には横方向からの剥離により稜面除去がなされ、節理などの位置なども勘案して作業の設定を行っている。

打面は周辺からの調整加工から形成し、打面から作業面への部分的な調整剥離も施される。

④目的剥片生産

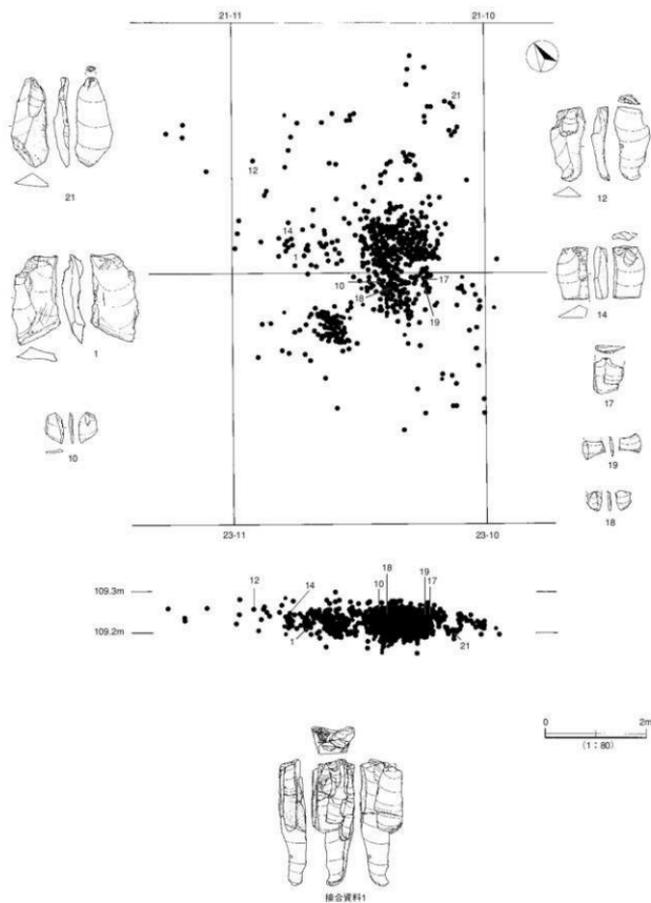
作業面と打面の相対的な位置関係は一定し、打点は左右に移動し後退していく。

石刃の生産を目的としている。

⑤作業面・打面の調整

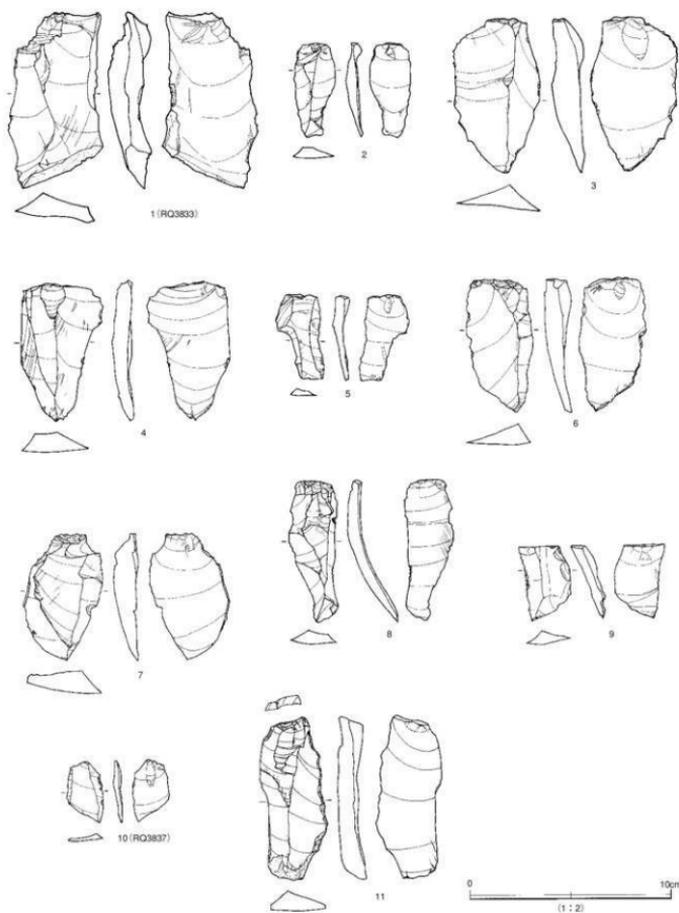
剥離ミスや打角の補正にともない、再調整が行われる。

II 旧石器時代



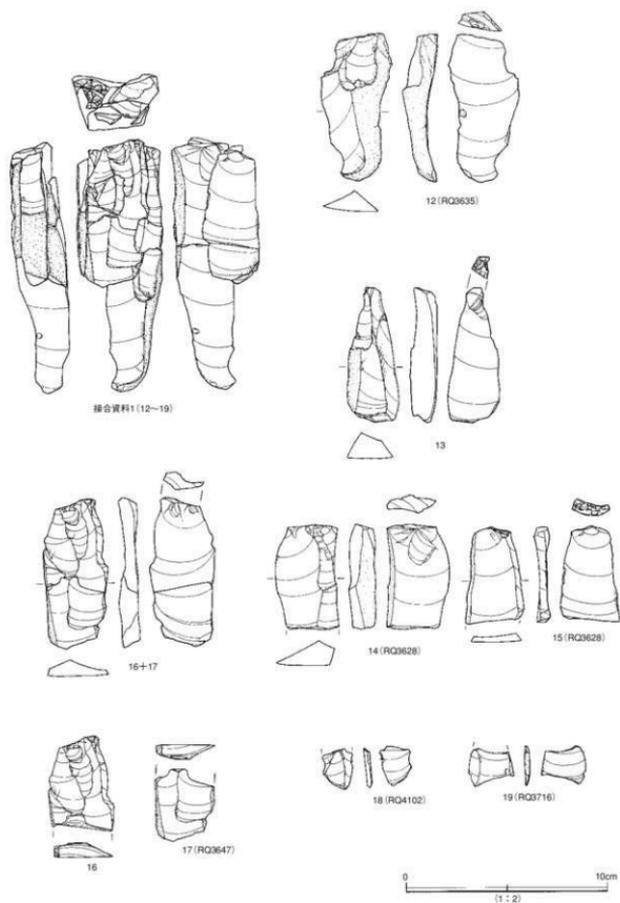
第45図 6区旧石器遺物分布図

II 旧石器时代

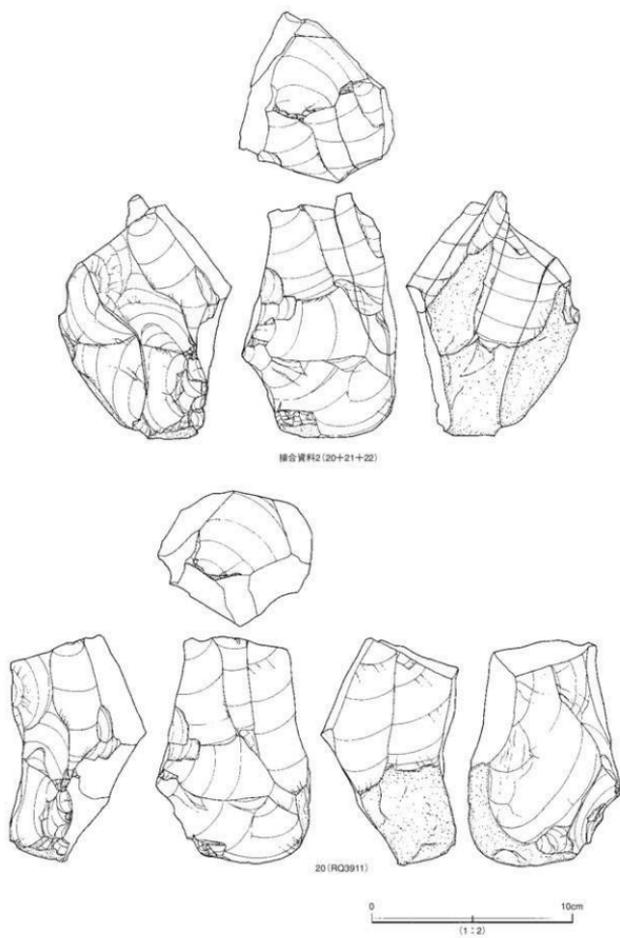


第46图 6区旧石器出土遗物(1)

II 旧石器时代

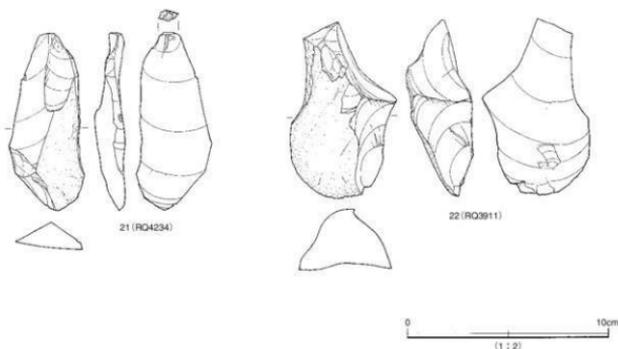


第47图 6区旧石器出土遺物(2)



第48図 6区旧石器出土遺物(3)

II 旧石器時代



第49図 6区旧石器出土遺物(4)

⑥ 転移・再生

接合資料からは打面の転移は確認できなかったが、打面の再生は行われている。

⑦ 廃棄

残核の大きさからは、十分に作業継続が可能と考えられるものが廃棄されていると思われた。しかし、ブロック中央に見られたことは、搬入から廃棄までの行為が一貫しておりかつ、比較的短い期間で生産活動がなされたと思われる。

二次加工や製作された石器については、完成した製品としての「石器」が検出しておらず詳細は不明であるが、石刃素材の石器が作られたと考えられる。

F. 旧石器時代の石器ブロックの性格

石器製作の場

遺物の分布や組成から石器の製作の場であることは間違いないと思われる。しかも母岩数が少なく、母岩1と母岩2の個体資料が大半であること、大型の剥片や礫面を持つ資料が少ないことから、原石の一次処理が終わった段階で、持ち込まれたものと見られる。さらに完成された石器が遺存していないことから、製作された石器は他の生活の場に持ち運ばれたと考えられる。また単一のブロックを成し、周囲からはブロックの検出が見られなかったことは、時間的にも短期間に利用された場・区域と考えたい。

ここから北側50mほどの地点から、平成12年寒河江市教育委員会の調査で、旧石器時代の尖頭器製作のブロックの一部が発見されている。さらに北側には、1980年に山形県教育委員会により、尖頭器や搔器などの石器群のブロックを検出している。高瀬山の東側段丘縁辺にそって旧石器時代の遺物が広く散在することが推測されてくる。6区で検出した旧石器時代の石器ブロックは、標準となる石器の出土はなかったものの、石刃の生産や調整剥片・碎片の多さから石器類の素材生産、さらに器体の調整加工の行われた「場」と捉えることができよう。

旧石器計測表 (1区)

表1 旧石器計測表 (1区)

図版番号	出土地点	遺物番号	器種	長さ	幅	厚さ	備考
33図-1	G15-52	RQ681	尖頭器未成品	102.0	43.6	18.8	
33図-2	G15-53	RQ1962	掻器3類	65.7	29.2	14.7	
33図-3	G17-52	RQ606	掻器7	79.8	29.9	11.5	
33図-4	G16-52	RQ2590	縦石片	57.1	27.9	11.7	
33図-5	G23-54		船底型石核	30.1	89.0	22.0	
33図-6	G17-52	RQ672		57.0	45.0	14.0	
33図-7	RQ1716			64.0	35.0	10.0	
33図-8	RQ795			46.0	27.0	9.0	
33図-9	RQ2889			26.0	33.0	10.0	
33図-10	RQ1823			45.0	29.0	10.0	
33図-11	G17-8	RQ007		81.0	69.0	20.0	
33図-12	RQ2790			57.0	33.0	13.0	
34図-13	RQ1699		残核	34.2	32.9	14.3	黒曜石 (H13-702)
34図-14	RQ639		刮片	22.5	20.0	5.8	黒曜石 (H13-701)
34図-15	RQ1757		二次加工刮片	23.3	16.5	8.0	黒曜石 (H13-703)
34図-16	RQ1978		刮片	21.7	21.4	10.4	黒曜石 (H13-704)
34図-17	RQ902			55.0	25.0	11.0	
34図-18	RQ1259			48.0	39.0	10.0	
34図-19	RQ2877		刮片	25.7	31.3	12.2	
34図-20	RQ1764		石核	51.0	65.4	41.0	黒曜石 (H13-707)
34図-21	RQ2876		原石	24.7	21.5	18.5	黒曜石 (H13-706)
34図-22	RQ2876		原石	26.3	20.1	21.3	黒曜石 (H13-705)
34図- (23+24)	混合資料1			109.7	48.6	16.5	
34図-23	G17-52		使用痕石刃上部	56.6	47.5	12.4	
34図-24	RQ620		使用痕石刃下部	64.0	49.7	16.0	
35図- (25-29)	混合資料2			64.6	83.4	64.3	
35図-25	G15-51	RQ688	石核	63.1	81.9	65.4	
35図-26	RQ1956		刮片	50.2	68.0	23.5	
35図-27	RQ1963		刮片	78.6	57.4	17.5	
35図-28	RQ1955		刮片	32.1	34.5	10.3	
35図-29	RQ2710		刮片	17.0	32.1	9.3	
36図- (30-36)	混合資料3			98.5	107.9	78.7	
36図-30	G16-53	RQ661	石核	89.6	65.7	39.9	
36図-31	G16-52	RQ1673	使用痕石刃	91.2	42.6	23.3	
36図-32	RQ686			66.9	69.0	19.0	
36図-33	RQ683		縦石片	56.5	34.2	8.9	
36図-34	G16-52	RQ1688	刮片	68.2	52.2	14.3	
36図-35	RQ629		石刃側部	43.2	59.0	19.8	
36図-36	RQ686		刮片	37.7	17.0	9.1	
37図- (37-39)	混合資料4			105.2	113.3	82.3	
37図-37	G16-52	RQ699	石核	85.0	111.2	68.0	
37図-38	RQ602		刮片	62.0	62.9	18.9	
37図-39	G17-52		刮片	42.2	32.0	12.0	
38図- (40+41)	混合資料5			81.0	50.0	24.0	
38図-40	RQ629			81.0	33.0	26.0	
38図-41	G15-51	RQ690		65.0	50.0	17.0	
38図- (42+43)	混合資料6			79.0	39.0	11.0	
38図-42	RQ674			67.0	39.0	10.0	
38図-43	RQ684			45.0	14.0	10.0	
38図- (44+45)	混合資料7			77.0	41.0	15.0	
38図-44	G16-52			76.0	41.0	15.0	
38図-45	G16-53	RQ1684		39.0	26.0	8.0	
40図-46	RQ3081		磨製石器 (石刃)	91.9	30.0	14.0	
40図-47	G16-52	RQ3002	磨製石器 (石刃)	78.5	24.6	12.1	
40図-48	RQ3088		磨製石器 (石刃)	96.6	33.6	16.7	
40図-49	RQ3007		磨製石器	96.5	37.2	20.9	
40図-50	RQ3009		磨製石器 (石刃)	99.7	25.6	11.9	
40図-51	G16-52	RQ3011	磨製石器	44.7	29.8	13.6	
42図-52	G15-16-52	RQ3089	磨製石器	46.5	8.6	8.3	
42図-53	RQ3071		磨製石器	38.9	19.3	8.4	
42図-54	RC0051		磨製石器 (刮片)	41.2	19.9	11.8	
42図-55	RQ3095		磨製石器	54.6	20.1	10.5	
42図-56	RQ3074		磨製石器 (刮片)	46.0	20.9	9.6	
42図-57	G15-16-52	RQ3099	磨製石器	77.4	26.8	13.6	
42図-58	G15-16-52	RQ3054	磨製石器	73.6	42.8	17.7	
42図-59	RQ3035		磨製石器 (刮片)	52.8	18.2	10.5	
42図-60	G15-16-52	RQ3085	磨製石器	78.6	32.4	16.9	
42図-61	RQ3096		尖頭磨器	102.8	82.3	20.4	
42図-62	G16-43			123.0	90.0	44.0	
43図-63	G17-52		尖頭器	77.3	31.8	14.0	
43図-64	G23-54			56.0	30.0	12.0	
43図-65	G23-54			36.0	32.0	10.0	
43図-66	G23-54		石刃	31.8	15.0	5.0	黒曜石

旧石器計測表 (6区)

表2 旧石器計測表 (6区)

(単位: mm)

検体番号	遺 物	器 種	長 さ	幅	厚 さ	備 考
46区-1	RQ383		89.0	45.0	21.0	
46区-2	G22-11		48.0	21.0	8.0	
46区-3	旧石器ブロック内根椀内		78.0	43.0	16.0	
46区-4	G22-11		69.0	41.0	10.0	
46区-5	G22-11		43.0	24.0	8.0	
46区-6	G23-11		67.0	34.0	13.0	
46区-7	G22-10		63.0	39.0	12.0	
46区-8	G22-11		71.0	24.0	14.0	
46区-9	旧石器ブロック内根椀内		37.0	25.0	10.0	
46区-10	RQ3837		31.0	18.0	4.0	
46区-11	G14-18	使用破石刃	81.5	33.7	13.4	
47区 (12-19)	複合資料 1		127.2	42.8	27.4	
47区-12	RQ3835	石刃下半部	73.9	35.6	17.6	
47区-13	旧石器ブロック内根椀内	石刃	67.7	28.1	13.6	
47区-14	RQ3828	石刃上半部	52.6	31.6	13.7	
47区-15	X-O	使用破石刃上部	48.3	29.5	8.1	
47区 (16+17)			74.8	32.7	10.3	
47区-16	G22-11	使用破石刃下部	36.0	32.0	10.0	
47区-17	RQ3847	使用破石刃上部	47.5	32.0	9.0	
47区-18	RQ4102	石刃断片	20.0	15.5	3.0	
47区-19	RQ3716	石刃断片	19.5	22.5	2.5	
48区 (20-22)	複合資料 2		111.6	78.7	86.2	
48区-20	RQ3911	石核	113.4	76.4	67.8	
48区-21	RQ4254	石刃	89.0	37.5	15.0	
48区-22	RQ3911	剥片	88.3	53.3	32.6	

Ⅲ 縄文時代

1 概要

高瀬山遺跡1期地区では、縄文時代の遺構は大型住居跡、竪穴住居跡、焼け面を囲むピット群、フラスコ状土坑、埋設土器遺構、墓塚、陥し穴、その他の土坑、溝状遺構・土器捨て場（遺物包含層）などからなる。

これらの遺構のほとんどが中位段丘に集中している。特に7・8区とした段丘西端部分に縄文時代前期後葉～末葉の集落を東西径120mの環状に形成している。環状集落には大型住居跡と通常規模の住居跡があり、その中央部、径60mの範囲では住居跡等はほとんど構築されない。この中央部には円形・長方形の土坑が多数検出されるもの、周辺部に比べ遺構密度は非常に低い。さらに、その内径径30mの範囲は遺構の希薄な地区となる。中央広場と考えられるものである。中央広場から住居跡周辺では直径や長軸1m前後から2m、深さ40～60cmの土坑が多数検出されている。土坑は1m以下の小型でもフラスコ状を呈するものが多数あり、また隅丸長方形を呈するものなどもみられる。貯蔵穴群と墓塚群に別れるものとみられる。

東西径120mの
環状集落

竪穴住居群は標準的な住居跡37棟と大型住居跡12棟が検出された。標準的なものは規模が3～4mの円形・隅丸方形・楕円形があり、大型住居には20mを超えるものが3棟、10～15m前後のもの9棟がある。この縄文時代前期の環状集落の所在する中位段丘面は、集落の東側に4区→1区→6区と平坦面が約300m続くが、奈良時代～平安時代の集落や古墳群、縄文時代の陥し穴や土坑等は検出されるもの、縄文時代の住居跡は全く検出されない。

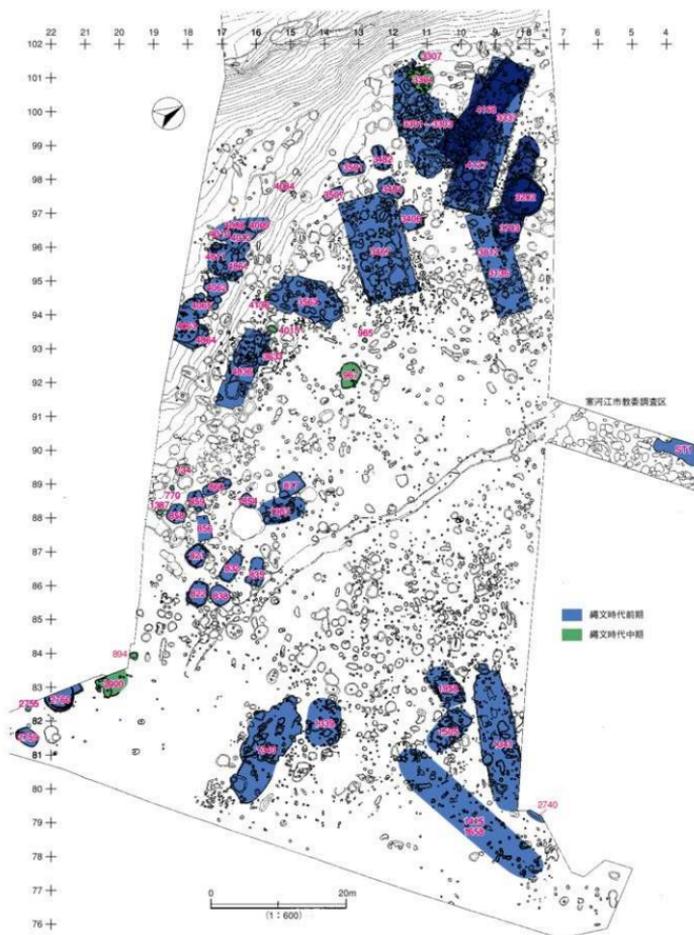
縄文時代中期では、低位段丘の5区に4棟の竪穴住居跡や埋設土器遺構が検出されている。また、前期環状集落の所在する中位段丘でも段丘西端にS T3304、環状集落東端にS T2000の2棟の竪穴住居が検出されている。5区の中期集落の南側の低地には縄文時代から中世までの土器捨て場とみられる遺物包含層が検出され、縄文時代中期・後期・晩期の遺物が大量に出土している。

土坑の分布は7・8区の環状集落周辺に集中する。その他は、6区の段丘縁辺部に数基のフラスコ状土坑が所在し、1区東のS D 5内に晩期の土坑が2基検出されているのみである。規模・平面形は大小様々な土坑が多数検出されている。小型でも断面形などから柱穴とは考えられないものは土坑として採録した。断面はU字形・フラスコ状で、ほとんどの土坑の規模は長軸1m前後から2m程度である。また、底面に溝を有するもの、溝の両端にピットを配置するもの等、多種多様である。ほとんどが前期末葉の時期であるが、7・8区ではS K734・S K894等の中期の土坑が9基検出されている。

陥し穴は主に中位段丘東側で検出されている。6区・3区・1区東側で数基が検出されている。1期調査区西端の2区でも1基が検出されている。河跡・溝跡も検出されている。環状集落の中央部を南北に縦断するS G810、1区東側のS D 5である。

住居跡に重複する土坑で関連するとみられるもの等は住居跡と同時に掲載した。

Ⅲ 縄文時代



第50図 縄文時代7・8区遺構配置図



■ 繩文時代前期 ■ 繩文時代中期

0 100m
(1 : 2,000)

第51圖 繩文時代遺構配置圖

2 縄文時代前期の竪穴住居跡

S T 821住居跡 (第52～55図 写遺構-135 写遺物-27・33・117・119)

グリッド18・19-87・88に位置する。東側に土坑等と重複し、さらに貼床下からフラスコ状土坑が3基検出された。東壁は検出されない。平面形は隅丸方形を呈し、規模は南北3.46m、東西2.60mを測る。

壁はほぼ垂直で、深さは確認面から30～40cmである。土坑と重複するため、東壁は検出されない。

床は、暗褐色土と地山土の混合土の薄い貼床で、ほぼ平坦である。周溝は断面U字形を呈し、全周する。周溝の幅は10～44cm、深さは10～15cmである。

住居内の周溝上にP 1～10の柱穴が検出された。直径は15～30cm、床面からの深さはP 1・P 3 (55cm)、P 2・P 9 (25cm)、P 4 (35cm)、P 5 (45cm)、P 6・P 7 (50cm)、P 8・P 10 (30cm) である。堆積土は、基本的に1層～2層である。

床面より土坑3基を確認。土坑上層が、貼床されていたため住居跡よりも古い土坑と考えられる。土坑を埋めて貼床を行っている。ただし、1基は上面から確認できなかったが、土層断面では、上面から掘り込んでいる可能性がある。床面下から検出されたフラスコ状土坑は、地山黄褐色土をブロックで含む人為的に埋められた土層である。

遺物は1～24の縄文土器、25～38の石器、39の磨石や40の土偶などがある。1～8は半截竹管による結節状浮線文を施される台付鉢、10・11は沈線文の深鉢である。

他は口縁部に刻み、押圧縄文、沈線文、24は手づくね風の土器である。石器は尖頭器・石錐・石匙・削器・搔器・石核などがある。

人為的埋められた床面下の土坑

S T 822住居跡 (第56～62図 写遺構-136 写遺物-7・34・35・120・121)

グリッド18・19-86・87に位置する。平面形は隅丸長方形で、北壁コーナー付近でS T 838を切る。遺存状態は良好である。長軸3.88m、短軸3mを測る。覆土の状況から新旧2時期が考えられる。S T 822aが新しく、S T 822bが古い。

新旧2時期

S T 822a住居跡(新)の覆土は黒褐色シルト主体の自然堆積である。壁は全体に緩やかに傾斜する。確認面からの深さは30～40cm。

S T 822a

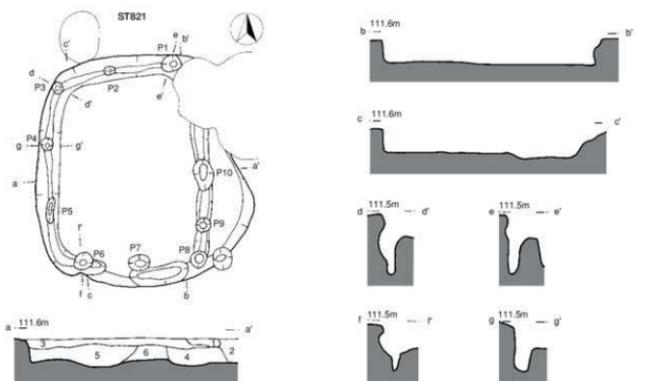
床は暗褐色粘質シルトと褐色シルトによる貼床である。貼床の厚さは約10cmと、かなり厚めである。貼床の中央部は薄く、周辺になるほど厚くなる。土層断面図の7層は貼床面である。

床面で検出された柱穴は8基である。E P 1769・1772はやや深い他は浅く、主柱穴とは考え難い。また、E P 1772は柱穴としては不整形すぎるようだ。2次調査では、床面ビットのみの検出であったが、3次調査では、住居の壁外から柱穴12基を検出した。この内、P 1・P 4は攪乱の可能性が高い。

壁にかかる柱穴3基は、住居跡を精査後に検出のため、新旧関係ははっきりしないが、P 7・P 8はその覆土から本址に伴うものと考えられる。他のビットは掘込みも浅く、本址に伴う柱穴ではない可能性もある。周溝は未検出だが、若干の凹みが見受けられる所がある。如は未検出である。

遺物は、貼床直上のもとの覆土中のもに分けられる。2は床面近くで出土したが、他は床

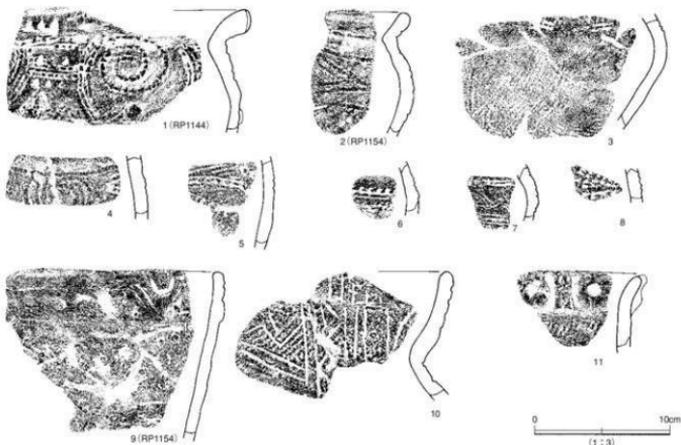
Ⅲ 縄文時代



ST821

- | | | |
|-----------|----------|-----------------------|
| 1 IOYR3/4 | 暗褐色粘質シルト | 2を多量に含む |
| 2 IOYR5/6 | 黄褐色粘質シルト | 3を少量頻りに含む、炭化粒、植物根含む |
| 3 7SYR2/2 | 黒褐色シルト | 3を少量含む、遺物、炭化粒、植物根、糞含む |
| 4 IOYR3/4 | 暗褐色粘質シルト | 遺山粒を頻りに含む、炭化粒、糞含む |
| 5 IOYR2/2 | 黒褐色シルト | 5を少量含む、遺物、炭化粒、植物根含む |
| 6 IOYR3/4 | 暗褐色粘質シルト | 2を少量含む、遺物、炭化粒、植物根含む |

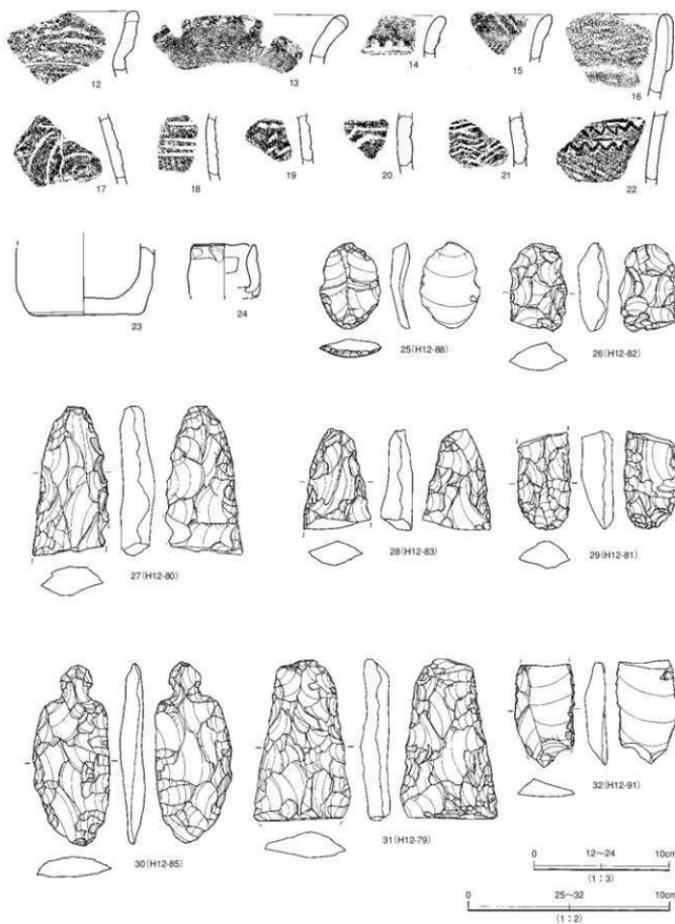
0 2m
(1:60)



0 10cm
(1:3)

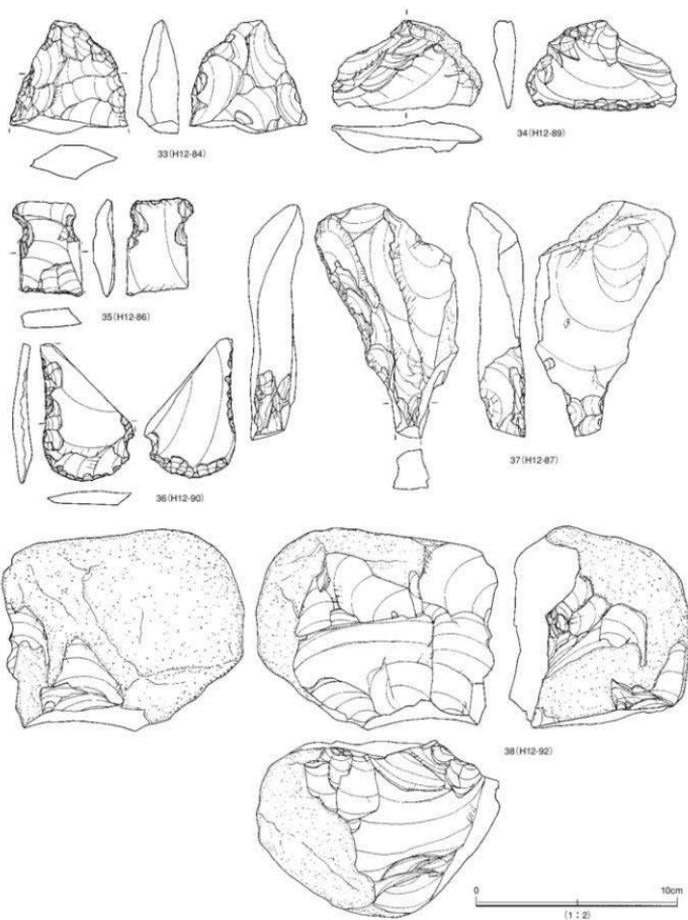
第52図 ST821 住居跡・出土遺物(1)

Ⅲ 縄文時代

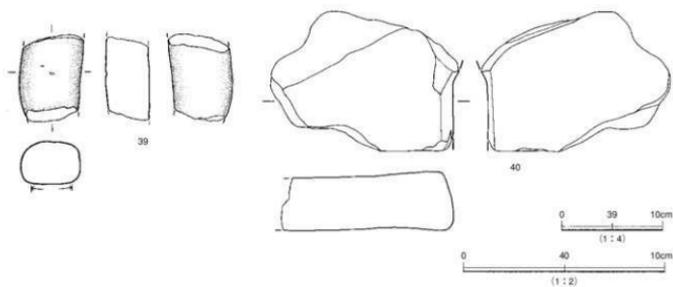


第53図 STB21 住居跡出土遺物(2)

Ⅲ 縄文時代



第54図 ST821 住居跡出土遺物 (3)



第55図 ST821 住居跡出土遺物(4)

面より10~40cm程浮いた状態で出土している。1~3は台付鉢である。3・4他は深鉢がほとんどである。1~3は半截竹管による山形・弧状・斜格子状の沈線文、口縁部などへの連続爪形文・ヘラ掻の沈線文、胴部へのボタン状貼付文・三角刻印文などが施される。

石器は尖頭器・石鎌・石錐・石匙・搔器・削器など多数が出土している。特に71は石剣とみられる石製品である。

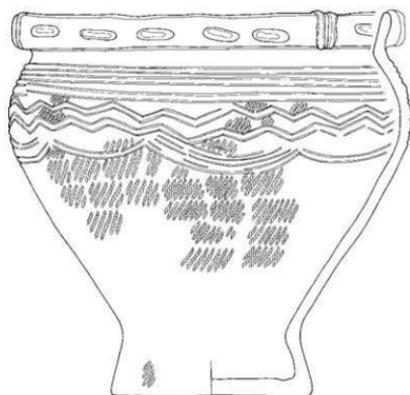
ST822b住居跡(旧)の壁の深さは55~70cm、ほぼ垂直だが南東壁の一部はオーバーハング気味である。床は褐色砂の直床で、中央部が堅く締まり、周辺部はやや柔らかい。中央やや北寄りの破線で囲った床面部分は特に堅く締まり、他の部分と比べても砂の粒子が粗く、乾燥するのが早い部分である。

北壁から東壁にかけてと、南西壁の中央部に周溝が検出された。南コーナー付近の床面が、他の部分に比べて、やや高く検出され、全周するか不明である。

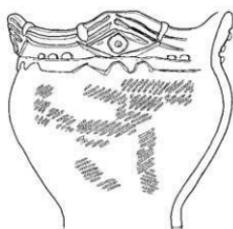
本址に伴う柱穴はP13~43とみられる。その中で主柱穴はP18・26・35と考えられる。P13も主柱穴と考えられるが、他の3基に比べ規模が小さく、外傾しており、やや疑問が残る。

周溝内外のP14・15・19~25・27~30・32~34・36・37・39~43のうち、P28・29以外は住居跡中央に向かって傾いている。支柱穴と推測される。P28・29は南西壁に向かって傾いているので、他の柱穴とは違う性格が考えられる。P16・31は主柱穴となる可能性はあるが、2次調査時に貼床の厚さを調べるために入れた深掘りトレンチにかかっており、本来の柱穴は不明。床面直上出土の遺物はない。貼床下層部分から摩滅した土器片が出土している。

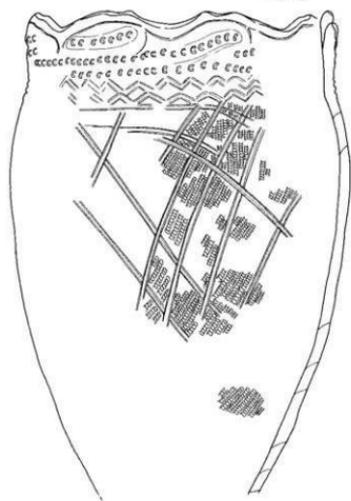
Ⅲ 縄文時代



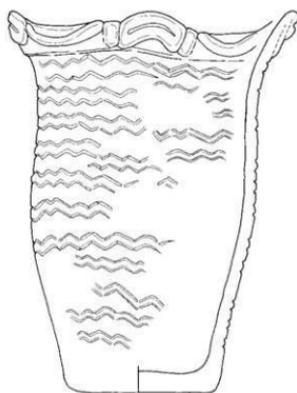
1 (RP1120)



2 (RP1130)



3 (RP1093)

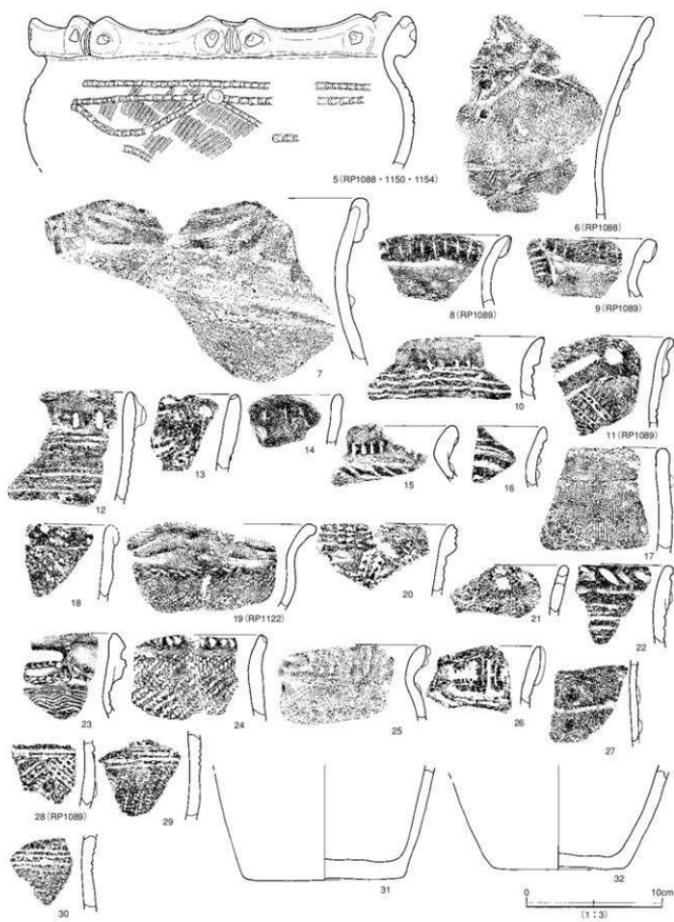


4 (RP1088)



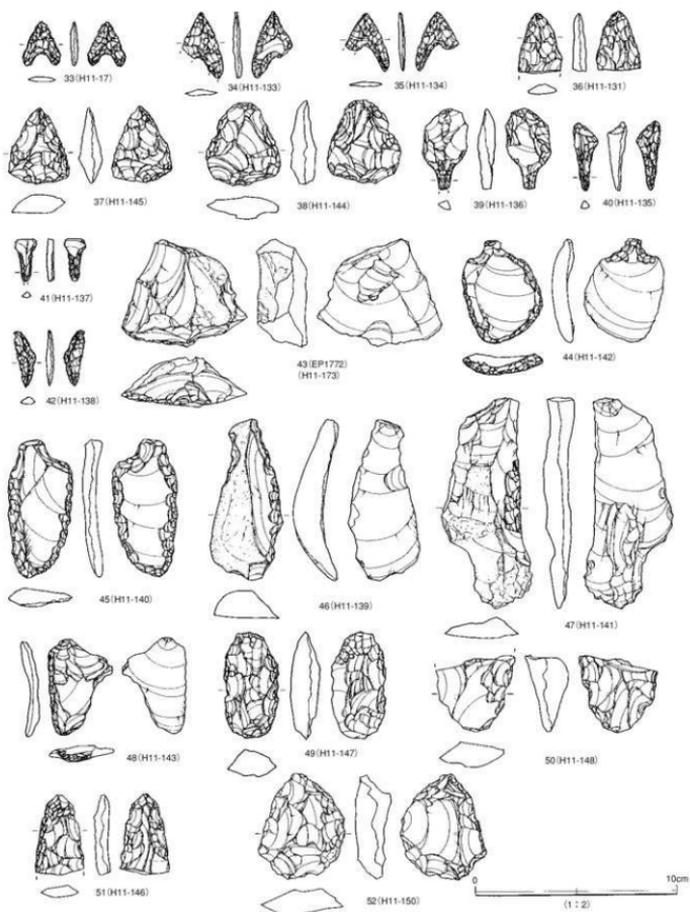
第57図 ST822 住居跡出土遺物 (1)

Ⅲ 縄文時代



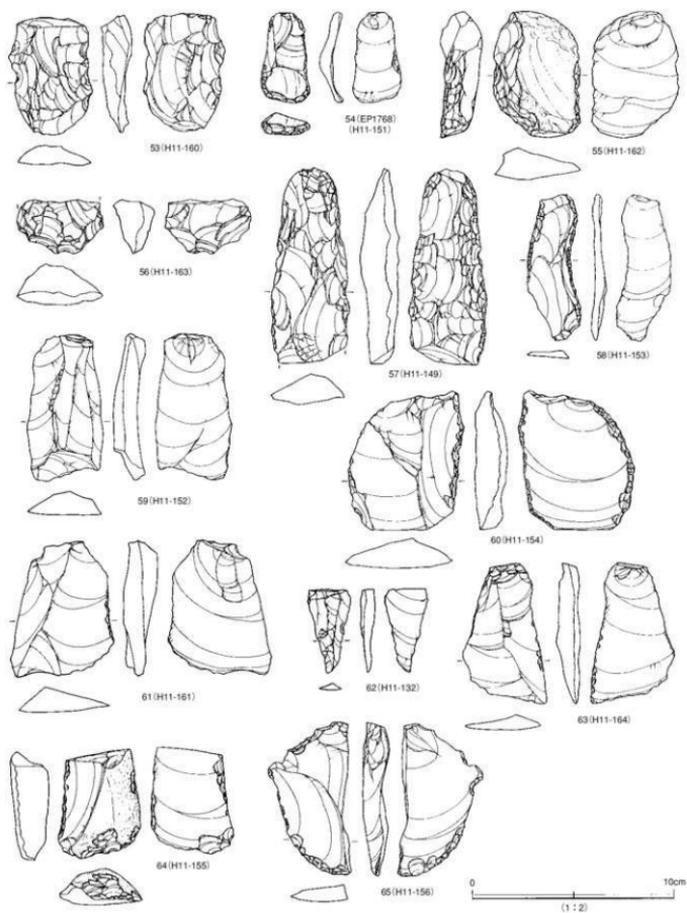
第58図 ST822 住居跡出土遺物 (2)

Ⅲ 縄文時代



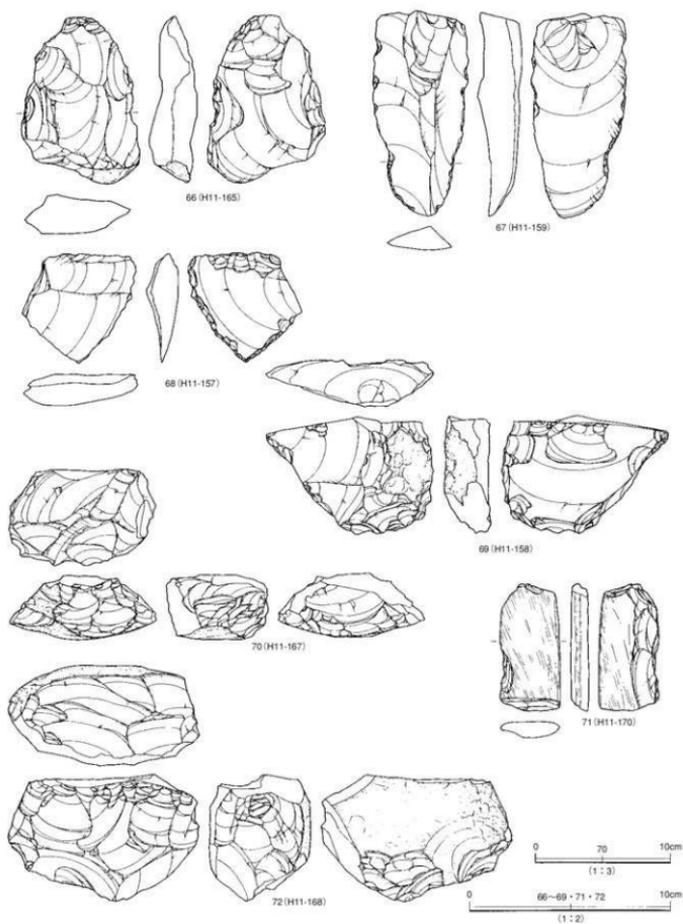
第59図 ST822 住居跡出土遺物(3)

Ⅲ 縄文時代



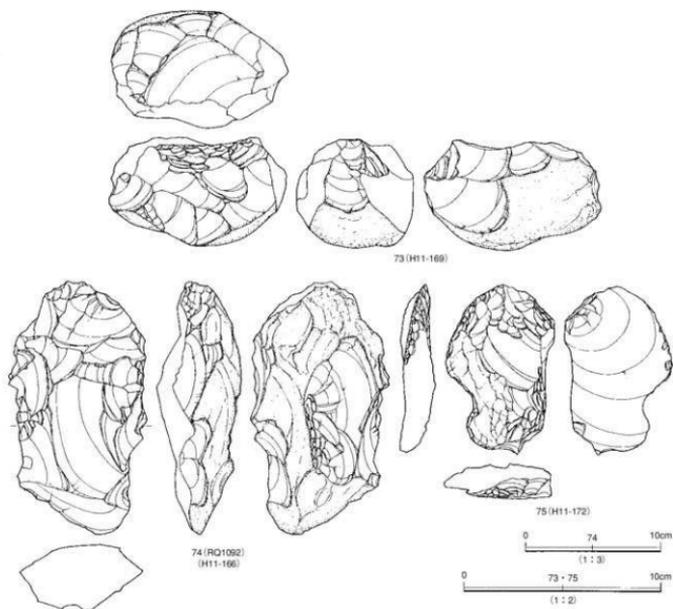
第60図 ST822 住居跡出土遺物 (4)

Ⅲ 縄文時代



第61図 ST822 住居跡出土遺物 (5)

Ⅲ 縄文時代



第62図 ST822 住居跡出土遺物 (6)

S T 832住居跡 (第63・64図 写遺構-137 写遺物・7・15・17・19)

グリッド17・18・87・88に位置する。当初、3基の土坑が重複した遺構と考えていた。しかし、精査の結果、壁が垂直に掘り込まれ床面が平坦で貼床的な部分が発出されたため堅住居跡と認定した。

平面形は北西側がやや細くなる隅丸長方形で、長軸4.92m、短軸2.1mを測る。西壁はほぼ垂直だが、他の壁面は緩やかに傾斜する。確認面からの深さは38cmである。

覆土上層の検出面から34cmまでは、地山を小ブロックで含む黒褐色～暗褐色粘質シルトの一括堆積である。これを取り除くと平坦で貼床的な堆積になる。

2次調査では、これを貼床として考えていたが、3次調査でこの堆積土を取り外すと、中砂～粗砂のピットを伴う直床を検出した。中央部は堅く締まった中砂～粗砂であるが、南東壁付近は褐色シルトによる貼床の様相を呈する。

床面中央部から北西は一段低くなっているが、これは掘り過ぎの可能性もある。東壁際を果樹アッカーによって壊され、床面に径50cmの掘り込みがみられる。

柱穴はP 1～20が発出された。全て壁際にあり、住居中央に向かって傾いている。規模もほとんど同様である。西壁北側1/3から東壁北側1/3にかけては柱穴を検出できなかった。炉、焼土、周溝は未検出である。

遺物は覆土1層目より磨芥、深鉢片などが出土している。1～8は深鉢片、9～15は尖頭器・石鏃・石鏃・削器である。16・17は刃部の破損した磨製石斧である。

S T 835住居跡 (第65・66図 写遺構-135)

グリッド16・17・87・88に位置する。S G810の西に隣接して所在する。土坑の重複遺構とも考えられる。平面形は隅丸長方形で長軸4.7m、短軸2.1m、深さ42～45cmを測る。

覆土は4層まで確認され、1層の黒褐色シルトに遺物を多く含む。2層は粘土ブロック、3層は斑状の堆積土で埋められた状況である。遺物は3層上面からの出土が多い。

壁は、ほぼ垂直に掘り込まれ確認面からの深さは42～45cmを測る。床面はほぼ平坦で白色粘土～白色シルトに掘り込まれ、堅く締まっている。

床面から柱穴6基、溝1条が発出された。これらの柱穴から遺物が少量出土している。柱穴は直径15～20cmの比較的細いものだが、深さはP 2で32cm、P 5で28cmとしっかりした掘り込みである。P 1は深さ不明、P 3は16cm、P 4は9cmの深さである。

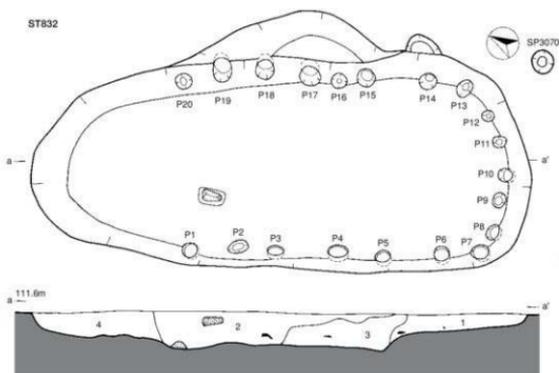
また、中央東寄りの床面で溝が発出されている。規模は長さ135cm、幅44cm、深さ40cmを測る。

遺物は覆土より縄文土器片多数と石器、凹石や石皿片が出土している。小礫も多い。1～8は深鉢片、9～12は尖頭器・石鏃・石鏃・搔器、13・14は凹石、15は石皿片である。

S T 835は点線部分で2つの遺構が切り合っている可能性がある。

住居中央に向かい傾く柱穴

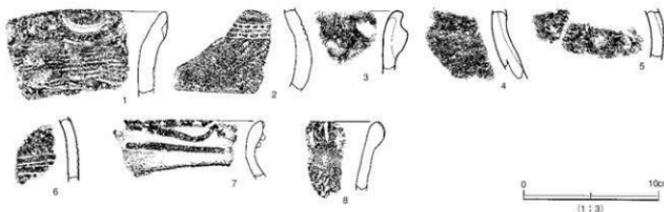
Ⅲ 縄文時代



ST832

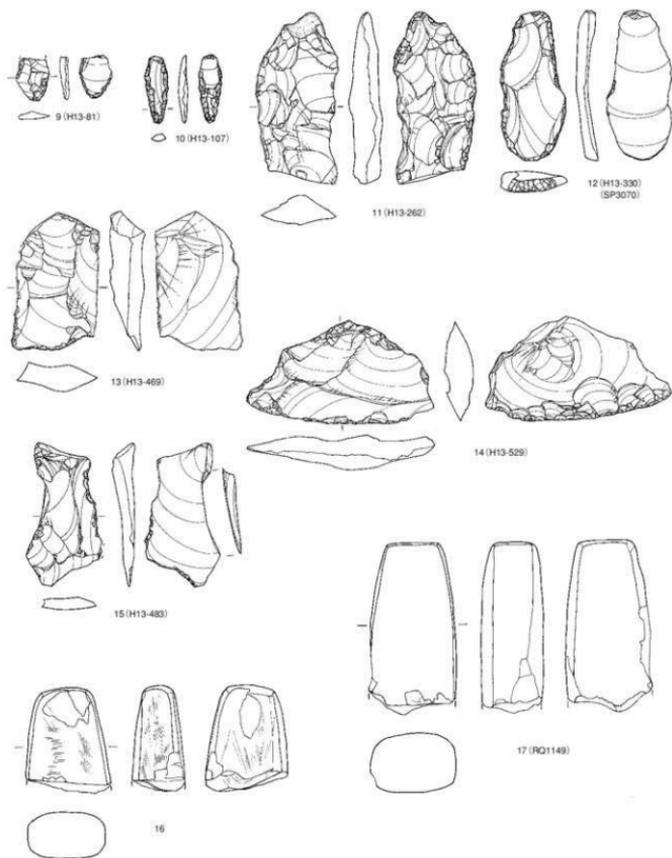
- 1 10YR3/3 暗褐色シルト 炭化粒を含み、山糠粒を若干含む、純粋層、しまる
- 2 10YR2/3 深褐色粘質シルト 遺物、炭化粒を含み、地山粒を含む、しまる
- 3 10YR3/2 深褐色粘質シルト 地山をブロック又は鏡に含み、炭化粒、山糠粒を含み固くしまる
- 4 10YR3/3 暗褐色シルト 炭化粒、遺物を含み、純粋層、しまる

0 1m
(1:40)



第63図 ST832 住居跡・出土遺物(1)

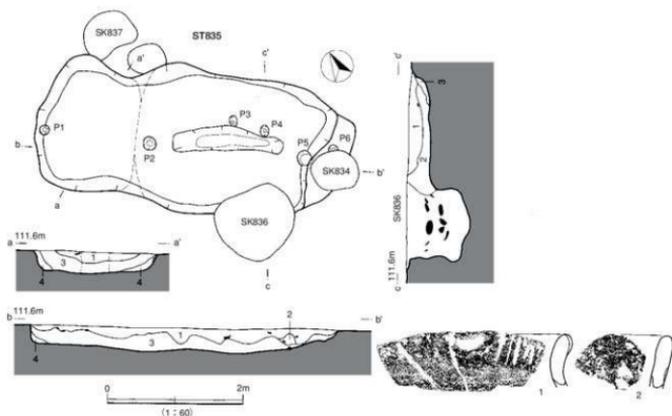
Ⅲ 縄文時代



0 10cm
(1:2)

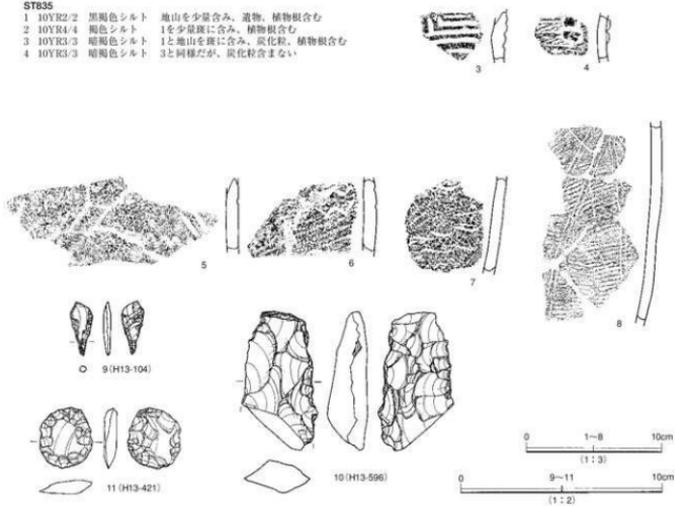
第64図 STB32 住居跡出土遺物 (2)

Ⅲ 縄文時代

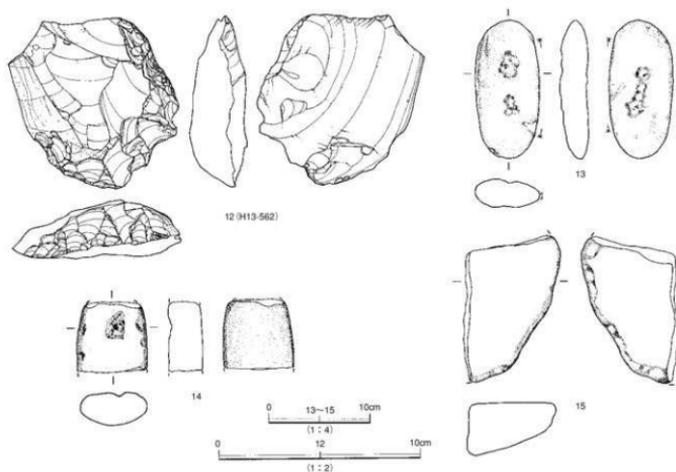


ST835

- | | | |
|-----------|--------|----------------------|
| 1 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 堆山を少量含む。遺物、植物根含む |
| 2 10YR4/4 | 褐色シルト | 1を少量混じり含む。植物根含む |
| 3 10YR3/3 | 暗褐色シルト | 1と堆山を混じり含む。炭化粒、植物根含む |
| 4 10YR3/3 | 暗褐色シルト | 3と同様だが、炭化粒含まない |



第65図 ST835 住居跡・出土遺物 (1)



第66図 ST835 住居跡出土遺物(2)

S T838住居跡 (第67図)

グリッド18-86-87に位置する。西壁南半ではS T822とS K 1604に、北東コーナーではS K 840に重複し、これらに切られる。また、住居内ではS K 839に切られる。

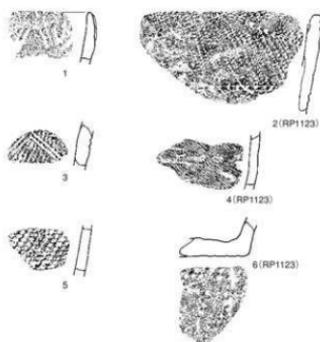
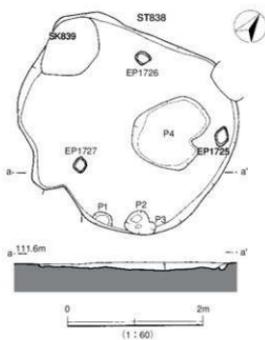
平面形は隅丸方形ないし、不整の円形を呈する。規模は東西3.26m、南北2.88mを測る。壁は垂直に掘り込まれるが、深さは4~10cmと浅い。南西コーナー付近は重複のため不整形である。住居跡の上部が削平されているため、遺存状態が良くないと推測される。周溝は検出されない。

床は直床で、ほぼ平坦である。柱穴は6基が検出された。E P 1725~1727・P 2は比較的良好的な柱穴である。深さはE P 1726が23cm、E P 1727が21cmを測り、しっかりした掘り込みみであるが、E P 1725・P 2は11cmとやや浅い。

炉は、未検出だが、床面中央北に、炭化粒が多く堆積した落ち込みがある。床上面に石皿や土器片が散在している。

遺物は1~6は深鉢片、7~10は削器、11は磨石である。

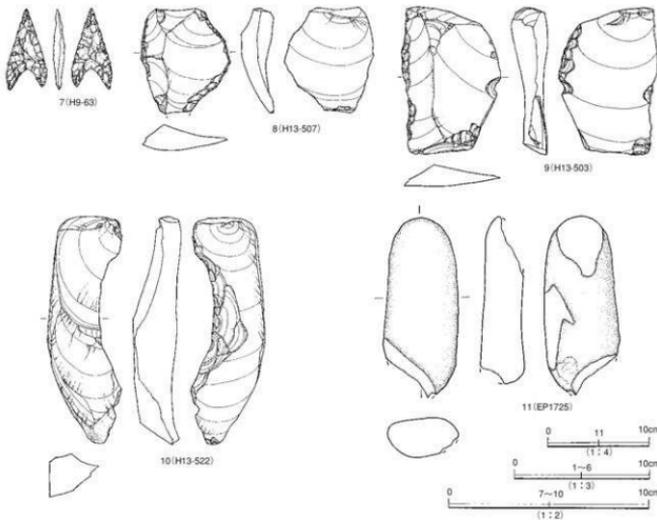
Ⅲ 縄文時代



ST838

a-a'

1 10YR2/2 黒褐色粘質シルト 地山粒を点状又は線状に含み、炭化粒含む



第67図 ST838 住居跡・出土遺物

S T856住居跡 (第68・69図 写遺物-36)

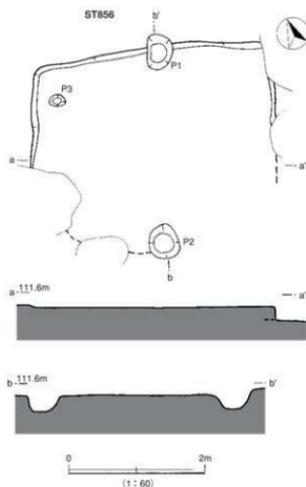
グリッド18-88・89に位置する。遺構確認時に方形のプランを検出し、その上面から縄文土器の大型破片や石器等の遺物が出土したため、竪穴住居跡とした。

上部はかなり削平を受けたとみられ、ほとんど床面のみでの検出である。床面に重複する土坑が数基あるが、床面での検出のため新旧関係は不明である。

平面形は方形を呈する。南側は斜面上に所在するため検出されない。規模は東西20m以上南北2.20m以上と推定される。

壁はほとんど遺存しない。覆土は黒色土である。壁溝は検出されない。床は直床で、平坦である。柱穴はP1～3が検出されている。柱穴の深さはP1・2で約20cmである。

遺物は1～7の縄文土器、8・9の石器がある。1は結節状浮線文の大型の台付鉢、2～7は大型の台付鉢深鉢片、8・9は尖頭器・削器である。

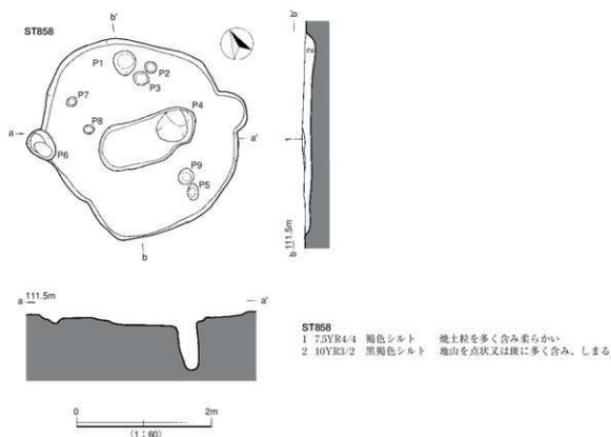


第68図 ST856 住居跡

Ⅲ 縄文時代



第69図 ST856 住居跡出土遺物



第70図 ST858 住居跡

S T 858住居跡 (第70図 写真構-138)

グリッド19-89に位置する。西への斜面上にS T 856に隣接して所在する。上部削平を受け、浅いが良好な住居跡である。

平面形は、ほぼ円形を呈し規模は東西2.74m、南北2.98mを測る。壁は、上部が削平され深さも6-14cmほどであるが良好なしっかりした掘り込みである。

南西付近は壁がやや不整形な検出である。壁溝は検出されない。床は直床で、ほぼ平坦で地山を掘り込む。床面の中央部に長さ1.5m、幅70cmほどの凹みがある。深さは5cmほどである。その東端にはP 4が掘り込まれる。

床面中央部に凹み

柱穴はP 1~9の9基が検出されている。直径15~35cmである。床面からの深さは次の通りである。

P 1 (37cm)、P 2 (22cm)、P 3 (30cm)、P 4 (80cm)、P 5 (19cm)、P 6 (40cm)、P 7 (9cm)、P 8 (4cm)、P 9 (11cm)である。P 7~9は浅い掘り込みで柱穴としては疑問が残るが、他は深く良好な柱穴が多い。P 6は本址を切っている可能性がある。

覆土は1層の単一層である。灰としては明確な焼土は検出されないが、中央部分の凹部に炭化粒をよく含む黒褐色土がある。ここが灰であった可能性がある。

Ⅲ 縄文時代

S T 859住居跡 (第71・72図 写遺構-138)

グリッド18・19-89に位置する。西への斜面上に所在する。北側にS T 860と接し、その間には直径50cmの焼土範囲が検出されている。

南東コーナー付近にS K 862・863・1744などと重複し、切られる。平面形は隅丸方形で規模は東西3.20m、南北2.52mを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれるが、上部削平を受けており深さは16cmと浅い。周溝は検出されない。

床は地山黄褐色土を掘り込む平坦な直床で、多少凹凸がある。柱穴は4基が検出されたが主柱穴か不明である。床面からの掘り込みの深さはP 1 (25cm)、P 2 (14cm)、P 3 (7cm)、P 4 (6cm)である。北壁でS T 860との間に焼土範囲が検出されたが、どちらに伴う焼土(知)か不明である。

床面でフラスコ
状土坑3基検出

床面でフラスコ状土坑3基が検出されたが、この土坑の上に貼床は検出されていないことから本址より新しい土坑とみられる。

覆土は地山の黄褐色シルト粒子を度々混入する黒褐色シルトの単一層である。遺物は1~5の深鉢片と6~9の尖頭器・石匙・搔器・削器が出土している。この他に重複する遺構からも遺物が出土しており、10~12はS K 1744、13・14はS K 1746、15~18はS K 862、19はS K 863である。

S T 860住居跡 (第73・74図 写遺構-137 写遺構-28・148)

グリッド18-89・90に位置する。北壁にS X 861、S K 887・1683、南コーナーにS K 883と重複し、切られる。本址の検出時にはS K 887を切る様相を呈していた。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は東西1.90m、南北3.92mを測る。

壁は、ほぼ垂直に掘り込まれ、深さは上部削平を受けるため浅く16cm程である。周溝は検出されない。

床は貼床で、汚れている砂層が床面である。S K 883完掘後の壁の観察から、かなり深い貼床である。見ようによっては、土坑の覆土の様にも見える。

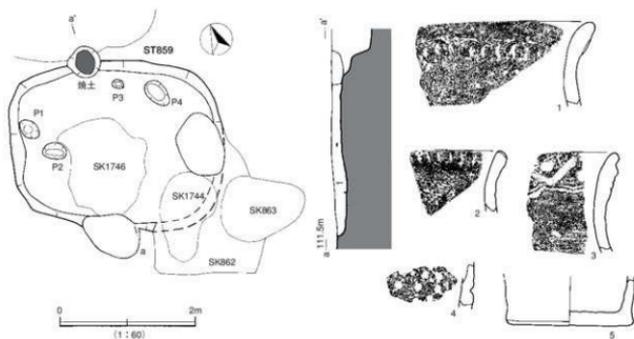
柱穴はE P 1751~1757の7基が検出された。全て良好な柱穴である。深さはE P 1751 (34cm)、E P 1757 (26cm)、E P 1753・E P 1754 (17cm)である。

砂層の床面

覆土は、粘質土の単一層である。燃焼部が検出された砂層の面を床面として考えた。砂質の床全体が火を受けている。炉は中央北寄りに位置し、東西1.2m、南北1.98mの広い範囲が焼けている。4基のピットに焼土が切られる。

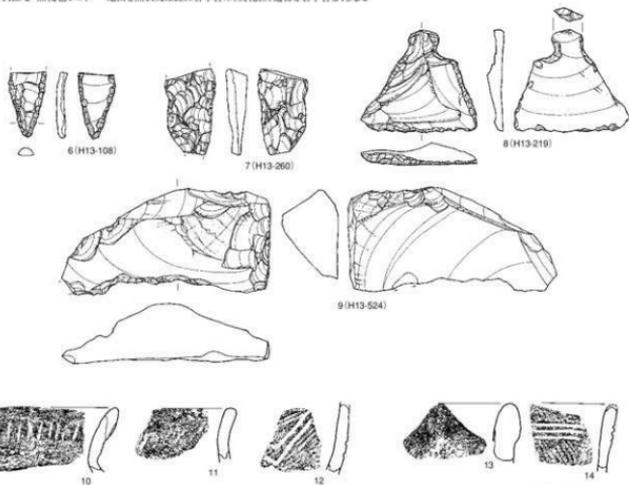
遺物は1~4の深鉢口縁部片、5~7の石鎌・石匙、8の凹石が出土している。9は有孔石製品で、重複するS X 861から出土している。他に重複遺構からの遺物は10~15 (S K 883)、16 (S K 887)、17・18 (S K 1683) などがある。S K 883出土の13は縄文時代中期大木9式の上器片とみられる。

Ⅲ 縄文時代

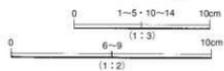


ST859

1 10YR3/2 黒褐色シルト 地山を点状又は斑に若干含み、炭化粒、遺物を若干含む。しよる

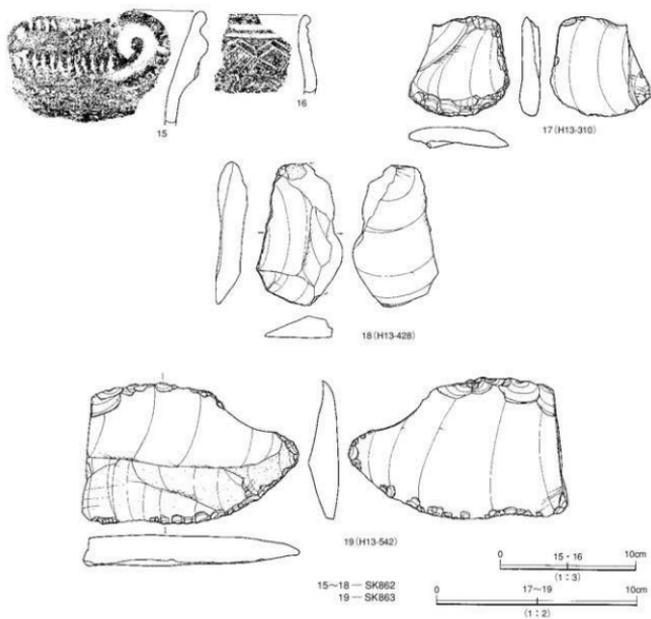


1-9 — ST859
10-12 — SK1744
13-14 — SK1746

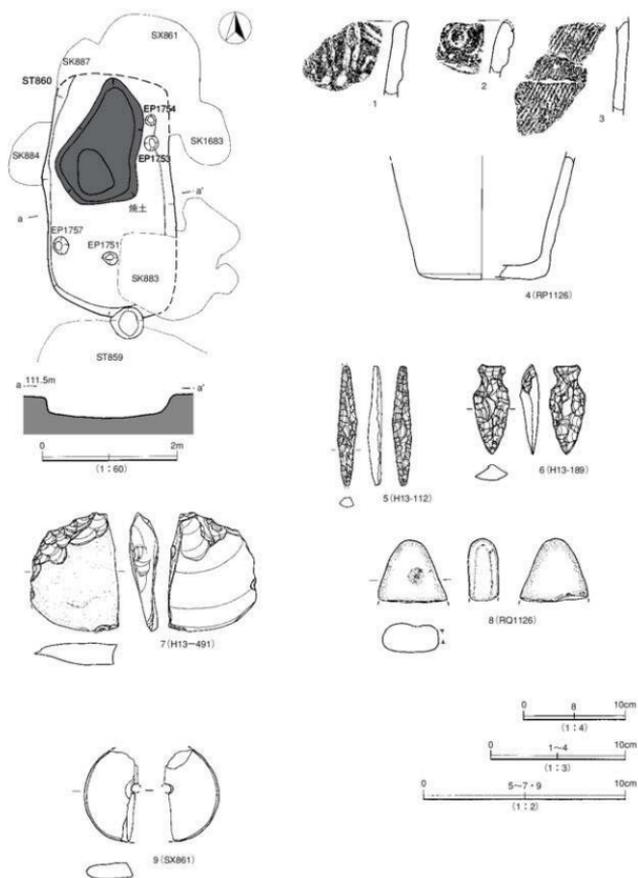


第71図 ST859 住居跡・出土遺物(1)

Ⅲ 縄文時代

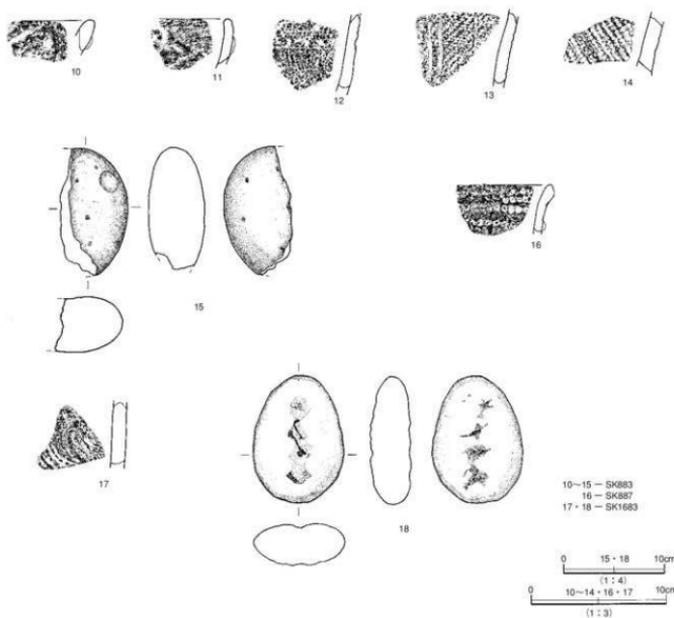


第72図 ST859 住居跡出土遺物(2)



第73図 ST660 住居跡・出土遺物 (1)

Ⅲ 縄文時代



第74図 ST860 住居跡出土遺物(2)

ST877住居跡(第75図 写真構-138)

グリッド15・16-89・90に位置する。環状集落の中央部に所在し平面形は方形である。上面を近代の暗渠に攪乱され、南東角をSK1592、北壁の西寄りをSX897と重複し、壁面・床面を切られている。その他の遺存状態は良好である。

当初、覆土等から奈良～平安時代の竪穴住居跡と推定して調査を進めた。カマドを暗渠による攪乱で壊された竪穴住居跡と考えた。しかし、出土遺物は縄文土器片や石器のみで、古代と決定できる遺物は出土しなかった。東壁の形態により、2棟の竪穴住居跡の重複とも考えられたが、土層断面に重複関係はみられなかった。床面精査後、東壁の形態は土坑に切られることによるものと判明した。また、本址を切るSK1592の底面から縄文土器(RP1140)が出土したため、本址も縄文時代の竪穴住居跡と判断した。

平面形は方形を呈し、東西3.04m、南北3.57mを測る。覆土は黒色シルト～黒褐色粘質シルト

を主体とし、地山黄褐色土粒及び黄褐色土ブロックを混入している。これは人為的に埋め戻されたためと考えられる。 **人為的埋土**

壁はほぼ垂直で、深さ22cmを測る。周溝は検出されない。床は黄褐色土と黒褐色土の混合する貼床である。主柱穴は検出されていないが、3基の浅いピットが検出されている。床面からの掘り込みは、P 1・2 (15cm)、P 3 (3cm) である。炉は検出されていない。

遺物は1が須恵器蓋片、2は深鉢片、3は中期大木8b式の深鉢片、4～6は大木6式期である。7は石匙、8・11は石鏃、9・10は尖刃搔器である。12は両面に凹み部分がある凹石、13は磨石である。

S T 967住居跡 (第76図)

グリッド13・14～93に位置する。環状集落の中央広場の南西端に所在する。平面形は不整形凹形で、規模は南北4.2m、東西3.1mを測る。

本址は主柱穴や炉は検出されず、住居跡と認定するには不明な部分が多い。しかし、その規模が大きく底面が平坦であること等から住居跡として登録した。

覆土は黒褐色シルトの単一層である。床面は平坦でしっかりしている。壁は約20cm掘り込まれ、周溝や炉などは検出されていない。

主柱穴は明確でないが、小ピットが北側で3基、南側壁外で3基が検出されている。掘り込みの深さはP 1 (28cm)、P 2 (15cm)、P 3 (13cm)、P 4 (26cm) である。

遺物は1～5の深鉢片、6の石鏃、7の磨石など少量の出土である。1～3は大木8b式の縄文土器であることから、本址もこの時期の所産の可能性が考えられる。

S T 995住居跡 (第77図 写真構-139)

グリッド15・16～84・85に位置する。環状集落の南東の平坦な部分、S T 1340大型住居跡近くに所在する。南西壁やや西寄り部分をS K 996に切られ、上部倒平を受けるが遺存状態は良好である。

平面形は隅丸方形で、規模は南北3.2m、東西2.5mを測る。覆土は黒褐色シルト～黒褐色粘質シルトを主体とし、地山の黄褐色土ブロックを混入するものである。

壁は地山をほぼ垂直に掘り込む。深さは確認面から12～24cmを測る。周溝は検出されていない。床は地山黄褐色粘質土と黒褐色土の混合土の貼床で、ほぼ平坦である。床面は中央部ほど堅く踏みしめられている。

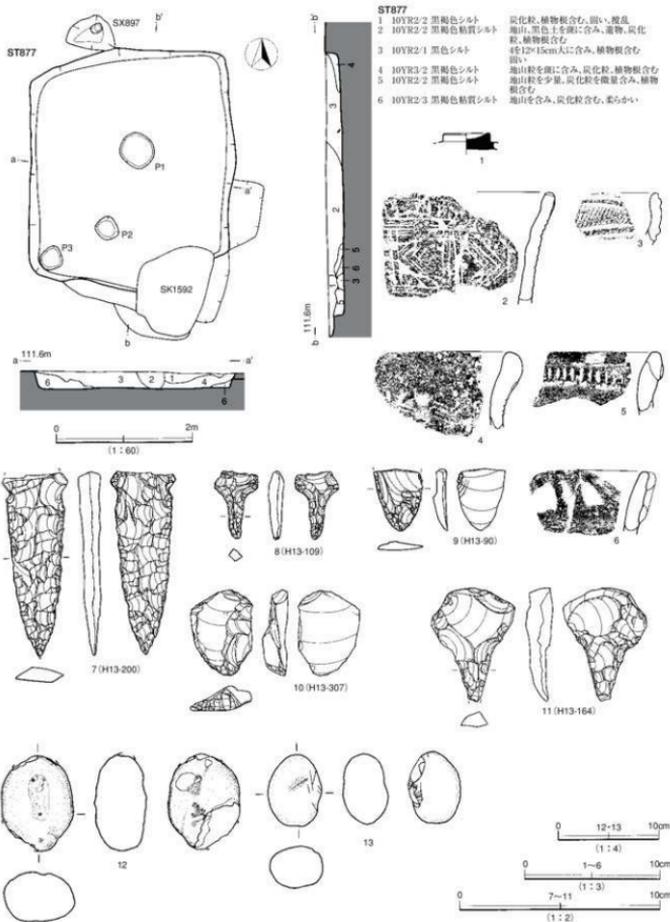
柱穴はP 1～10が検出された。P 2～4は壁を挟むような形で掘り込まれている。P 1は若干壁にかかって外側に検出された。主柱穴はP 2・3で床面より40cm程掘り込まれ、北壁と南壁に位置し対向している。P 4 (10cm)、P 5 (6cm) は浅い。P 6～10は住居跡の外で検出されたピットで、深さはP 6 (20cm)、P 7 (27cm)、P 8・9 (10cm)、P 10 (20cm) である。当初は、位置関係や覆土から壁外柱穴と考えられたが、本址に伴うか不明である。炉や焼土は検出されていない。

対向する壁柱穴

本址は当初、覆土や床面の貼床の状況等から奈良～平安時代の堅穴住居跡と考えられたが、本址を切るS K 996から縄文土器の一個体資料が出土したため、縄文時代の堅穴住居跡とした。

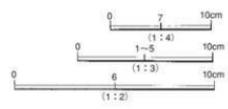
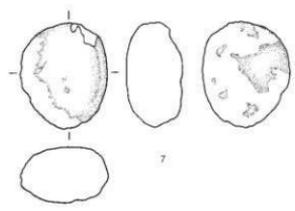
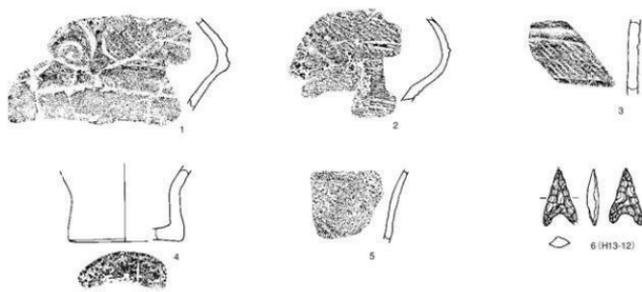
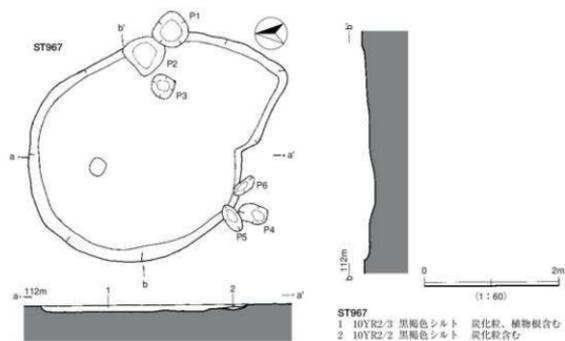
遺物は1～8の縄文土器片、9は石鏃、10は凹石が出土している。床面直上から深鉢体部(R P 1162)も出土している。

Ⅲ 縄文時代



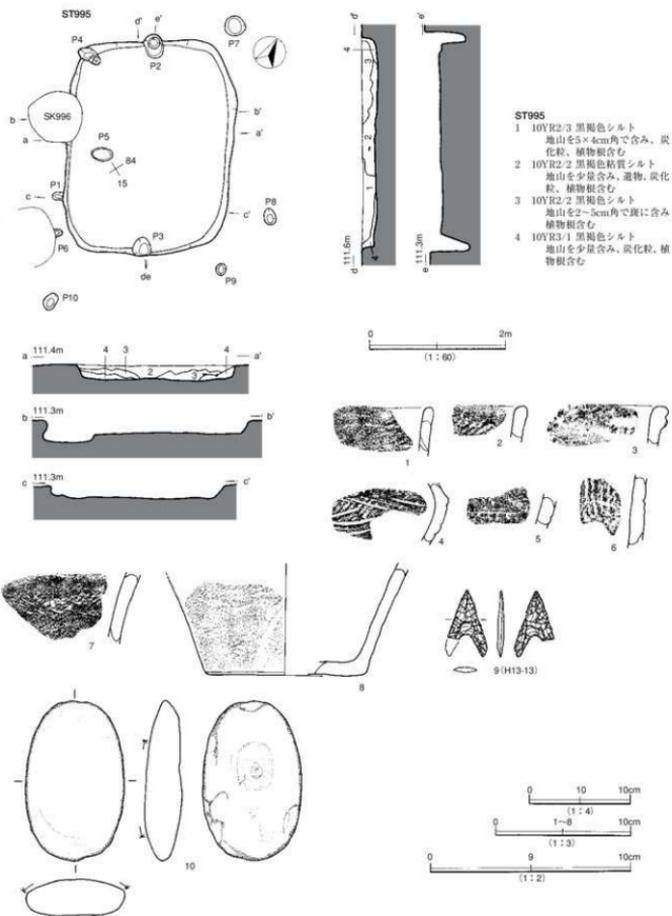
第75図 ST877 住居跡・出土遺物

Ⅲ 縄文時代



第76図 ST967 住居跡・出土遺物

Ⅲ 縄文時代



第77図 ST995 住居跡・出土遺物

S T 1339 住居跡 a ~ c (第78~82図 写遺構-139 写遺物-15・38)

グリッド14・15-82・83に位置する。本址は2次調査ではS D 1392以西をS T 1339 a、以東をS T 1339 bとしてそれぞれ方形プランで検出していたが、3次調査で面整理をしたところ覆土が約2cmと薄く、a・b共に土坑、ピット、焼土のみの検出となった。

これに伴い、2次ではa・bの2時期と捉えていたが、3次調査では柱穴の並び等から次のa~cの3時期を想定できるとした。

3 時期が 想定
さ れ る

S T 1339 a

規模はピット間の推定径2.70m前後の円形プランで、P11・P20・E P2711・P15・P17~P19等から構成される。南半部は未検出である。

S T 1339 b

規模はピット間の推定径5.6m前後の円形プランで、P20・P6~P10などから構成される。E L 2719はS T 1339 a・bいずれかに伴うものかは不明。

S T 1339 c

規模はピット間の推定長で南北4.40m、東西3.20m前後の楕円形を呈する。P2・P5・P14・P21・P12・P13等で構成される。炉はE L 2670、焼土の範囲内に埋設土器の鉢口縁部が露位で出土している。

これらa~cはピットの切り合いが無く、遺物も破片が多いため新旧関係は不明と考えている。また、整理過程で検討を加えた結果、焼土範囲を中心とした柱穴列全体で一つの遺構、大型住居跡の可能性も考えられる。

1棟と考えた場合の規模は南北約10m、東西4mである。炉は、E L 2670・2719である。この場合S K 1578も本址に関連すると考える。これは大型住居跡のS T 1340・1341においても、この土坑と同様のものが住居跡の両端に伴うことから考えられた。

遺物は遺構検出時に1のボタン状貼付文や半截竹管による縦位・横位・斜位に平行沈線の波状文や弧状文を施文する深鉢、結節状沈線文の台付鉢等や石器・礫石器が出土している。17・18はE P 2545、19・20はE P 2711、21・22はE P 2714、23はE L 2670出土である。

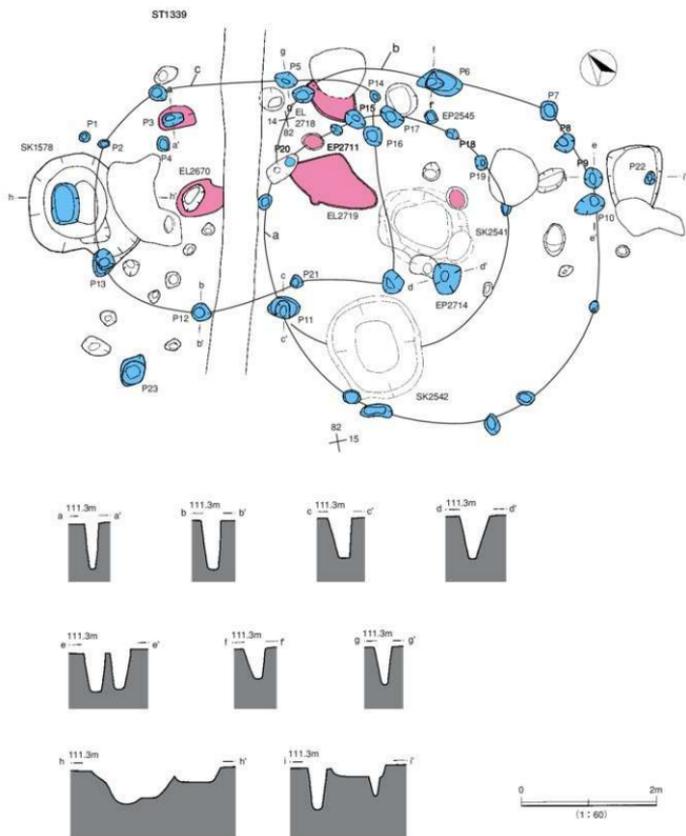
S K 1578からは5の細い粘土線による連続山形文等の縄文土器1~8、9の石匙等が出土している。S K 2541は本址に重複し、E P 2714他的小ピットに切られる。規模は上面では長さ1.28m、幅1m程で、底面では長さ1.18m、幅1.19mである。検出面からの深さは中央で54cmを測る。底面からの立ち上がりは曲面カーブを描き、腹中で膨らむ。袋状土坑で、くびれ部をもつ上面付近が若干崩れている。

覆土は5層まで確認し、1~3層に遺物を主に含む。4層にも少量の遺物を含み、5層は堅くしまっている。この土坑は一旦、埋没した後、掘り起され1~4層で再度利用されたとみられる。

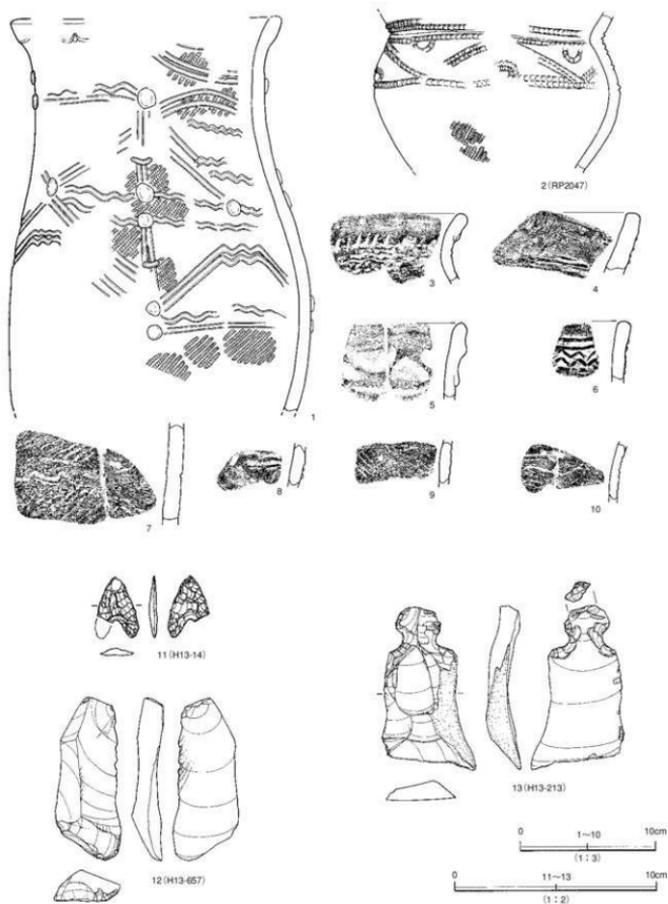
S K 2542は平面形は円形を呈する。断面は皿状で浅い。S K 2543と重複する。上部に根の擾乱を受け、中央がいくぶん深い。長径1.55m、短径1.3m、深さ15cmを測る。

覆土は自然堆積とみられる。2層では流れ込んだ状況で土器片が出土する。端のピットは径22~25cm、深さ55cmを測る。ほぼ垂直に掘り込まれる。

Ⅲ 縄文時代

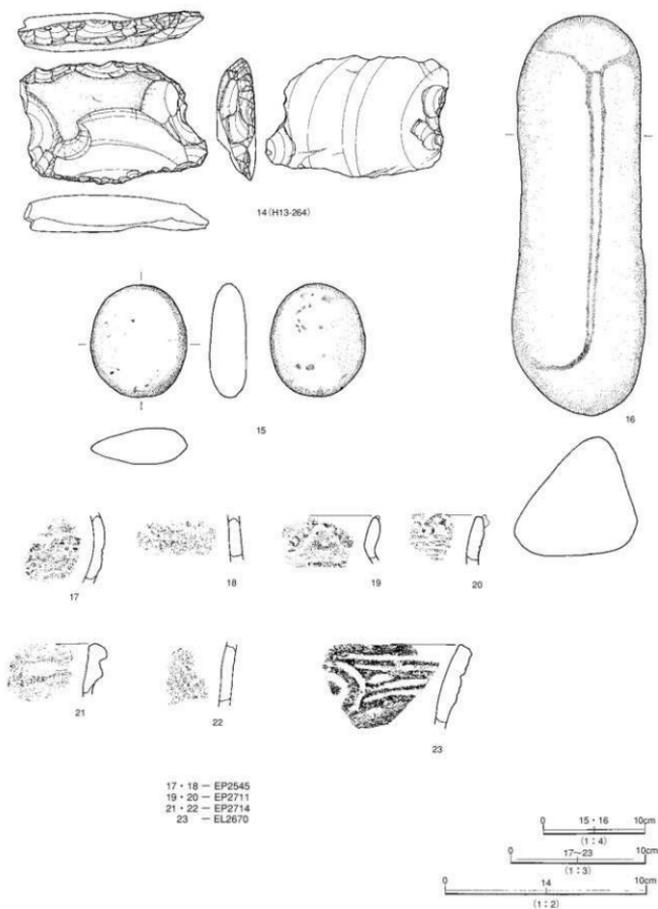


第78図 ST1339 住居跡



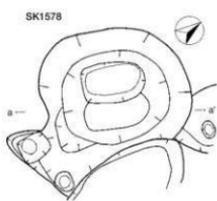
第79回 ST1339 住居跡出土遺物 (1)

Ⅲ 縄文時代



第80図 ST1339 住居跡出土遺物(2)

III 縄文時代



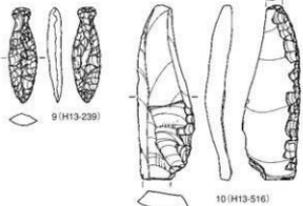
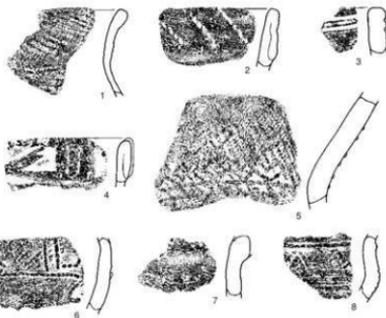
111.4m



0 1m
(1:40)

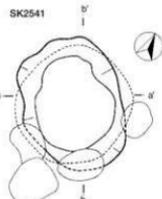
SK1578

- 1 10YR3/2 黒褐色粘質シルト 地山粒を含み、固くしまる。風倒木
地山土。1をブロックで混入し、固
くしまる。風倒木
2 10YR4/4 褐色シルト 遺物を含み地山粒を点状に多く含む
柔らかい



SK2541

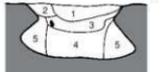
- 1 黒褐色土 黄褐色土粒、木炭粒少量混入
2 黒褐色土 灰白色土粒多量に混入
3 黒褐色土 1よりも木炭粒、黄褐色土粒多く混入
4 黒褐色土 黄褐色土、阿波子、ブロック多量に混入
5 黄灰白色土 黄褐色-灰白色土ブロック多量に混入、黒色土も混入する



111.3m



111.3m



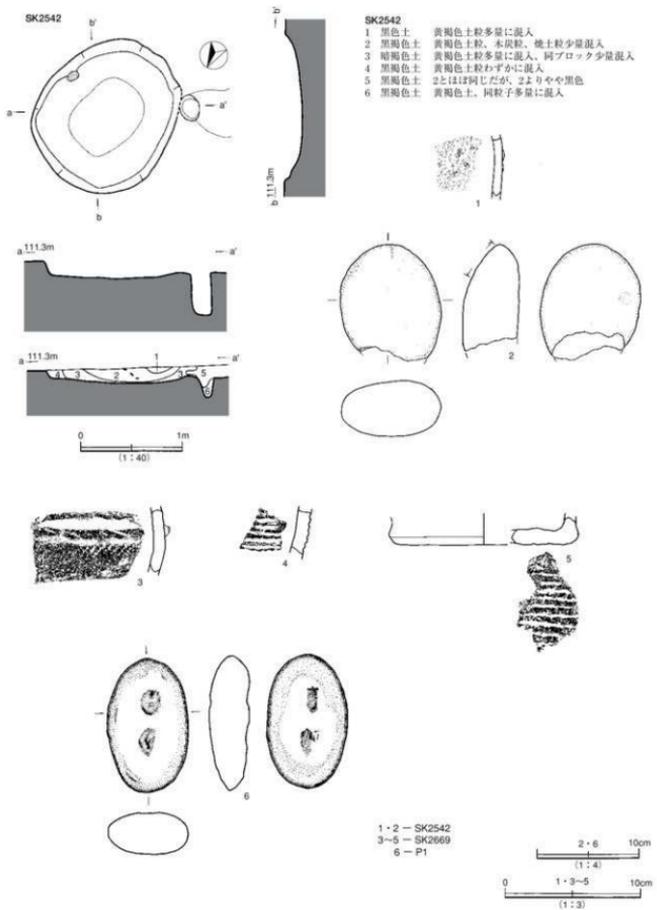
0 1m
(1:40)



0 1-8 10cm
9・10 (1:3) 10cm
0 (1:2)

第81図 ST1339 住居跡・出土遺物(3)

Ⅲ 縄文時代



第82図 ST1339 住居跡・出土遺物(4)

S T1340住居跡 (第83~98回 写遺構-140 写遺物-39~42・122・123)

グリッド16~18~80~83に位置する大型住居跡である。検出プランは、いくつかの遺構が重複した様相を呈していた。このうち東西に炬1・炬2・炬3の3基が並ぶ南北プランの大型住居跡を想定した。この住居跡の主柱穴はE P 1929・E P 1925・E P 1924・E P 1923・E P 1922・E P 1921・E P 1930・E P 1931・P 1・P 2・E P 1928である。S K 1941も本址に関連するものと考えられる。規模は南北18.4m、東西5.0mを測る。

長軸18.4mの
大型住居

壁高は3~5cmと浅い。床は若干凹凸があるが、全体的には平坦といえる直床である。柱穴の床面からの深さはE P 1929 (50cm)、E P 1925 (64cm)、E P 1924 (61cm)、E P 1923 (132cm)、E P 1922 (81cm)、E P 2554 (80cm)、E P 1939 (52cm)、E P 1921 (109cm)、E P 1930 (97cm)、E P 1931 (82cm)、P 1 (67cm)、P 2 (71cm)、E P 1928 (60cm)である。

周溝がP 2~E P 1931~E P 1930~E P 1921間とE P 1925~E P 1924間で検出された。またグリッド16~81付近でも1.4m程の周溝状の溝が検出されたが、本址プランとややずれる。幅8~18cm、深さ8cm程の溝である。

炬は1~3の3基が検出された。それぞれ焼土及び焼土ブロックが多量に検出されているが、炬3はE P 2556と重複し切られる。炬4はS T 1340大型住居跡ではなく重複遺構の炬と考え、また炬5も周溝に切られるため大型住居跡と時期が異なると思われる。炬7はS K 2737に落ち込む形で検出された。

重複する遺構

S K 1939・2739は重複する土坑で周溝に切られる形で検出されていることから、本址よりも古いものとする。住居跡内に位置するS K 2737は、底面から50cm程は黒色土と黄褐色土が交互に入り込む人為的な埋土が堆積し、そこから床面までの約50cmは、住居跡の覆土と同様な覆土が堆積していた。底面付近と上面(炬7)に1~2cmの厚さで焼土範囲が検出された。

この土坑は住居跡と同時期ないし新しいと考えられる。また北東壁に重複するS K 1895は本址を切る奈良~平安時代の土坑である。

このS T 1340の南壁では張り出し状のプランが検出され、炬4・5が検出されたため、他住居跡と重複が考えられた。このプランの検出面からの掘り込みは2~6cm程でS T 1340と同様である。

この張り出しプラン内での柱穴は不明確であったが、S T 1340の炬1~3の軸線上に3基の柱穴、E P 1926・E P 1927・E P 2556が検出され、これらの柱穴と炬1~3はあまりにも近接していることから、時期が異なると考えた。この柱穴と南側の壁外の柱穴、E P 1938・E P 1420・E P 2552・E P 2553が対向すると考えると、これらの柱穴で囲まれる内部にある炬4・5・6の焼土範囲を中心とする住居跡も想定される。

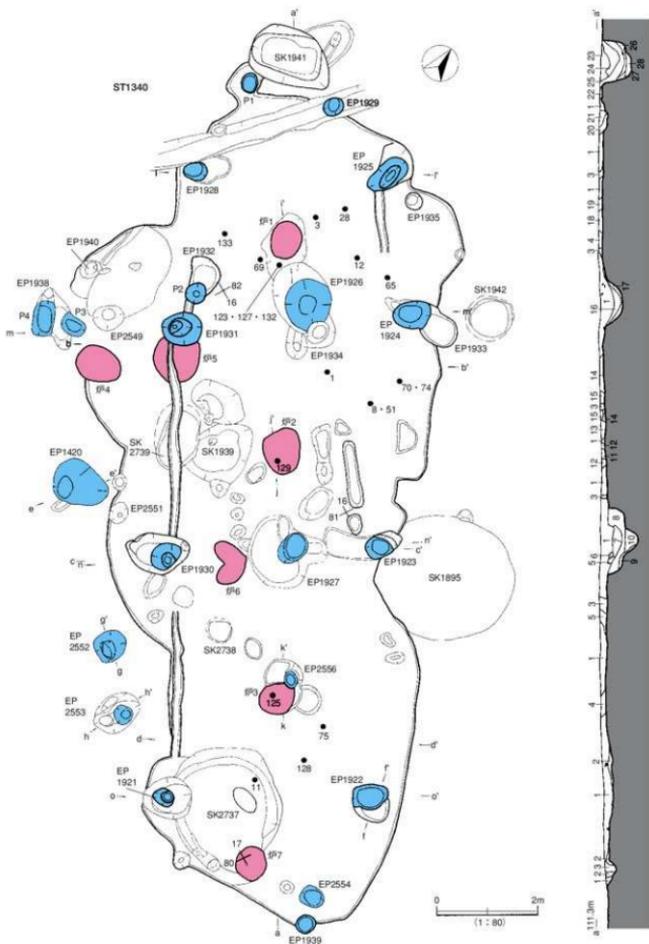
各柱穴の深さはE P 1926 (65cm)、E P 1927 (81cm)、E P 2556 (60cm)、E P 1938のP 3 (64cm)・P 4 (58cm)、E P 1420 (98cm)、E P 2552 (60cm)、E P 2553 (68cm)である。

出土遺物はこの地区の主要時期である前期大木6式土器の他に71~76の中期大木9式土器も出土している。これらの遺物の出土地区は明確な区分けはできず、重複遺構の炬5が大型住居跡の周溝で切られたり、大型住居跡の炬3が重複遺構の柱穴に切られたりと矛盾が見られるため重複関係の検討が必要である。

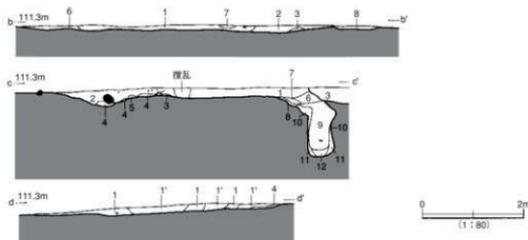
前期と中期の
出土遺物

遺物は図示したように多量に出土している。1の大型の深鉢や2の他は破片資料の土器、円

Ⅲ 縄文時代



第83回 ST1340 住居跡 (1)



ST1340

a-b

- 1 黒褐色土 黄褐色土粒、微細砂粒少量混入、木炭粒、焼土粒をわずかに混入
- 2 黒褐色土 黄褐色土を多く混入
- 3 黒褐色土 同種だが、木炭粒ほとんど含まない
- 4 黒褐色土 黄褐色土を少量混入
- 5 黒褐色土 黄褐色土を少量混入
- 6 黒褐色土 黄褐色土を少量混入
- 7 黄褐色粘質土 暗褐色細砂、白色粘質土を混入
- 8 黒褐色土 黄褐色土粒を多量に混入
- 9 黒褐色土 黄褐色土ブロック、白色粘質土ブロックを多量に混入
- 10 黒褐色土 黄褐色土粒わずかに混入
- 11 黒褐色土 焼土粒少量混入、軟弱、後のピットか
- 12 黒褐色土 焼土粒少量混入、やはり黒褐色土
- 13 黒褐色土 同種だが、木炭粒がやや軟弱
- 14 黒褐色土 黄褐色土粒、黄褐色土を少量混入
- 15 黒褐色土 黄褐色土粒少量混入、やや軟弱
- 16 黒褐色土 木炭粒、黄褐色土粒多く混入
- 17 暗褐色土 黄褐色粘質土ブロックを多量に混入、木炭粒少量混入
- 18 黒褐色土 黄褐色土粒多量に黄褐色土少量混入
- 19 黒褐色土 黄褐色土粒多量に混入、やや軟弱
- 20 黒褐色土 黄褐色土粒、黄褐色土ブロック多量に混入
- 21 黒褐色土 地山か?
- 22 黄褐色土 黄褐色土粒、黄褐色土ブロック多量に混入
- 23 黒褐色土 黄褐色土ブロック少量、同粒子多量に混入
- 24 黒褐色土 木炭粒多く混入、黄褐色土粒少量混入
- 25 黒褐色土 黄褐色粘質土ブロック多量に混入、同粒子も多量に混入
- 26 黒褐色土 黄褐色土粒多量に混入、木炭粒少量混入
- 27 黄褐色粘質土ブロック
- 28 黒褐色土 26と同種だが、やや黄褐色土粒少ない

EP1420

- 1 黒色土と黄褐色粘質土-白色ブロック混入
- 2 暗褐色土 黄褐色粘質土ブロック、同粒子多量に混入
- 3 黒褐色土 黄褐色土粒多量、同ブロック少量混入、木炭粒少量混入
- 4 黒褐色土 黄褐色-白色粘土ブロック多量に混入

EP1922

- 1 黒褐色土 黄褐色土粒を少量、木炭粒、微細砂多量
- 2 黒褐色土 黄褐色土粒多量、木炭粒、焼土粒少量
- 3 黒褐色土 2と同種だが、軟弱
- 4 黒褐色土 黄褐色土粒多量、同ブロック、木炭粒少量混入
- 5 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック多く、同粒子多い

EP2552

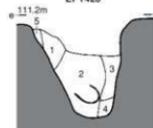
- 1 暗褐色土 黄褐色土粒多量に混入
- 2 黄褐色粘土及びブロック
- 3 黒色土 黄褐色土粒わずかに混入
- 4 暗褐色土 黄褐色土ブロック(2~3cm)と同土を多く混入

ST1340

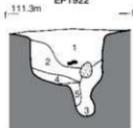
b-b', c-c', d-d'

- 1 黒褐色土 黄褐色土粒微細砂粒少量混入、木炭粒、焼土粒わずかに混入する
- 1' 黒褐色土 1と同種だが、黄褐色土粒子を多量に混入
- 2 黒褐色土 1とはほぼ同じだが、1よりも焼土粒や多い
- 3 黒褐色土 焼土を多く混入
- 4 黒褐色土 黄褐色土を多量に混入
- 5 黒褐色土 何も含まず
- 6 黒褐色土 1と同種であるが、黄褐色粘質土ブロックを少量混入
- 7 黒褐色土 黄褐色土粒わずかに混入 (5と同種)
- 8 黒褐色土 2と同種だが、攪乱層多く軟弱
- 9 黒褐色土 黄褐色粘土-小ブロック (0.5~1cm) 少量混入
- 10 黒褐色土 木炭粒、微砂少量混入
- 11 黄褐色細砂混入
- 12 黒褐色土 黄褐色粘質土ブロック、白色粘土ブロックを多量に混入、木炭粒も少量混入

EP1420



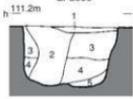
EP1922



EP2552



EP2553

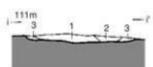


EP2553

- 1 暗褐色土 黄褐色土粒少量混入
- 2 暗褐色土 黄褐色土粒、同小ブロック (1cm) を多量に混入
- 3 黒褐色土 黄褐色土粒、同ブロック (2~3cm) を多量に混入、木炭粒少量混入
- 4 黒褐色土 2よりも多量に黄褐色土ブロックを多量に混入、他は同じ
- 5 黒褐色土 黄褐色土粒少量混入、粘性あり

第84回 ST1340 住居跡 (2)

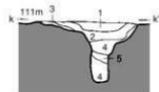
Ⅲ 縄文時代



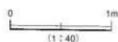
- 竈1
 1 焼土 焼土ブロック多量に混入
 2 焼土 黄褐色土多く混入
 3 焼土 黄褐色土多く混入



- 竈2
 1 焼土 焼土ブロック少量混入

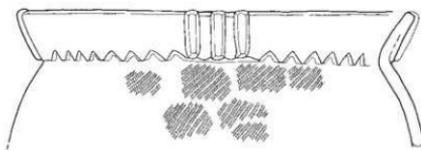
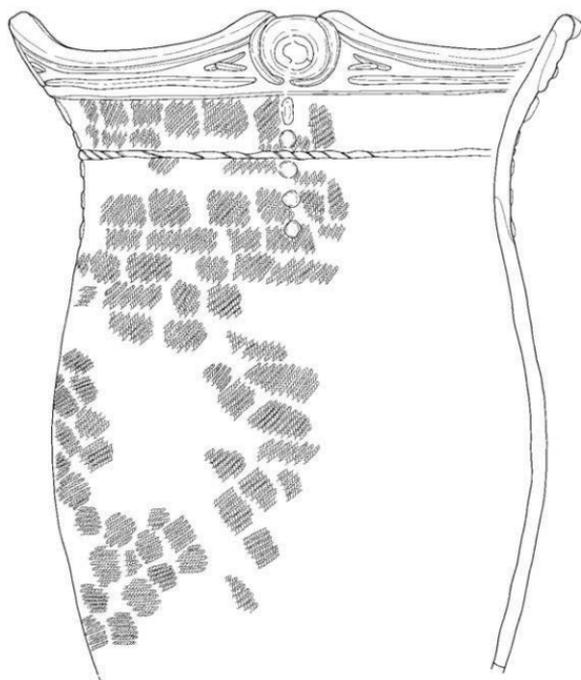


- 竈3
 1 黒褐色土 黄褐色土、焼土粒少量混入
 2 黒褐色土 焼土粒多く混入
 3 暗褐色土 焼土多量に混入
 4 黒褐色土 黄褐色土ブロック、同粒子多量に混入
 5 黒褐色土 黒色粗砂多く混入



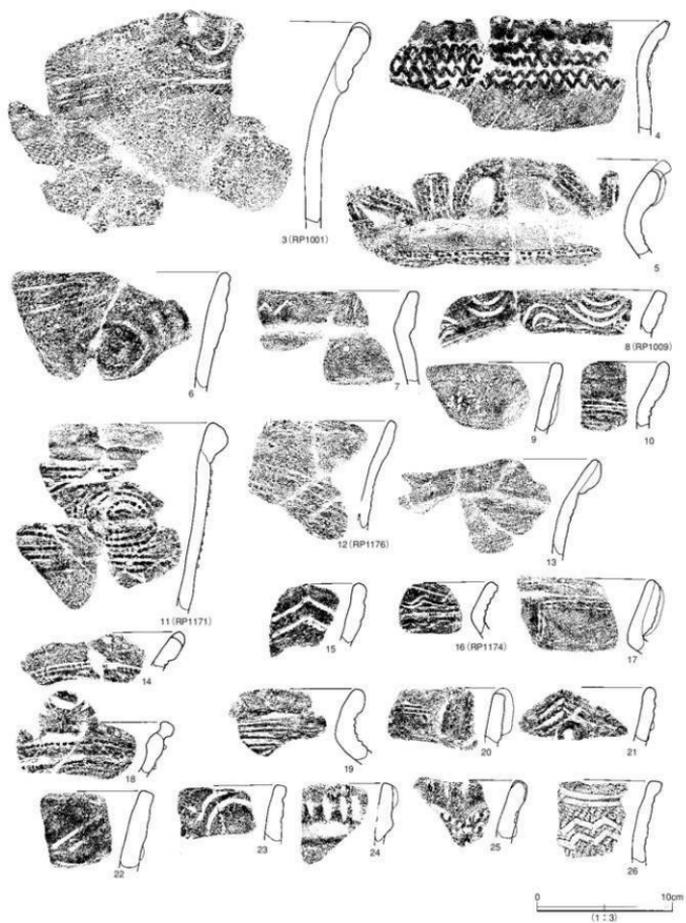
第85図 ST1340 住居跡 (3)

盤状土製品 (68)、石鏃、錐、石匙、矢頭器、掻器、削器などや円盤状石製品 (117~119)、凹石・磨石 (120~131・133)、石皿片 (132) 等がある。この中で61の小破片は興津式土器とみられる。このような土器はS T1340付近のグリッド14・15~82付近でも出土している。この他、各柱穴内から土器片、石器、磨石等が出土。特にE P1420からは大型土器片 (163) などが出土している。



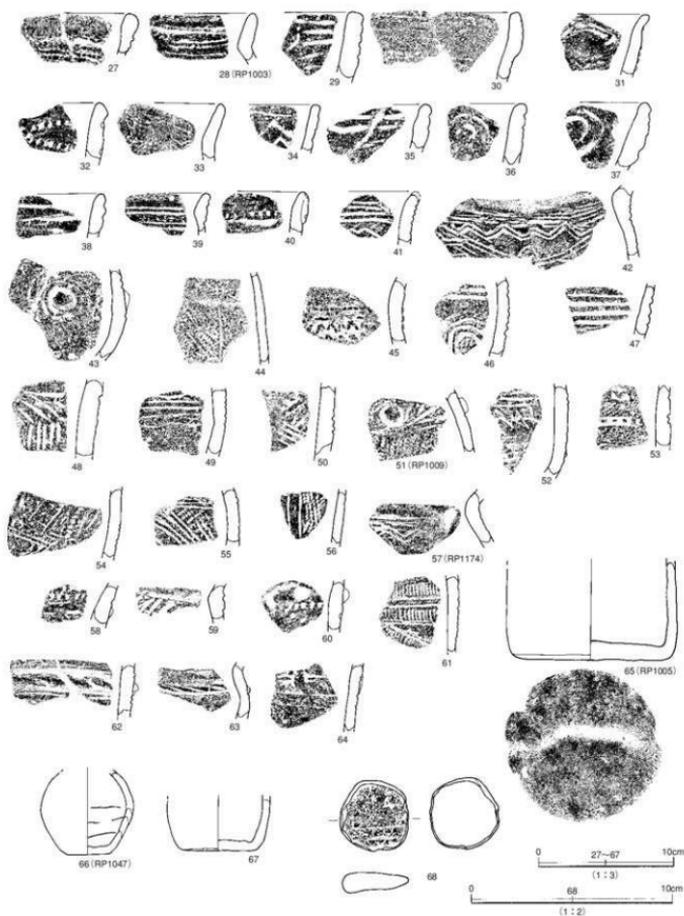
第86図 ST1340 住居跡出土遺物 (1)

Ⅲ 縄文時代



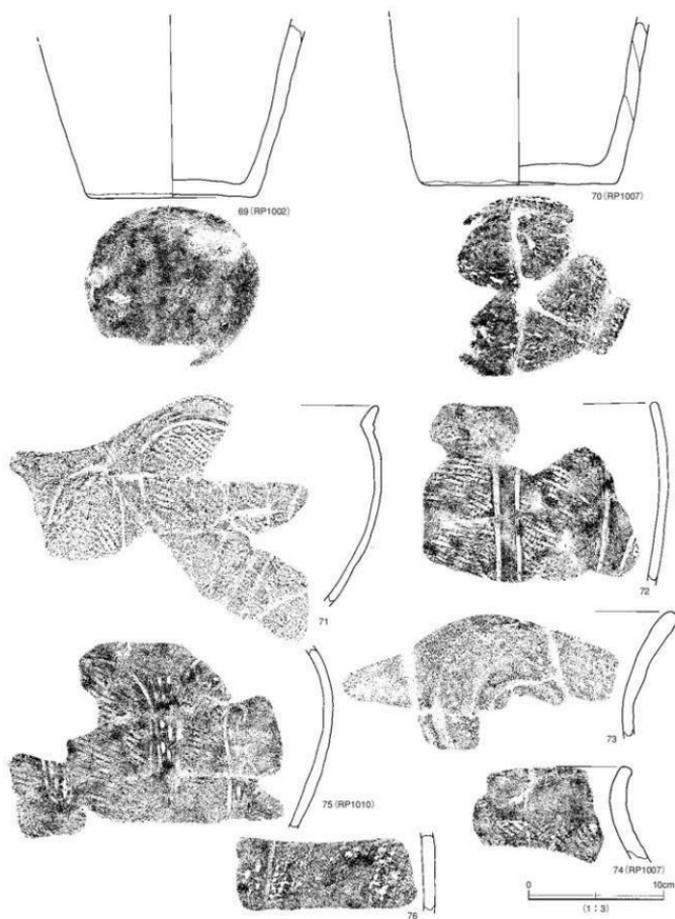
第87回 ST1340 住居跡出土遺物 (2)

Ⅲ 縄文時代



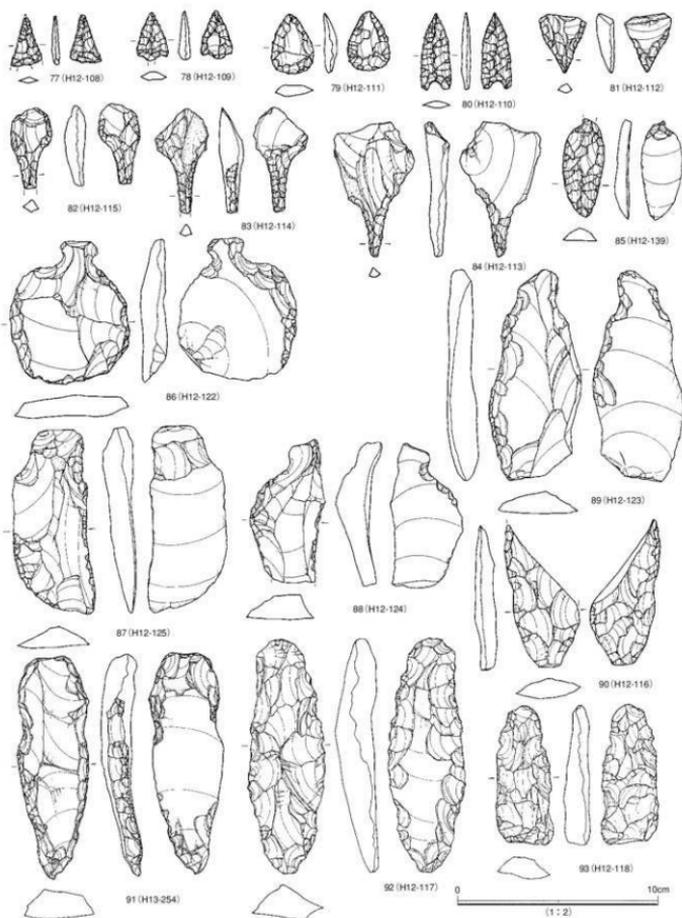
第88回 ST1340 住居跡出土遺物 (3)

Ⅲ 縄文時代



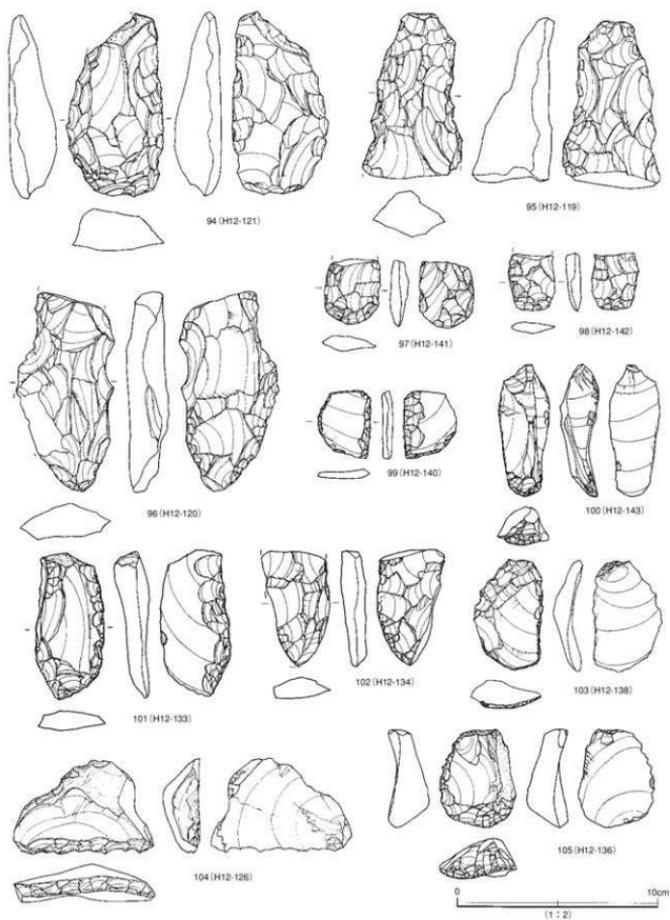
第89回 ST1340 住居跡出土遺物 (4)

III 縄文時代



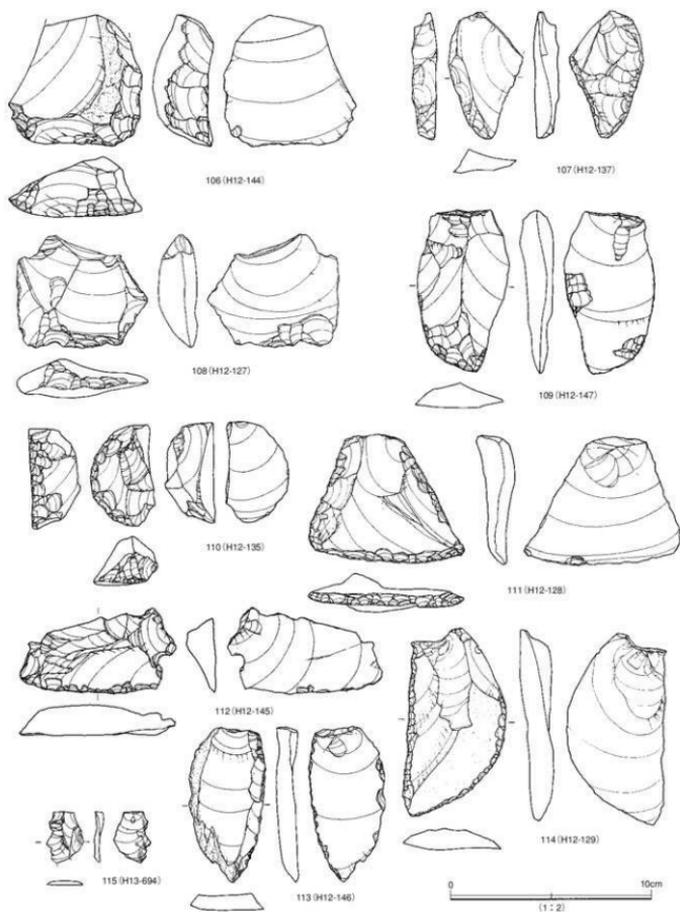
第90図 ST1340 住居跡出土遺物 (5)

Ⅲ 縄文時代



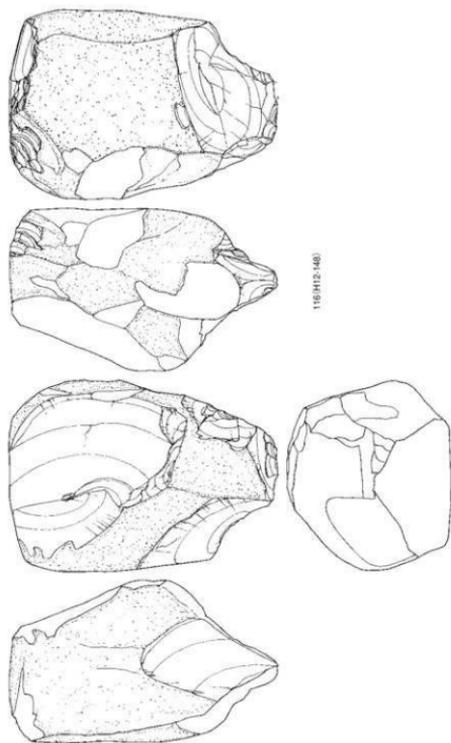
第91図 ST1340 住居跡出土遺物 (6)

III 縄文時代



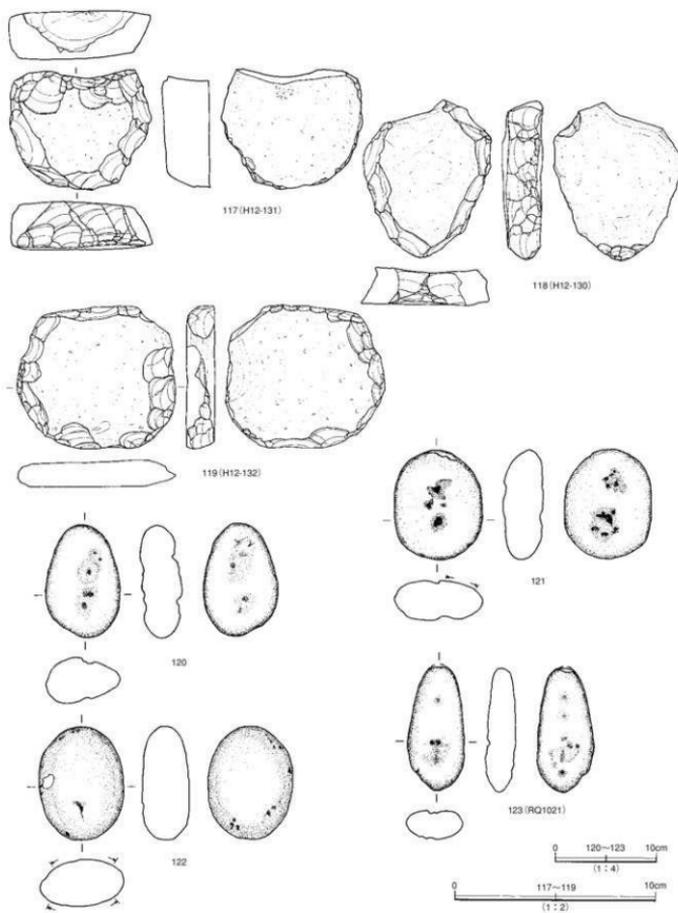
第92図 ST1340 住居跡出土遺物 (7)

Ⅲ 縄文時代



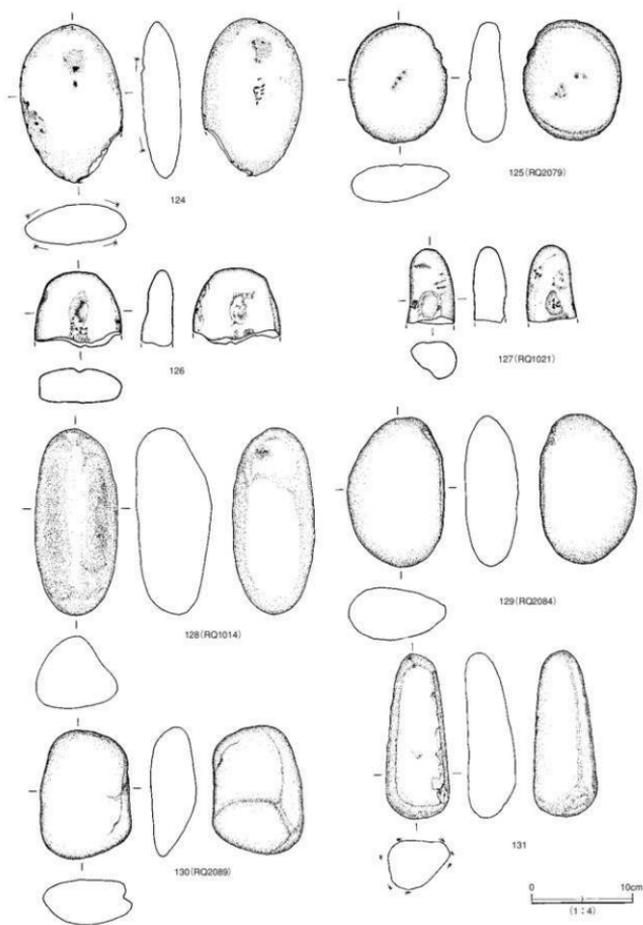
第93図 ST1340 住居跡出土遺物(8)

Ⅲ 縄文時代

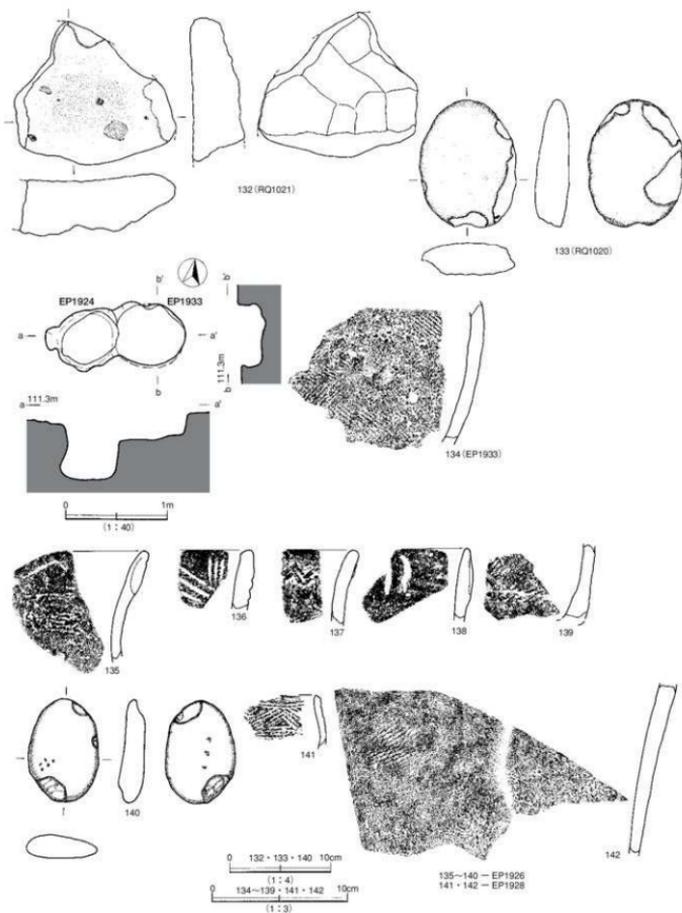


第94図 ST1340 住居跡出土遺物 (9)

Ⅲ 縄文時代

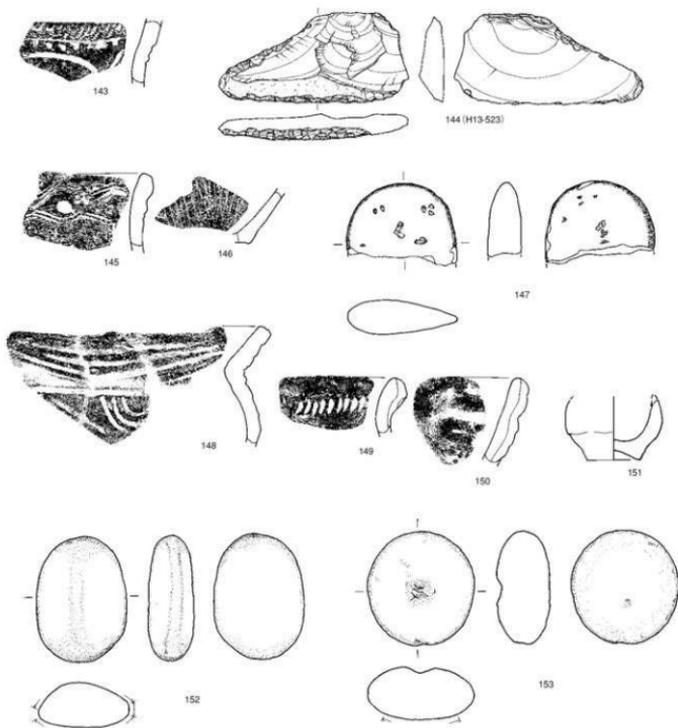


第95図 ST1340 住居跡出土遺物 (10)

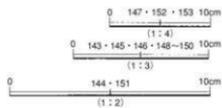


第96図 ST1340 住居跡出土遺物 (11)

Ⅲ 縄文時代

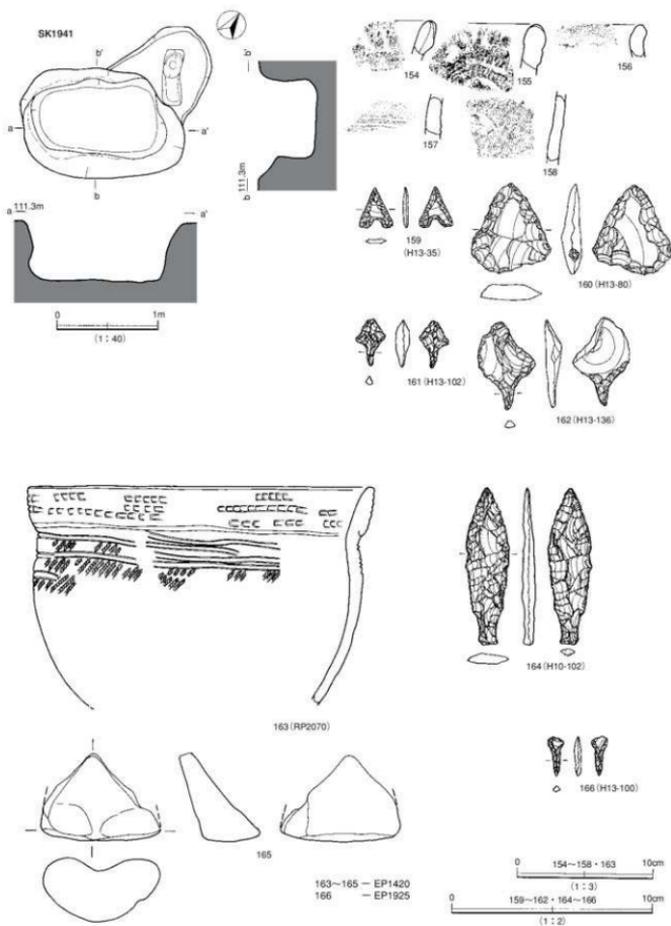


- 143・144 - EP1931
- 145 - EP1932
- 146 - EP1934
- 147 - EP1935
- 148 - EP1936
- 149-151 - EP1938
- 152 - EP1939
- 153 - EP1940



第97図 ST1340 住居跡出土遺物 (12)

III 縄文時代



第98図 ST1340 住居跡・出土遺物 (13)

Ⅲ 縄文時代

S T 1341住居跡 (第99~125区 写遺橋-141~143 写遺物-2・3・43~48・124~129)

グッド9~11-80~84の地山面で確認された。S K 2658・S K 1996・S K 2698・S K 1997・S K 1998・S K 1985等の土坑や多数の小穴と重複する。新旧が判るものは、S K 1985・1998で本址より新しい。また平安時代のS D 1502に切られる。

長軸23.5mの
大型住居

北東部の一部が調査区外に位置するが、西側同様な広がりを持つと見られる。壁及び柱穴をもとにした規模は長軸23.5m、中央部幅5.5mの端が狭まる細長い長方形と考えられる。

覆土は焼土粒・木炭粒・黄褐色土粒を混入する黒褐色土である。多数の遺物がまがまがと出土した。壁は地山黄褐色粘土を掘り込み、壁とする。壁高は5~10cmを測り、立ち上がりは緩やかである。床は地山の粘土層を床とする。床面は緩やかな凹凸があり、堅く締まっている。

柱穴は床面及び住居周囲で約130カ所の柱穴・小穴が検出された。これらは規模や深さからいくつかに分けられる。直径30cm程度の大きい柱穴は主柱穴と思われ、壁内側や周溝に沿うところに位置している。主柱穴は不整形の掘り方を持つものが多く、住居の長軸線に平行する形で配置する。これらを検討するとE P 1889 - E P 2722, E P 1995 - E P 2731, E P 1983 - E P 1992, E P 1989 - E P 1988, E P 1981 - E P 1987, E P 2604 - E P 2605という長軸線をはさむ二つの相対関係が認められ、相対関係のつかめなかった柱穴も主柱穴の可能性が有る。主柱穴は2基の柱穴が並ぶところがあるが、片方は床面から20~30cmの深さである。これは主柱穴に比べ半分以下の浅いものであり、立て替えなどは考え難い。壁周辺や周溝部に位置する小穴は壁際・壁外柱穴と考えられる。柱穴は周溝に沿って周溝内部と壁の内側・外側に認められた。

一列に並ぶ
5基の炉

炉は床面上で9カ所の焼け面が検出されている。特に住居跡の長軸線上に一列に並ぶ炉1~5までが主たる炉址である。堅く焼けており、使用頻度が高かったものとみられる。いずれも地床炉と考えられ、いわゆる「定位置」炉であり、柱間隔で住居跡長軸中央部に配置される。埋設土器などは見られない。この他にピットに重複し小さい焼け面が3カ所ある。

周溝は北側・南側壁際に認められ、幅10~20cm、深さ6~7cm程だが、E P 2607付近は深さ30cmほどの小穴が溝底に見られる。

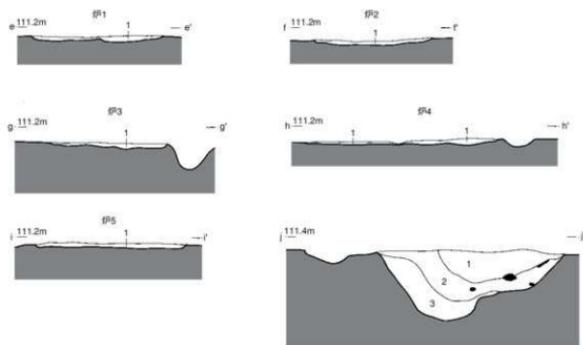
重複して検出されている土坑との新旧関係は判然としない。南側中央付近で、周溝の切れている部分は入口の可能性が有る。S K 1440は壁外に張り出して検出された。S K 2842はこれに對向するピットで、両者共に本址に伴うピットと考える。

遺物は覆土、床面、柱穴から縄文土器と石器が多数出土した。1~7は半載竹管による結節状浮線文・平行沈線文やボタン状貼付文などが施文される台付鉢、深鉢などである。16~154は口縁部に太い沈線が施文されるものや、半載竹管による平行沈線文・結節状浮線文・刺突文、細い粘土粒による貼付文などがみられる。125は半載竹管による半隆起線文、150は刺印文などの朝日下層係の土器である。

173は台付鉢の台部とみられ、半載竹管により施文されているが、このような地文以外の文様が底部付近まで施文されることは稀である。177~291の石器は、石鏃・石鎌・石匙・搔器・削器・石核である。176は円盤状土製品、292~302は円盤状石製品、304~313は凹石・磨石である。314~327までは柱穴、328~344は重複する土坑等からの出土遺物で、深鉢・搔器・石匙・円盤状石製品・凹石・磨石があり、329は胴下半部から急激に外反する深鉢でやや特異である。



Ⅲ 縄文時代



ST1341 a-e', b-b', c-c', d-d'

- 1 黒褐色土 木炭粒、焼土粒、黄褐色土粒少量混入
- 2 黒褐色土 黄褐色土粒、黄褐色土ブロックを少量混入
- 3 黒褐色土 黄褐色土、多量に混入
- 4 黒褐色土 1と何種かが、焼土粒多い
- 5 黒褐色土 黄褐色土粒多く混入、同ブロックわずかに混入
- 6 黒褐色土 1と同種だが、黄褐色土粒多く混入
- 7 黒色土 黄褐色土粒、木炭粒少量混入
- 8 黒褐色土 黄褐色土粒多く、同ブロック少量混入、5と似るが5よりブロック多い
- 9 黒色土 7と同種だが、遺物混入
- 10 黒褐色土 焼土粒、木炭粒少量混入、礫、遺物混入
- 11 黒褐色土 木炭粒、黄褐色土粒多く混入
- 12 黄褐色土 黄褐色土ブロック、黒色土混入
- 13 黒褐色土 木炭、黄褐色土、白色粘土粒ブロック、焼土粒多く混入
- 14 暗黄褐色土 黄褐色土多量に混入
- 15 黒褐色土 溝の底土と同じ黒褐色土、黄褐色土粒
- 16 黒褐色土 黄褐色土粒多く混入
- 17 黄白色土 1を少量混入
- 18 黒色土 黄褐色土粒多く、木炭粒少量、軟弱な土層

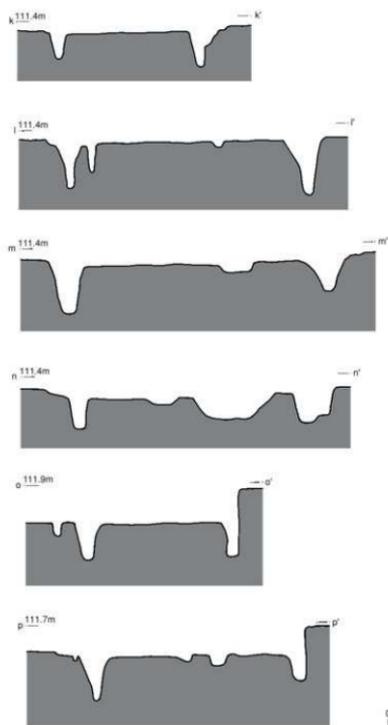
IP1~5 e-e', f-f', g-g', h-h', i-i'

1 焼土 よくしまっている

SK1440 i-i'

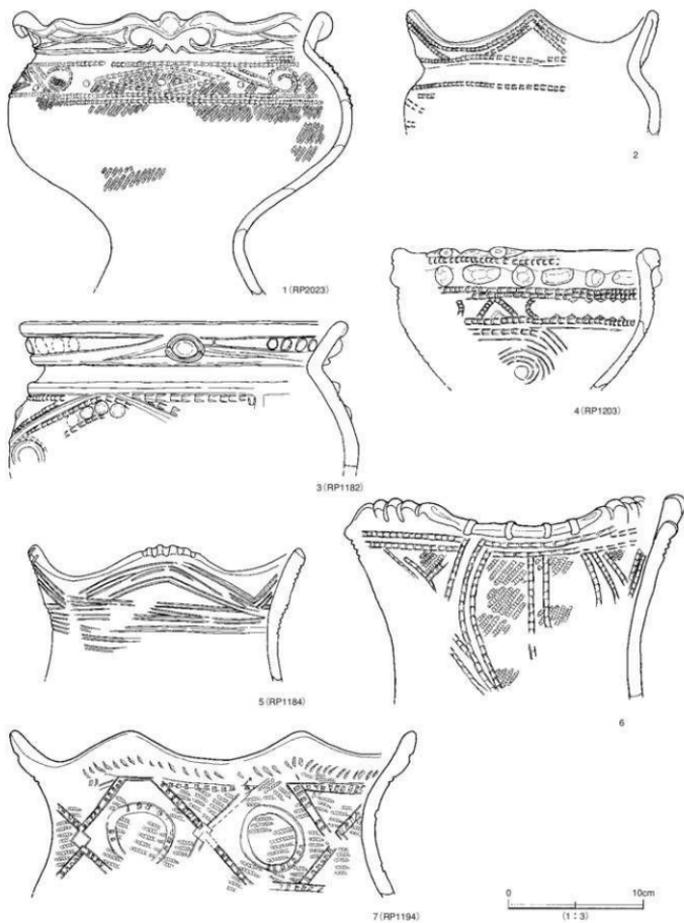
- 1 10YR2/3 黒褐色シルト 地山粒、炭化粒を少量点状に含み、植物根、確含む、柔らかい
- 2 10YR3/4 暗褐色シルト 地山粒、炭化物を点状に含み、遺物、植物根含む
- 3 10YR3/3 暗褐色シルト 地山粒、炭化物左上部から右下部へかけて斜め編状に含み、植物根含む

第100図 ST1341 住居跡 (2)



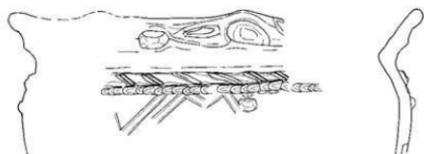
第101回 ST1341 住居跡 (3)

Ⅲ 縄文時代

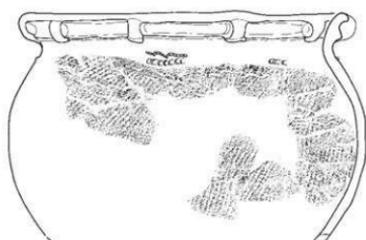


第102図 ST1341 住居跡出土遺物 (1)

Ⅲ 縄文時代



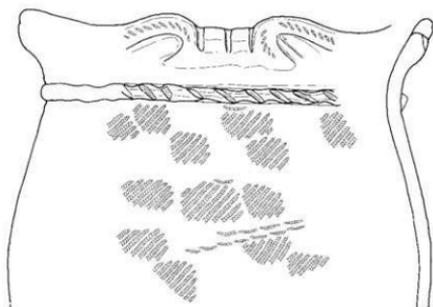
8 (RP1205)



9



10 (RP1030)

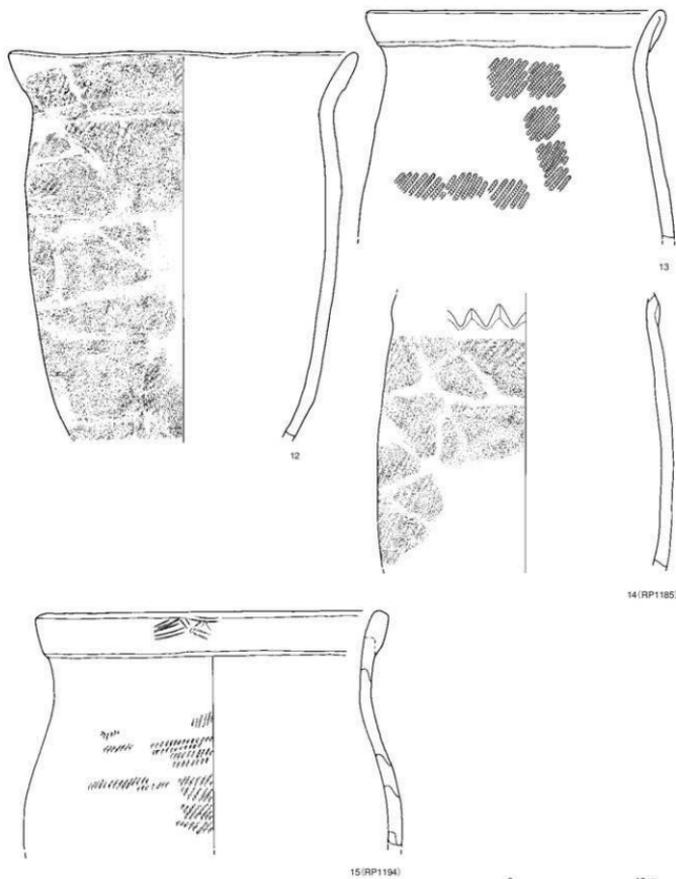


11 (RP1180・1199・2028)



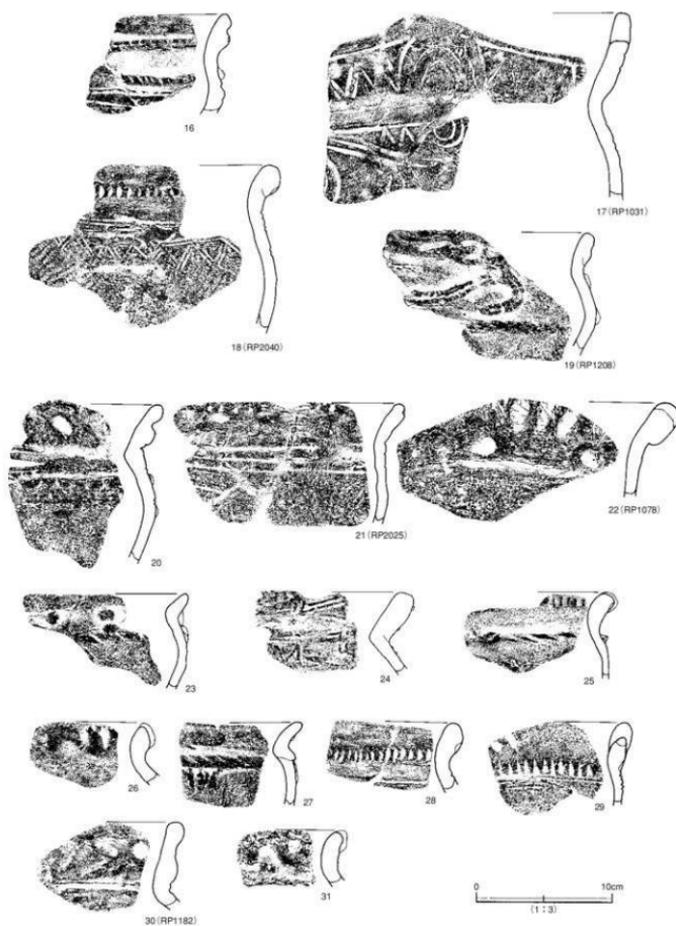
第103図 ST1341 住居跡出土遺物 (2)

Ⅲ 縄文時代



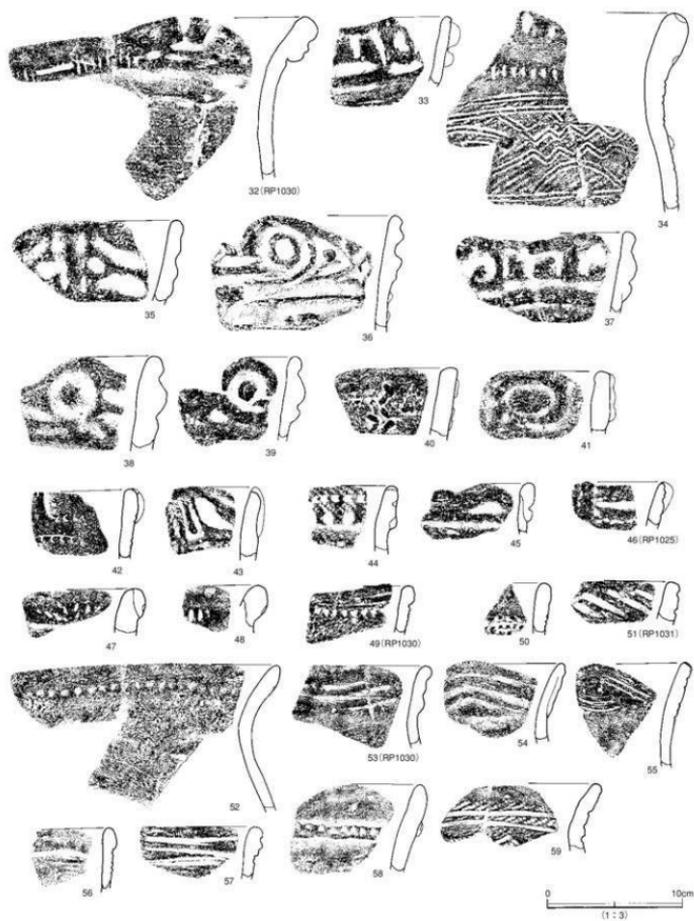
第104図 ST1341 住居跡出土遺物 (3)

III 縄文時代



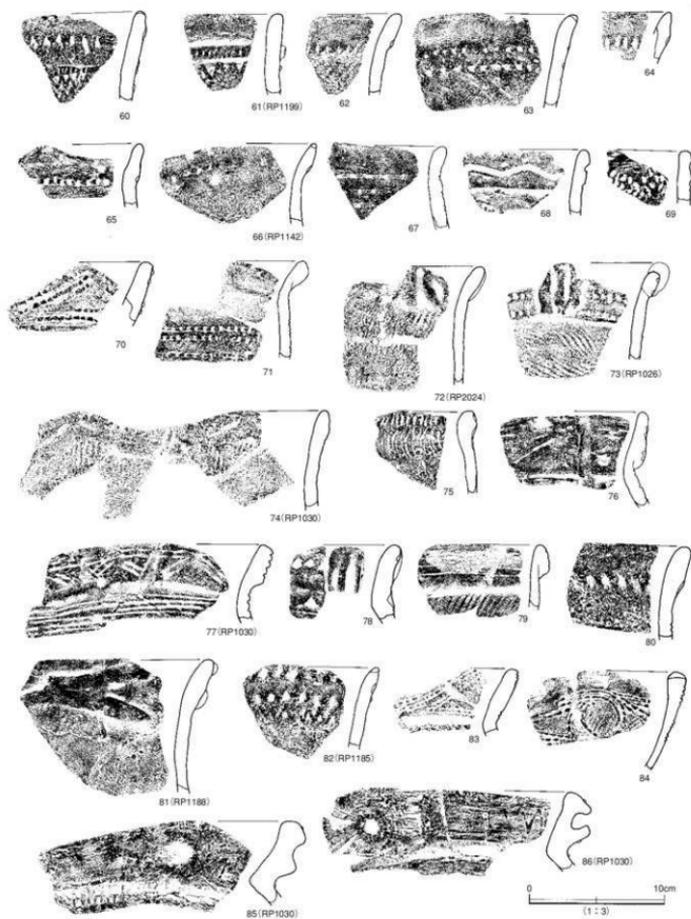
第105図 ST1341 住居跡出土遺物 (4)

Ⅲ 縄文時代



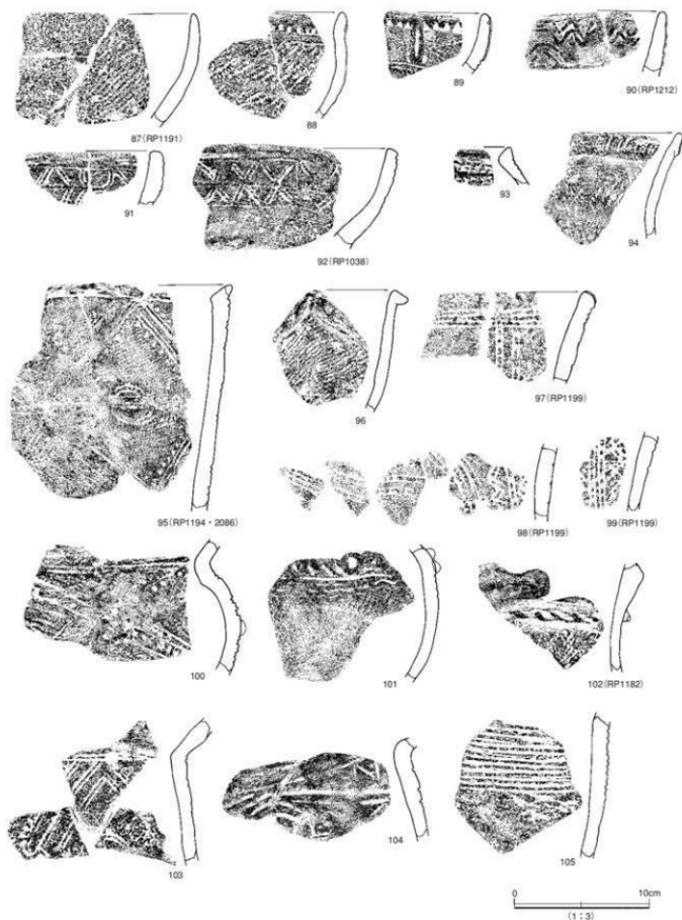
第106図 ST1341 住居跡出土遺物 (5)

Ⅲ 縄文時代



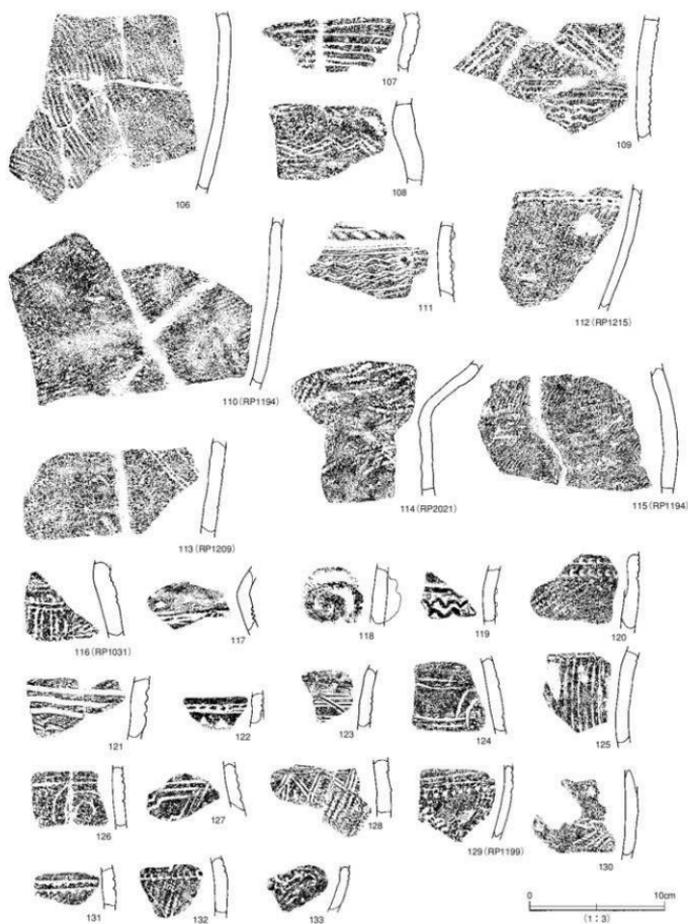
第107図 ST1341 住居跡出土遺物 (6)

Ⅲ 縄文時代



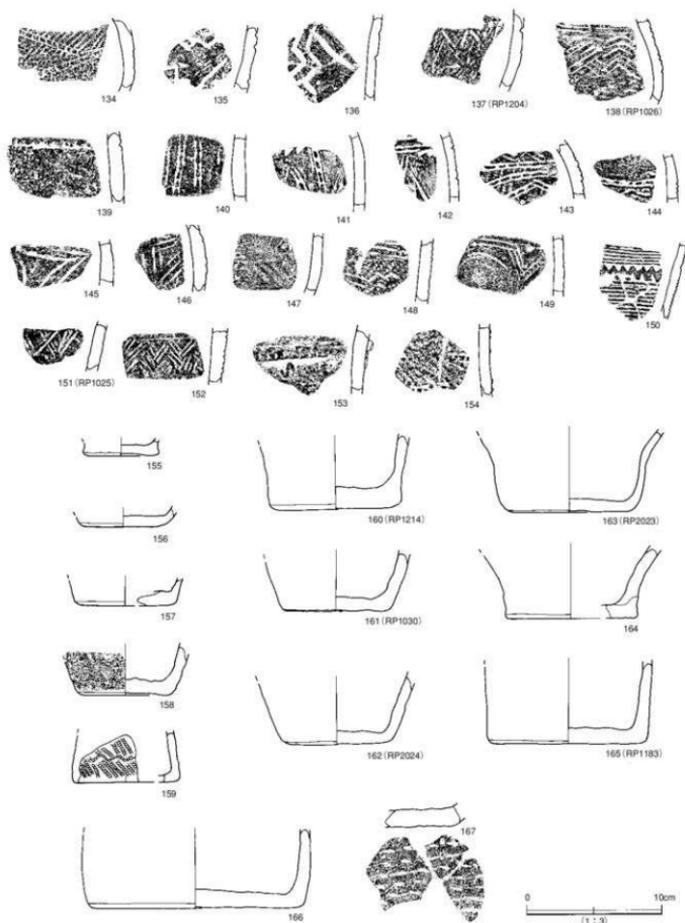
第108図 ST1341 住居跡出土遺物 (7)

III 縄文時代



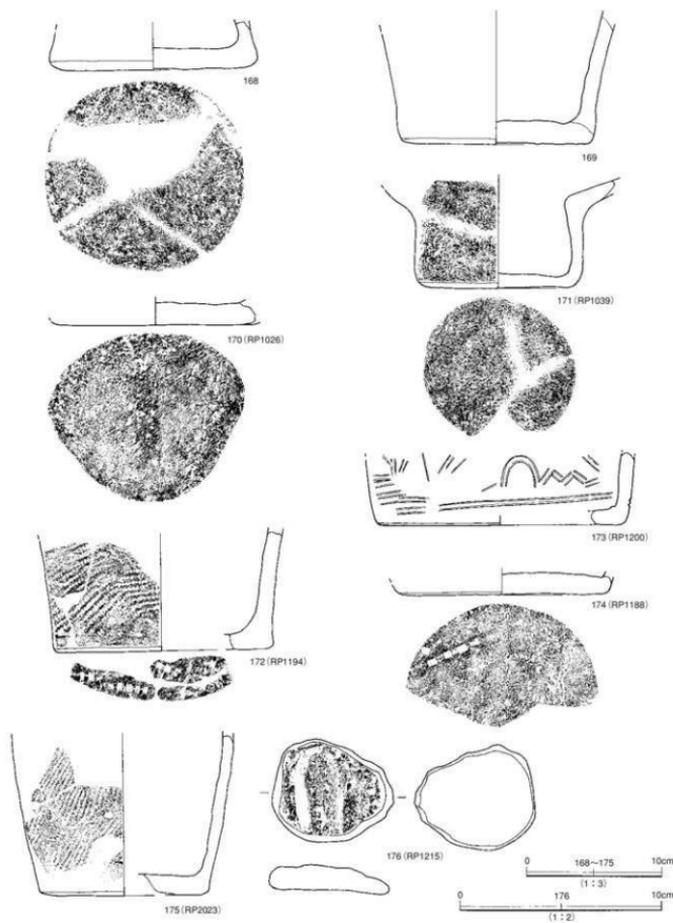
第109回 ST1341 住居跡出土土遺物 (8)

Ⅲ 縄文時代



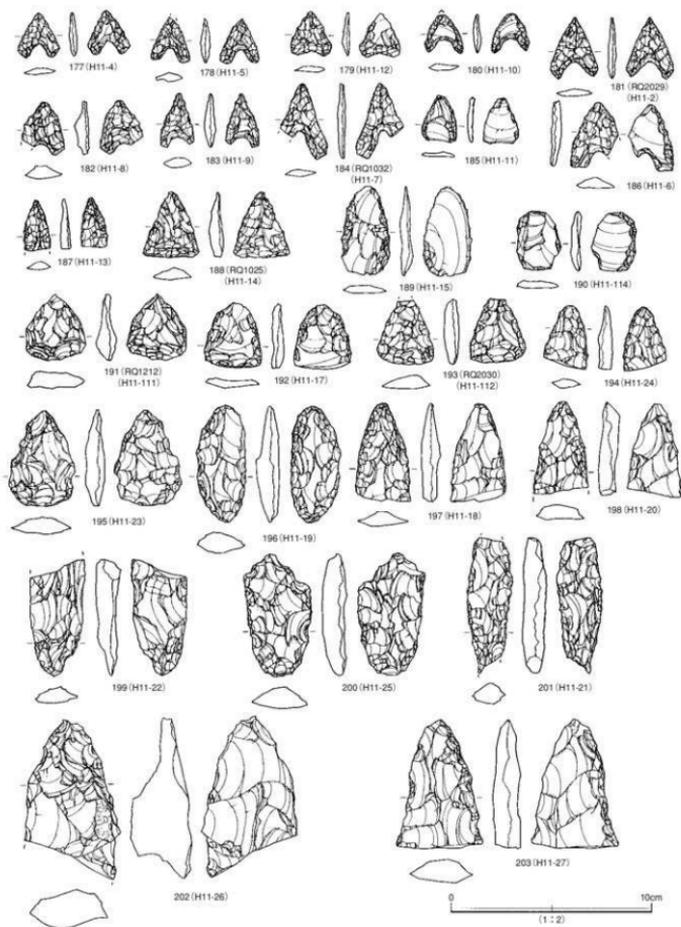
第110図 ST1341 住居跡出土遺物 (9)

III 縄文時代



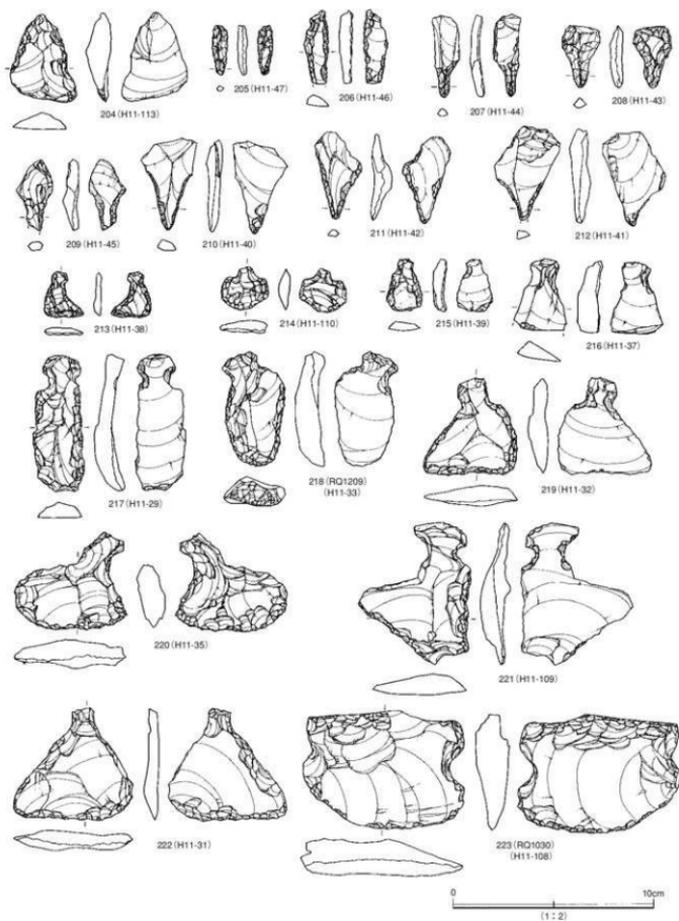
第111図 ST1341 住居跡出土遺物 (10)

Ⅲ 縄文時代



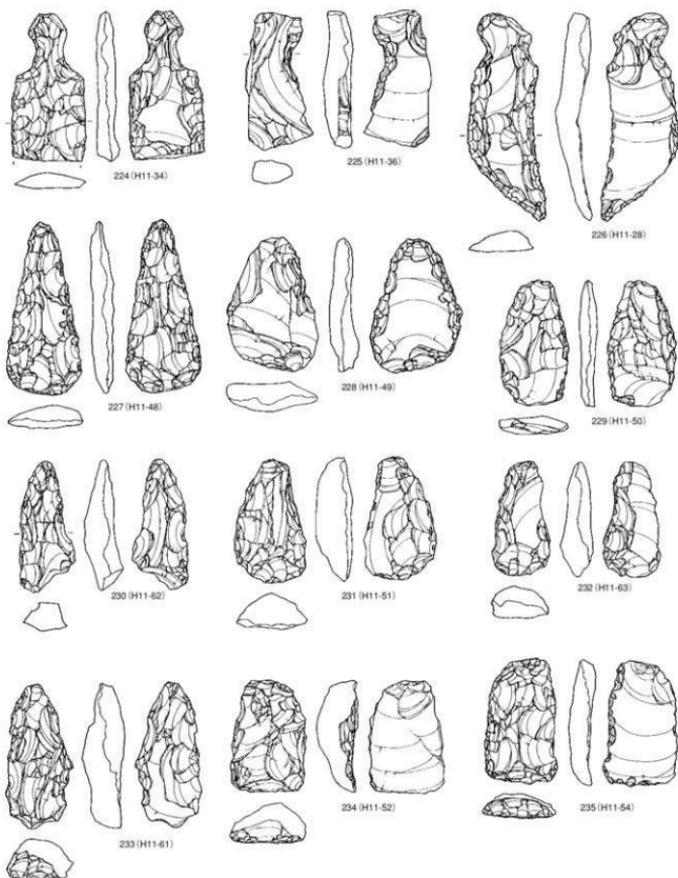
第112図 ST1341 住居跡出土遺物 (11)

Ⅲ 縄文時代



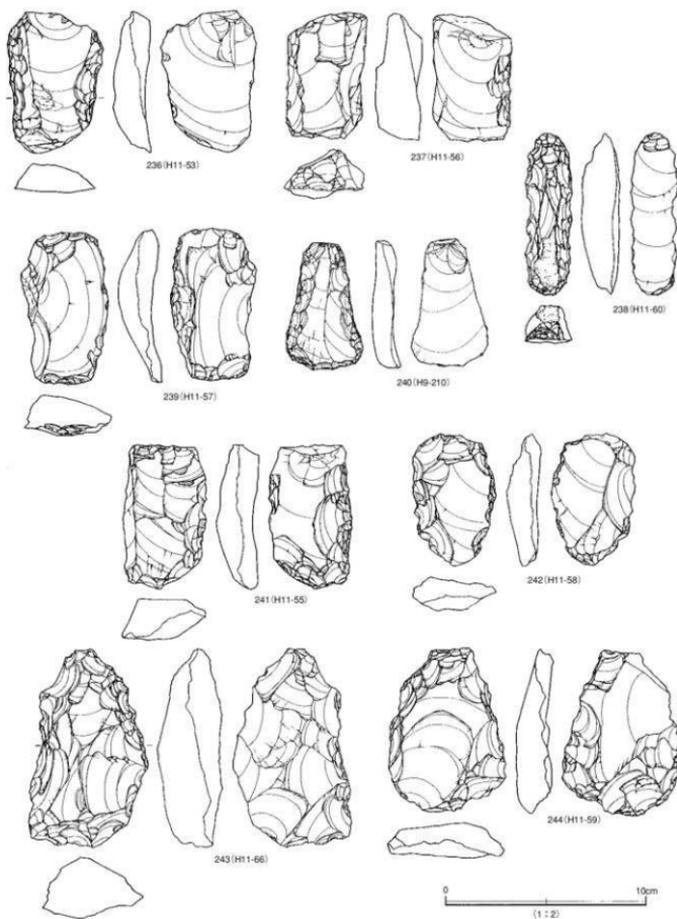
第113図 ST1341 住居跡出土遺物 (12)

Ⅲ 縄文時代



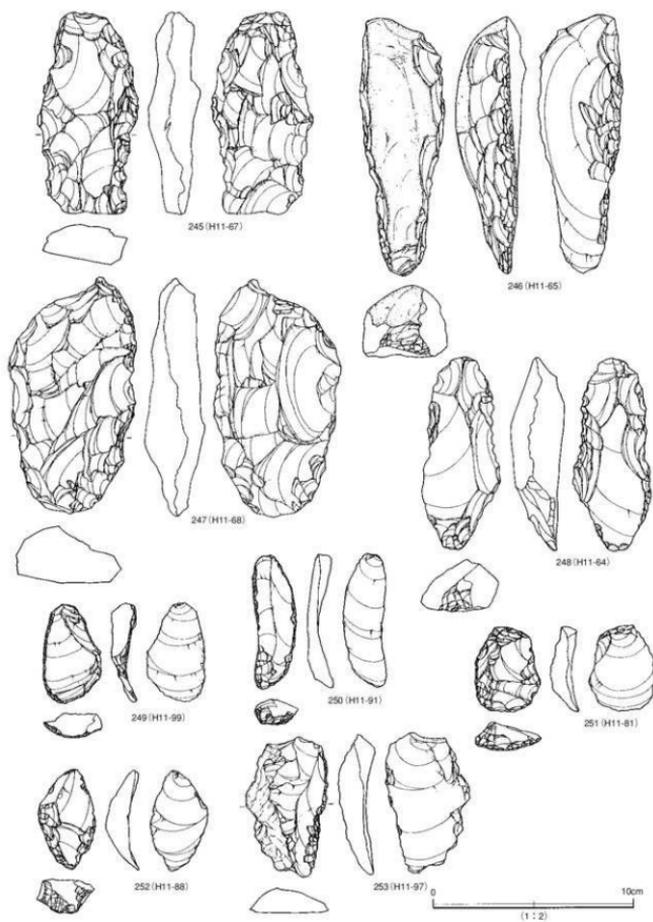
第114図 ST1341 住居跡出土遺物 (13)

Ⅲ 縄文時代



第115図 ST1341 住居跡出土遺物 (14)

Ⅲ 縄文時代



第116図 ST1341 住居跡出土遺物 (15)